

現代朝鮮語の對格と動詞の統辭論

野間 秀樹 (노마 · 히데키)

현대한국어의 對格과 동사의 통사론 <요지>

본고는 -를/-을격을 가진 문장의 統辭論的=連語論的인 연구를 목적으로 한다. 본연구의 방법론적 입장은 언어자료에 立脚한 철저한 <言語事實主義>라고 할 수 있다. 분석에 있어서는 자료의 출현빈도와 共起確率 등, <量>이나 繼起의 <順序>에도 착목하였다. 이런 점에 관해서는 한국어의 문법연구에 있어서는 아직 그 중요성이 거의 인식되지 않고 있으나 이러한 <量的인 分布>의 중요성도 본고가 提起하고 싶은 또 하나의 과제이다.

구체적으로는 1980년대 이후에 출판된 소설과 수기에서 -를격이 쓰여진 용례를 수집, 분석·검토하는 방법을 택하였다. 수집된 용례수는 3044개이다.

수집된 용례 하나하나에 대하여 다음과 같은 관점에서 解析을 가하였다.

1)主體와 主語의 문제. 즉, 주어의 위치, 주어의 명사가 活動體이나 不活動體이나, 주어의 語尾는 <-가/-이>이나 <-는/-은>이나, 등등.

2)-를격의 體言의 문제. 체언의 出現頻度, 체언분류의 範疇, 체언을 수식하는 連體修飾成分의 有無등. 체언분류범주는 野間秀樹(1990b)에 依據하였다.

3)-를격을 가진 用言의 문제. 특히 용언과 체언범주의 분포. 용언이 없는 문장의 문제.

4)-를격과 용언 사이에 나타나는 요소의 문제. 이 요소 중에서 가장 빈도가 높은 副詞類와 體言類別의 構文의 검토.

5)다른 格과의 共起의 문제. 格과 體言範疇의 관계.

6)다른 格과 共起하지 않는 문장의 문제. 共起하기 쉬운 動詞와 共起하기 어려운 動詞의 문제.

이상의 분석을 통하여 본고 제7장에서 -를격의 가진 문장의 통사론적=언어론적인 類型을 定式化하며 동시에 動詞의 單語結合(連語)를 기초로 한 動詞分類를 시도하였다. 他動詞結合의 範疇는 -를격등의 名詞範疇와 밀접한 관계를 유지하면서 他動性이 강한 것부터 약한 것까지 각각 서로 이어져 있고 조건지어져 있음을 밝혔다.

0 はじめに

- 0-1 先行研究について
- 0-2 本研究の目的と方法

1 動作の主体と主語

- 1-1 主語の前置と後置
- 1-2 活動体主語と不活動体主語
- 1-3 前置の主語-가/-이
- 1-4 前置の主語-는/-은や-도など

2 -를格の体言

- 2-1 -를格の体言
- 2-2 -를格の体言分類
- 2-3 -를格にかかる連体修飾成分

3 用言

- 3-1 -를格を持つ用言
- 3-2 用言から見た-를格の体言とのかかわり
- 3-3 用言のない例
- 3-4 -를格の体言範疇の多様性と動詞

4 -를格と用言の間に立つ要素の問題

- 4-1 副詞類が<間の要素>に立つ構文
 - 4-1-1 間の要素が一般の副詞類である構文
 - 4-1-2 間の要素が擬声擬態語である構文
 - 4-1-3 間の要素が-이を持つ副詞である構文
 - 4-1-4 間の要素が動詞の-게副詞形である構文
 - 4-1-5 間の要素が形容詞の-게副詞形である構文
 - 4-1-6 間の要素が形容詞の-히副詞形である構文
- 4-2 体言類が<間の要素>に立つ構文
- 4-3 間の要素の量的な分布

5 主語以外の他の格語尾との共起

- 5-1 前置の-에格と共起する-를格
 - 5-1-1 -에格と抽象名詞+-를格の共起
 - 5-1-2 -에格と活動名詞+-를格の共起
 - 5-1-3 -에格と具体名詞+-를格の共起
 - 5-1-4 -에格と身体名詞+-를格の共起
 - 5-1-5 -에格と人間名詞+-를格の共起
 - 5-1-6 -에と共起した-를格の機能
- 5-2 前置の-로/-으ろ格と共起する-를格
- 5-3 前置の-에서格と共起する-를格
- 5-4 前置の-에게と共起する-를格
- 5-5 前置の-한테と共起する-를格

- 5-6 前置の-한테서と共起する-를格
 - 6 他の前置斜格・後置斜格と共起していない-를格
 - 6-1 斜格と共起しない例とする例
 - 6-2 斜格と共起しやすい動詞
 - 6-3 斜格と共起しにくい動詞
 - 7 -를格を持つ文の統辞論的＝連語論な型と動詞分類
 - 7-1 客体的対象への作用
 - 7-2 客体的対象への主体内的な作用
 - 7-3 主体への再帰的な作用
 - 7-4 客体的対象からの主体への作用
 - 7-5 状況的な対象へのかかわり
 - 7-6 機能動詞
 - 7-7 無意志動詞
 - 7-8 動名詞他動詞
 - 8 おわりに
-

○ はじめに

現代朝鮮語の体言語尾-를/-을は主として対格の格語尾として論じられてきたもので、日本語の語尾-ヲと似た機能を持つものである。本稿はこの-를/-을格を持つ文の統辞論的＝連語論的研究を目的とする。-를/-을格の研究は同時に他動詞の統辞論的研究でもあり、また-를格と動詞の単語結合（連語）を考察する連語論的研究でもある。なお、これ以降-를/-을を単に-를と表記することにする。

0-1 先行研究について

-를については奥田一廣(1976)・李琬鎬(1988)など、これまでもいくつかの示唆的な論考がある。前者は意義素論的な立場からの考察で、-를が名詞相当語句に後続する場合は対格指標であり、それ以外に後続する場合には強調表現であるとした。後者は作例を用いた、生成文法論の影響下にある研究であり、特に-를の「主題化」について執拗に論じている。いずれの論考も-를をめぐる多くの問題を提起しつつも、現代朝鮮語におけるテキストの中で-를が現実にはどのように用いられているかという課題についての考察はまだほんの端緒に留まっているといえる。故に語尾-를をとる体言にはどのような語彙があるのか、また-를と共起する用言にはどのような語彙があるのか、また-를の観点から用言を分類するとどうなるのか、-를と共起する他の格語尾や状況語との関わりはどのようなになっているのか、-를をめぐる語順はどのようなになっているか、総じて、-를が一体どのような単語とどのような関わりの中でどのような意味を実現しているのかという核心的な問題については未だほとんど明らかにされていないというのが実情であった。

0-2 本研究の目的と方法

研究のこうした現状にかんがみて、本稿は言語事実の徹底した観察と分析に研究の基礎を置く。約言すれば、本研究の方法論的な立場は、言語資料に立脚した<言語事実主義>だと言することができる。また、分析にあたっては用例の出現頻度や共起確率を始めとして、<量>や継起の<順序>にも着目する。この<量的な分布>という点について、朝鮮語の文法研究においてはまだほとんどその重要性が認識されていないが、この点もまた本稿が提起したい課題の一つである。こうした方法論に基づき、-을が一体どのような単語とどのような関わりの中でどのような意味を実現しているのかという問題について考察してゆくことにする。考察に際しては、朝鮮語の名詞分類を試みた野間秀樹(1990b)に依拠しながら、名詞の下位範疇にも着目することにする。なお、名詞分類・動詞分類以外の基本的な文法用語は菅野裕臣(1981)による。

研究の基礎となる言語資料としては、1980年以降、現在までに韓国で出版された短編小説と手記を選び、-을の用例を収集した。必要に応じてこの基本資料以外の用例に言及することもあるが、計量的な作業はすべてこの言語資料に基づいた。資料の年代に限ったのは、朝鮮語が特に解放後、様々に変化しつつあるなかで、どこまでも同時代の朝鮮語の様相を明らかにするためであり、また言語史の記述など通時的な観点からの研究にも有用なものとなりうるからである。なお、どれも著しい方言を含むテキストは避け、いわゆる標準語、ないしはソウル方言と認められるテキストを対象にした。資料一覧は本稿末尾に示す。原文のまま引用する場合には略号で出典を<>に入れて頁と共に示す。引用文中の「…」は引用者による省略を意味する。

1 動作の主体と主語の問題

-을が出現する文が表す事態は基本的に<S가・N을・V하다>つまり<Sが・Nを・Vする>という3つの要素を持っている。このうち<Sが>にあたる要素は<Vする>という広義の動作の主体であるが、それが言語上に主語という文成分の形で明示的に現れている例は全体の約半数を占めている：

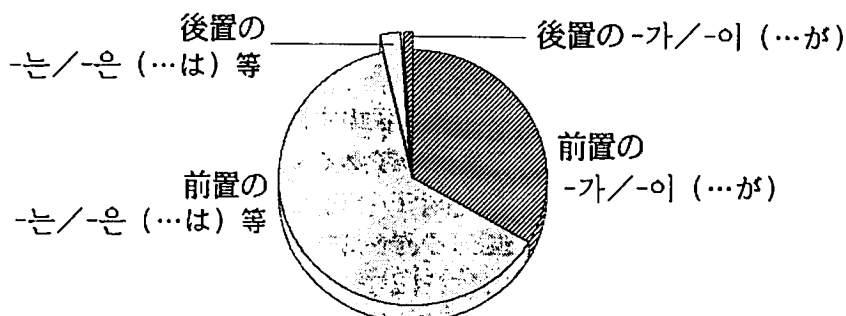
全用例	3044例 100.0%
主体が主語の形で明示的に現れているもの	1534例 50.4%
主体が主語の形で明示的に現れていないもの	1510例 49.6%

1-1 主語の前置と後置

また、-을が出現する文のうち主語が明示的に現れている例には<Sが・Nを・Vする>のように主語が-을の前に位置する主語前置型と、<Nを・Sが・Vする>という主語後置型の2種類の語順が存在する。これらの分布と主語の語尾の種類を見ると次の通りである。なお、本稿では-가/-이 (…が) の他に-는/-은 (…は) や-도 (…も) なども主語になりうると考えている。主語前置型が圧倒的に多く、また-가/-이 (…が) よりも-는/-은 (…は) の類が相対的に多い：

主語前置型	計	1482例
-가/-이 (...が)		512例
-는/-은 (...は) 等		970例
主語後置型	計	52例
-가/-이 (...が)		15例
-는/-은 (...は) 等		37例

【図】主語の前置と後置



1-2 活動体主語と不活動体主語

次に主語を活動体・不活動体という観点から分類してみると次の如くである。なお上述の如く本稿の名詞の分類は野間秀樹(1990b)によるが、ここでは人称代名詞も活動体に入れて考えている：

主語の形で明示的に現れているもの	1534例	100.0%
主語が活動体	1445例	94.2%
主語が不活動体	89例	5.8%

このように不活動体主語は非常に少ないことがわかるが、おそらく論説文や新聞記事の文体ではより多くの不活動体主語が用いられていると思われる。

1-3 前置の主語-가/-이

512例の-가/-이をとった前置の主語は、単数形と接尾辞-들 (...たち) のついた複数形、および어머니などの非尊敬形と어머님などの尊敬形とを便宜上それぞれ別に扱い、異なり語形の数で189語が認められた。そのうち頻度の高いものを見ると次の通りである：

내가 (私が)	47例	아버지가 (父が)	33例
남편이 (夫が)	20例	고모가 (おばが)	16例

미선이 (ミソンが)	15例	시아버지가 (しゅうとが)	13例
그가 (彼が)	13例	여자가 (女が)	12例
전경이 (戰鬪警察が)	11例	어머니가 (母が)	11例
사람들이 (人々が)	9例	누나가 (姉さんが)	9例
할머니가 (おばあさんが)	8例	영희가 (ヨンヒ가)	8例

このように人称代名詞と人間名詞、およびその下位範疇としての親族名詞が上位を占めている。人称代名詞と人間名詞以外で3例以上あるのは、不完全名詞것이 (ものが) と数量名詞하나가 (ひとつが) のそれぞれ3例のみである。リストに上がった語彙はどれも小説・手記という文体の性格を反映しているといえる。

1-4 前置の主語-는/-은や-도など

970例あった-는/-은や-도などをとる前置の主語は、異なり語形数で見ると205語であった。高頻度のものを見ると次の通りである：

나는 (私は)	160例	아버지는 (父は)	77例
여인은 (女は)	65例	남편은 (夫は)	31例
우리는 (私たちは)	28例	저는 (わたくしは)	27例
그는 (彼は)	26例	할아버지는 (おじいさんは)	24例
어머니는 (母は)	23例	영희는 (ヨンヒは)	22例
고모는 (おばは)	19例	여자는 (女は)	16例
신랑은 (新郎は)	16例	동식은 (トンシクは)	15例
그들은 (彼らは)	15例	그이는 (彼は)	14例

ここでもやはり人称代名詞と人間名詞、およびその下位範疇としての親族名詞が上位を占めている。人称代名詞と人間名詞以外で2例以上あるのは、名数詞명은 (…名は) の10例、不完全名詞것은 (ものは) の3例、場所名詞산은 (山は)、団体名詞마을에서는 (村では)、기차는 (汽車は)、活動名詞공부만은 (勉強だけは)、動物名詞갈매기는 (かもめは) のそれぞれ2例のみである。ただし공부만은については主語と認めるかどうかについて異論のあるところであろうし、次の마을에서는は主語というよりは主体を表す働きを持つ状況語と考えるのが妥当かもしれない：

그것이 고모한테서 흘러나오는 경제력에 힘입은 것임을 알았을 때 마을에서는 시기와 비난을 감추지 못했다. <호박52>

それがおばから流れ出る経済力に負うものだということを知ったとき、村では妬みと非難を隠せなかった。

また、-가/-이の主語は話し手を表すものが相対的に少なかったのに対し、-는/-은の主語は話し手を表すものが多い。上に挙げた나는・우리는・저는だけでも215例、970例の-는/-은の前置主語のうちの23.5%に上る。

2 -를 格の体言

2-1 -를 格の体言

-를을 格をとる体言にはどのようなものがあるのだろうか。資料中の3044例のうち、体言の異なり語形数は1415語であった。頻度別の分布を見ると次の通り：

【表】-를 格の体言の頻度別分布

50以上	2語
40以上	3
30以上	6
20以上	12
10以上	43
5以上	114

具体的な単語別で見ると、最も頻度の高い体言は、前置の主語でも1位であった人称代名詞の나で64例、全3044例中の2.1%である。ここでも小説・手記という文体の特徴が現れている。他の活動体名詞は10位までには여자(女)があるのみで、残りは全て不活動体である。第2位は不完全名詞것(もの・こと)、3位に活動名詞말(ことば・こと)、以下일(こと・仕事)、집(家)、事物代名詞그것(それ)と続き、7位になってようやく여자(女)が現れる。対格を持つ文では《活動体-가 不活動体-를 動詞》という型が最も典型的なわけである。

語形別に高頻度のものを表で見ることにする。その際、-를 格のそれぞれの単語と単語結合の頻度が最も高い用言を併記しておく：

【表】-를 格の体言の単語別頻度とその体言と共起する高頻度の用言

-를 格の体言	頻度	頻度累計	うち高頻度の用言
나를(私を)	64	64	위하다(ためだ)6例、부르다(呼ぶ)3例
것을(ものを)	57	121	알다(知る)10例、보다(見る)8例
말을(ことばを)	45	166	하다(言う)8例、듣다(聞く)6例
일을(ことを)	38	204	하다(する)9例、잊다(忘れる)3例
집을(家を)	34	238	나가다(出る)19例、비우다(空ける)2例
그것을(それを)	31	269	보다(見る)2例、지켜보다(見守る)2例
여자를(女を)	28	297	보다(見る)3例、끌어내다(引っ張り出す)2例
손을(手を)	23	320	잡다(握る)9例、대다(つける)2例
소리를(声を)	23	343	지르다(あげる)5例、내다(出す)4例
생각을(考えを)	22	365	하다(する)14例、떠올리다(浮かべる)3例
문을(ドアを)	22	387	열다(開ける)5例、닫다(閉める)3例
눈을(眼を)	22	409	뜨다(開ける)10例、감다(閉じる)2例

얼굴을 (顔を)	19	428	하다 (する) 4例、보다 (見る) 2例
사람을 (人を)	19	447	만나다 (会う) 2例、보다 (会う) 2例
고모를 (おばを)	19	466	떠올리다 (思い浮かべる) 3例、맞다 (迎える) 3例
아버지를 (父を)	18	484	부르다 (呼ぶ) 3例、돕다 (手伝う) 2例
고개를 (首を)	16	500	끄덕이다 (頷く) 3例、젓다 (振る) 3例
몸을 (体を)	15	515	싣다 (載せる) 2例
머리를 (頭・髪を)	15	530	조아리다 (下げる) 3例、늘어뜨리다 (垂らす) 2例
입을 (口を)	13	543	다물다 (つくむ) 3例、열다 (開く) 3例
옷을 (服を)	13	556	벗기다 (脱がせる) 4例、입다 (着る) 2例
버스를 (バスを)	13	569	타다 (乗る) 7例、기다리다 (待つ) 2例
남편을 (夫を)	13	582	2例以上の用言はない
하나꼬를 (花子を)	12	594	대하다 (対する) 2例
첫날밤을 (初夜を)	12	606	보내다 (過ごす) 3例、치르다 (終える) 2例
술을 (酒を)	12	618	마시다 (飲む) 9例
사랑을 (愛を)	12	630	고백하다 (告白する) 3例、확인하다 (確認する) 2例
미선을 (ミソンを)	12	642	만나다 (会う) 3例
저를 (わたくしを)	11	653	쳐다보다 (見つめる) 2例
이야기를 (話を)	11	664	하다 (する) 5例、들려주다 (聞かせる) 2例
샤워를 (シャワーを)	11	675	하다 (する) 7例、끝내다 (終える) 3例
물을 (水を)	11	686	마시다 (飲む) 3例
마음을 (心を)	11	697	하다 (させる) 3例、보다 (見る) 2例
담배를 (煙草を)	11	708	사다 (買う) 3例、피우다 (吸う) 2例
그를 (彼を)	11	719	보다 (会う) 2例
결혼을 (結婚を)	11	730	하다 (する) 6例
화를 (怒りを)	10	740	내다 (出す) 10例
자신을 (自分を)	10	750	위하다 (ためだ) 3例、포기하다 (捨てる) 2例
얘기를 (話を)	10	760	하다 (する) 5例、듣다 (聞く) 2例
신발을 (靴を)	10	770	걸다 (掛ける) 2例、내려다보다 (見おろす) 2例
노래를 (歌を)	10	780	부르다 (歌う) 5例、듣다 (聞く) 3例
깜둥이를 (黒人を)	10	790	데리다 (連れる) 3例、만나다 (会う) 2例

体言と用言の組み合わせの確率が最も高いのは、〈화를 내다〉(腹を立てる)で、화를という形が現れたら資料中では100.0%の確率で用言は내다가来ているということになる。そのほかに組み合わせ確率の高い結合では〈술을 마시다〉(酒を飲む)の75.0%、〈생각을 하다〉(思いをする)と〈샤워를 하다〉(シャワーをする)の63.6%が目立つ。

2-2 -을格の体言分類

体言を名詞分類の範疇別に見てみる。それぞれの範疇ごとで最も頻度の高い体言を同時に示しておく。なお、身体名詞は具体名詞の、親族名詞は人間名詞のそれぞれ下位範疇であるが、ここでは別に取り出して扱ってある：

【表】-을格の体言の体言範疇別頻度と各範疇ごとの代表的な体言例

体言範疇	頻度	全体に対する比率：頻度累計		代表例
抽象	585	19.2%	585	화 (怒り) 10例、돈 (お金) 8例
活動	485	15.9%	1070	말 (ことば) 45例、생각 (考え) 22例
具体	449	14.8%	1519	문 (ドア) 21例、옷 (服) 13例、버스 (バス) 13例
人間	243	8.0%	1762	여자 (女) 28例、사람 (人) 19例
身体	233	7.7%	1995	손 (手) 23例、눈 (眼) 22例
場所	183	6.0%	2178	집 (家) 34例、마을 (村) 8例
人称代名詞	112	3.7%	2290	나 (私) 64例、저 (わたくし) 11例
親族	105	3.4%	2395	고모 (おば) 19例、아버지 (父) 18例
事柄	91	3.0%	2486	일 (こと) 38例、소식 (便り) 7例
現象	87	2.9%	2573	소리 (声・音) 23例、한숨 (ため息) 9例
不完全	79	2.6%	2652	것 (もの) 57例、줄 (こと) 5例
物質	73	2.4%	2725	술 (酒) 12例、물 (水) 11例
体言形	57	1.9%	2782	것임 (ものであること) 6例、울음 (泣き) 4例
数量	49	1.6%	2831	하나 (1つ) 5例、원 (ウォン) 4例
時間	46	1.5%	2877	첫날밤 (初夜) 12例、밤 (夜) 8例
事物代名詞	44	1.5%	2921	그것 (それ) 31例、그것들 (それら) 5例
位置	38	1.2%	2959	속 (中・奥) 7例、앞 (前) 6例
文	32	1.1%	2991	
団体	18	0.6%	3009	학교 (学校) 4例、나라 (国) 3例
性質	14	0.5%	3023	행복 (幸福) 5例、고독 (孤独) 1例
営為	14	0.5%	3037	구경 (見物) 4例、낚시질 (釣り) 2例
場所代名詞	4	0.1%	3041	이곳 (ここ) 1例、(あっち) 1例
動物	3	0.1%	3044	말 (馬) 1例、맹수 (猛獣) 1例

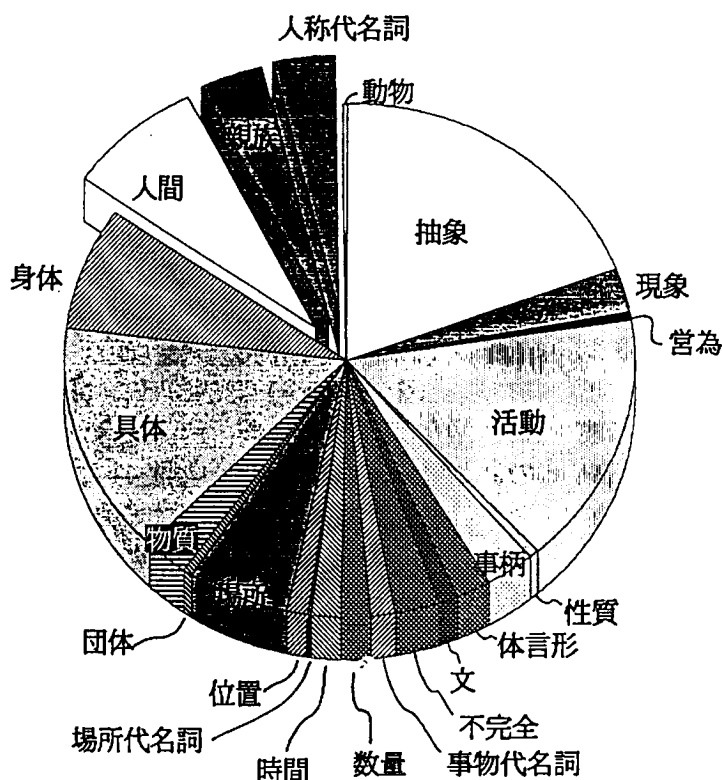
抽象名詞・活動名詞・具体名詞の上位3種で全体の50.0%を占める。なお活動名詞とは不可算名詞のうち、-하다をつけて動詞になり、かつ<-를/-을 가다>をとらない名詞である。また人間名詞とその下位範疇である親族名詞を合計すると348例11.4%、さらに人称代名詞まで加えて人間を表す体言を総計すると460例で15.1%となる。代名詞の小計は160例で5.3%である。

「体言形」としたのは用言のⅡ-口、Ⅰ-기などの体言形である。また「文」とした

のは<어떻게 하고들 있는지를> (みんなのようになっているのかを) や<「아무도 나를 위해 울지 마라」를> (「誰も私のために泣くな」を) などの類である。李玟鏞(1988)などで論じられた<마음이 든든을 하다> や<그는 동생을 미워를 한다> のような例は資料中には見いだせなかった。

体言範疇の割合を図で確認することにする：

【図】-를格の体言範疇の割合



2-3 -를格体言にかかる連体修飾成分

-를格の体言には<그 여자를> (その女を) のように短い連体修飾語がかかっているものがあり、また次の例のように長い連体修飾成分がかかっているものもある：

민수가 실망과 분노와 연민과 선망으로 뒤범벅된 복잡한 表情을 지을 것이다. <호박31>

ミンスが失望と怒りと憐憫と羨望でごっちゃになった複雑な表情を作ることだろう。

このような連体修飾成分がついている例がどのくらいあるかを見ると次の如く、連

体修飾成分のある方がやや少ない：

連体修飾成分のある例	1243例	40.8%
連体修飾成分のない例	1801例	59.2%
計	3044例	100.0%

もちろん것(もの・の)など不完全名詞には全て連体修飾成分がかかっているが、それ以外でも、後にたびたび触れるように、この連体修飾成分の問題はしばしば-을格の体言をめぐる問題に関わってくることになる。

3 用言

3-1 -을格を持つ用言

<Sが・Nを・Vする>の<Vする>にあたる用言の検討に移ろう。用言の異なり語数は925語で、1415語であった体言に比べ少ない。頻度別の分布を見ると次の通りである：

【表】-을格を持つ用言の頻度別分布

31(10%) 以上の用言	7語	569例	18.7%
30 以上の用言	8	599	19.7%
20 以上の用言	19	859	28.2%
10 以上の用言	56	1361	44.7%
5 以上の用言	122	1811	59.5%
4 以上の用言	156	1939	63.7%
3 以上の用言	251	2224	73.1%
2 以上の用言	397	2516	82.7%
1 以上の用言	925	3044	100.0%

単語別では하다が286例、全3044例中の9.4%と飛び抜けた頻度を示している。第2位は보다の92例、3.0%である。また高頻度の上位8語で全体の19.7%を占める。以下に、頻度が10例以上の用言を見てみることにする。なお、この表では「쓰다(使う+書く)」のように同音異義語はまとめて扱っている：

【表】-을格を持つ用言の単語別頻度

用言	頻度：頻度累計
하다(する・言う・させる)	286：286
보다(見る・会う)	92：378

타다 (乗る+もらう)	41 : 419
받다 (受ける・得る)	40 : 459
알다 (知る・わかる)	39 : 498
위하다 (ためだ)	37 : 535
내다 (出す)	34 : 569
듣다 (聞く)	30 : 599
사다 (買う)	28 : 627
쓰다 (使う+書く)	28 : 655
잡다 (握る・掴む)	27 : 682
들다 (挙げる+入る)	26 : 708
만나다 (会う)	25 : 733
나가다 (出る)	23 : 756
치다 (打つ)	21 : 777
먹다 (食べる)	21 : 798
가지다 (持つ)	21 : 819
향하다 (向かう)	20 : 839
만들다 (作る)	20 : 859
쳐다보다 (見つめる)	19 : 878
부르다 (呼ぶ・歌う)	19 : 897
用言なし	19 : 916
찾다 (探す・見つける)	18 : 934
마시다 (飲む)	18 : 952
주다 (与える・くれる)	17 : 969
보내다 (送る)	17 : 986
생각하다 (考える)	16 : 1002
열다 (開く)	15 : 1017
던지다 (投げる)	15 : 1032
느끼다 (感じる)	15 : 1047
바라다 (望む)	14 : 1061
믿다 (信じる)	14 : 1075
뜨다 (開ける)	14 : 1089
두다 (置く)	14 : 1103
놓다 (置く)	14 : 1117
꺼내다 (取り出す)	14 : 1131
기다리다 (待つ)	14 : 1145
떠나다 (発つ)	13 : 1158
내리다 (下ろす・下げる)	13 : 1171
끝내다 (終える)	13 : 1184
풀다 (解く)	12 : 1196
포기하다 (放棄する)	12 : 1208

잊다 (忘れる)	12 : 1220
잃다 (失う・なくす)	12 : 1232
부리다 (使う)	12 : 1244
벗다 (脱ぐ)	12 : 1256
지르다 (声を上げる)	11 : 1267
시키다 (させる)	11 : 1278
떠올리다 (思い浮かべる)	11 : 1289
따르다 (従う)	11 : 1300
가다 (行く)	11 : 1311
좋아하다 (好む・好きだ)	10 : 1321
얻다 (得る)	10 : 1331
벗기다 (脱がせる)	10 : 1341
걸다 (掛ける)	10 : 1351
갖다 (持つ)	10 : 1361

3-2 用言から見た-를格の体言とのかかわり

更に頻度の高い用言について、用言と-를格の体言範疇とのかかわりなどを中心に見てみることにする。

3-2-1 하다

用言別の出現頻度の上からは286例あり、全3044例中でも9.4%を占め、この하다(する)が群を抜いている。体言分類の観点からは、3044例中の-를格に出現した全23種のうち20種の範疇が出ていて、用言中最も体言範疇が多岐にわたっている。하다の-를格として現れていないのは時間名詞・動物名詞と場所代名詞だけであるが、このうち動物名詞が最も現れにくいかもしれない。하다の-를格の体言はカテゴリーが多様ではあるが、量的には活動名詞が209例と、286例中の73.1%を占め、著しい片寄りを見せている。野間秀樹(1990b)では、不可算名詞のうち、-하다をつけて動詞になり、かつ<-를/-을 가다>をとらない名詞を活動名詞と呼び、かつ<活動名詞+-하다>の形式の動詞を活動動詞と名づけたが、それに従えば<-를 하다>の多く例は活動動詞の名詞部分が分離したものである可能性が高いわけである。活動名詞以外では구경(見物)のように<구경을 하다>(見物をする)と<구경을 가다>(見物に行く)の両方を取りうる営為名詞、および可算名詞である事柄名詞일(こと・仕事)や<싫은 얼굴을 하다>(嫌な顔をする)の얼굴などの身体名詞が目立つが、それ以外の可算名詞類が立つと多くは使役動詞的な用法の하다となっている。

하다のとる-를格の名詞中の第1位は생각(考え)で14例あった。それらを見ると<그런 생각을>(そういう考えを)のような短い連体修飾語に始まって、<오늘 학교 가는 걸 포기하겠다는 생각을>(今日学校に行くのをあきらめようという考えを)のような長いものに至るまで、全ての생각に連体修飾成分がかかっているところから、この名詞생각は資料中では事実上不完全名詞的に用いられていることがわかる。同様

に第2位の일(こと・仕事)も9例中8例が、3位の말(ことば・こと)も8例中7例が、また얼굴(顔)も4例全てが連体修飾成分を伴っている。このように明らかに連体修飾成分を伴い易い単語や単語結合が存在するわけで、今後こうした方面の研究も必要であろう。

なお、하다とは別に생각하다(考える)という形の用言は16例あった。菅野裕臣(1981)は생각하다: 생각을 하다というこの種の用言を分離用言と呼んでいる。-를格を持つ하다にはこの分離用言が非常に多い。活動動詞・営為動詞はその定義上、基本的に分離用言である。また<생각을 하다>(思いをする・考える)の하다のように、語彙的な意味の大部分を体言に預けて、自らは専ら文法的な機能だけを受け持つ動詞を機能動詞と呼ぶが、この하다は典型的な機能動詞としての用法が非常に多い。<活動名詞+-를 하다>と<営為名詞+-를 하다>における하다は基本的に機能動詞である。機能動詞の問題については、ドイツ語に関してはHelbig/Buscha(1977)、日本語に関しては村木新次郎(1991)参照。分離用言と機能動詞はそれぞれ異なった観点からの名づけであるが、共通する問題も多く、更なる研究が必要である。

3-2-2 보다

用言中第2位の보다(見る・会う)は92例であった。하다とは異なって-를格の体言の頻度分布のばらつきが大きい。最も多い名詞것을(ものを)でも8例で、次に多い体言でも3例になってしまう。なお하다には것을は1例も出ていなかった。抽象名詞16例、人間名詞14例、具体名詞12例、不完全名詞9例、人称代名詞8例、活動名詞・親族名詞が各6例といったように、体言範疇別でも16種類が出ている。いわば보다は人間でも事物でも多種多様なものを보다することができ、かつ頻度的にも多様なカテゴリーのものを보다するのである。ただし知覚動詞として物理的に対象を「見る」という意味では体言に人間名詞や具体名詞などの可算名詞が立つことがほとんどで、抽象名詞や活動名詞との結合では基本的に知覚動詞以外の用法になる。<결정을 보다>

(決定を見る)は経験動詞、<시험을 보다>(試験を受ける)は処理動詞、<선을 보다>(見合いをする)は共同動詞といった具合である。なお、それら動詞の範疇については7章において詳述する。最後の例のように、보다も機能動詞的用法・分離動詞的用法が多い動詞である。

3-2-3 타다

타다는著しい多義語であって、どこまでが同じ単語か簡単には峻別しがたいのでまず便宜上全てここに入れて見てみる。このうち、日本語の「乗る」で訳せる例では-를格は버스(バス)7例・택시(タクシー)4例・그네(ブランコ)など具体名詞がほとんどで1例のみ動物名詞말(馬)がある。現象名詞붐(ブーム)では「乗ずる」、場所名詞비탈(坂)では「伝わる」の意である。また-를格に抽象名詞월급(月給)・퇴직금(退職金)が来ると「もらう」で訳出できるが、この「もらう」の意のグループだけは明らかに同音異義語であろう。また抽象名詞との結合では<부정을 타다>(不浄に祟る)の例もある。このように-를格の体言範疇によってある程度同音異義語の区別が可能な動詞があることに注目しておきたい。体言分類では計7種の範疇

があった。

3-2-4 받다

第4位받다(受け取る)はvoiceにも関わる動詞で、40例あった。-를格の体言は감동(感動)・조사(調査)など活動名詞が17語19例、도움(助け)や벌(罰)など抽象名詞が6語11例、편지(手紙)など具体名詞が7語7例、人間名詞・現象名詞・事物代名詞が各1例と、받다自体は頻度が高いにも拘らず名詞範疇分布の片寄りが激しい。받다のうち人間名詞+-에게や人間名詞+-한테と共起するものは活動名詞と抽象名詞を-를格にとるもののみで、5例ある。後述の用言範疇別では、受身動詞・享受動詞・受容動詞等に用いられる。

3-2-5 알다

第5位알다(知る・わかる)39例は他の他動詞と趣を異にしている、不完全名詞것을(ものを)が10例、것인가를(ものであるのかを)など文相当のものが5例、것임을(ものであることを)など体言形が7例と、これも片寄りが目立つ。抽象名詞も9語10例と多いが、活動名詞は1例のみである。사실(事実)など事柄名詞は4例、人間名詞は1例、人称代名詞1例であった。

なお、対義語의 모르다(知らない・わからない)は9例あり、うち7例までが不完全名詞줄・것・바をとるものであった。カテゴリー別では他に人称代名詞と文相当のもの、計3種である。모르다それ自体は非常に頻度の高い動詞であるが-를格を伴った모르다の頻度はそう高くないことがわかる。

ところで、알다と모르다は將然判断の接尾辞I-겠-を伴って現れる頻度が非常に高い動詞で、基本資料中でも알겠-6例、모르겠-19例が出現する。ところが-를格を伴う알다と모르다の場合には모르다にわずか1例あるのみである。つまり-를格を伴う알다・모르다にはI-겠-がつくものが少ないわけである。これは資料中でも4例が1語文であったことからわかるようにI-겠-を終止形に持つ文は1語文や2語文といった短い発話の文の占める割合が多いこと、またそれらは書きことばより話しことばに多く現れるということ、および<-는지/-는지/-근지 모르겠다>の頻度が高いということと説明できよう。野間秀樹(1988)p.68および野間秀樹(1990a)pp.14-15参照。

3-2-6 위하다

37例あった위하다は위해18例、위해서13例、위한と위하여がそれぞれ2例で、「…のために・…のための」の意の後置詞的な用法が35例と圧倒的である。-를と위하다の間に他の単語が入り込んだ例も1例もない。2例だけは「산 자가 죽은 자를 위하지 못하고」(生きている者が死んだ者を思いやれず)という他動詞的な用法であった。体言を見ると나(私)など人称代名詞10例、남(他人)など人間名詞8例、아빠(パパ)など親族名詞5例、更に不完全名詞자(者)4例まで入れると人間を表す名詞が27例、全<-를 위하다>の73.0%を占める。これ以外は마련(準備)など活動名詞が4例、性質名詞행복(幸福)が2例などである。なお、不完全名詞以外の通常の名詞が-를格であるものは23例あって、うち60.9%に連体修飾成分がついているのに対し、代

名詞が-를格である11例には1つも連体修飾成分がついていない。

3-2-7 내다

第7位の내다(出す) 34例中では抽象名詞が20例と圧倒的である。このうち10例は<화를 내다>(腹を立てる)という単語結合である。<짜증을 내다>(かんしゃくをおこす)の結合も2例あった。この体言화や짜증には連体修飾成分のついた例は1つもなく、また-를と내다の間に他の単語が入り込んだ例もない。どちらも分離用言でかつ機能動詞結合的である。現象名詞はどれも連体修飾成分がついていて소리(声) 4例と목소리(声) 1例があった。また사직서(辞表)など具体名詞も5例ある。

3-2-8 듣다

第8位の듣다(聞く)は全部で30例、말(ことば) 6例・얘기(話)・부탁(頼み)などの活動名詞が11例、소리(音) 4例など現象名詞が8例、소식(消息)など抽象名詞が5例、等々計7種の体言範疇がある。なお、듣다の-를格体言の26例、86.7%に連体修飾成分がついていることが注目される。

3-2-9 사다

第9位사다(買う)は28例。담배(煙草) 3例など、具体名詞が10語15例、안약(目薬)など物質名詞が4例、집(家)など場所名詞が4例、その他<저녁을 사다>(夕食をおごる)や<호감을 사다>(好感を買う)など5例がある。なお、与格の-에게; -한테; -께(…に)と共起しているのは<저녁을 사다>の1例のみで、「買う」の意味の사다で共起しているものは1例もなかった。この28例の他に사주다(買ってやる)の形式で出ているものが2例あるが、そちらの方は2例とも与格と共起している。

3-2-10 잡다

잡다(掴む・握る)は27例で11位。손(手) 9例など身体名詞が11例、허리띠(ベルト)など具体名詞が4例、<갈피를 잡다>(要領を得る)・<생트집을 잡다>(言いがかりをつける)・<포즈를 잡다>(ポーズをとる)・<군기를 잡다>(軍規を正す)といった抽象名詞との単語結合が4例、その他7例。なお손には9例中6例までが人間名詞+-의(…の)の形式の連体修飾成分がついている。잡다のうちの19例、70.4%の文に主語が明示されているが、全3044例中での50.4%という数値に比べ高く、やや特異である：

「고생 많았지?」/ <남편이> 여인의 손_을 잡았다. 그 순간 여인은 그 전경아이를 떠올렸다. <신발309>

「苦勞したろう?」/ <夫が>女の手_を握った。その瞬間、女はあの戦闘警察の少年のことを思い浮かべた。

잡다、特に<손을 잡다>などは、他人の身体へのかかわりを表す動作であること、またこの単語結合が現れるテキスト内の位置を見ると、上の例のように直前の文から

は予測できない、全く新しい突然の事態を描く位置になっていることが多いので、主語を明示し、登場人物間の関係を明確にする必要があるであろう。

3-2-11 쓰다

第9位쓰다는「使う」「書く」の同音異義語で、合わせて28例である。「使う」の意の쓰다가用いられた14例では<신경을 쓰다>（気を使う）や<악을 쓰다>（わめく）など抽象名詞との結合がほとんどで、わずかに존댓말（丁寧な言葉遣い）などの活動名詞と場所名詞골방（小部屋）があるのに対し、「書く」の意の13例では、ほとんど가답장（返事）・대본（台本）などの具体名詞という対比を見させている。なお<모자를 쓰다>（帽子をかぶる）の結合が1例あった。どちらの쓰다も連体修飾成分のあるものは少ないが、とりわけ「使う」の쓰다には1例、7.1%しかなく、連体修飾成分のついた体言と結合する確率が最も低い用言の1つとなっている。

3-2-12 들다

들다는26例あるが、うち団体名詞학교（学校）と結合した例のみ「入る」の意の同音異義語で、残り25例は全て「挙げる・持つ」の意。-를格の体言としては술잔（杯）などの具体名詞が15例、60%を占める。この15例のうち連体修飾成分のあるものは3例、20.0%しかない。そのほか상황（状況）など抽象名詞5例が例などを「挙げる」意で使われている。身体名詞は3例とも<고개를 들다>（顔を上げる）の単語結合であった。残りは문제（問題）など事柄名詞2例である。

3-2-13 만나다

만나다（会う）25例の内訳は、18例が人間名詞、3例が人称代名詞、1例が親族名詞で、計22例88.0%が人間を表す体言と結合している。その他は버스（バス）、전부（全部）および数量名詞3주（3週間の間）である。最後の例は期間を表す-를の用例である。

3-2-14 나가다

나가다（出る）23例のうち20例は場所名詞집（家）19例と대문（門）1例との結合である。これは「…を出て行く」あるいは「…から出て行く」の意で-를格の体言は主体が元来存在した場を示す。残りの3例は「…しに出かける」の意であるが、こちらは営為名詞오징어잡이를（いか釣りに）と事柄名詞일을（仕事に）2例との結合で、-를格の体言は主体が出かけていって行かう営みを表しており、-를格の体言のカテゴリによって見事な対比をなしている。後述するように、前者は離脱動詞結合、後者は外出動詞結合である。

連体修飾成分のついた例は2例しかない。なお、집との結合は全て同じテキストから採取されたものであるのでテキストが多様になれば나가다自体の出現順位はより落ちるものと考えられる。

3-2-15 치다

치다も同音異義語の多い動詞であり、どこまでを同じ動詞とするかは辞書によっても相当な差がみられるほどであるが、その多くは語彙的な意味の大部分を-를格の名詞に負っており、치다それ自体は機能動詞的な色彩が強い。全21例のうち-를格の名詞は10種類のカテゴリーに及んでおり、とりわけ頻度の高い名詞群はない。〈줄행랑을 치다〉(高飛びする)など抽象名詞との単語結合が5例で最も多かった。連体修飾成分があるものは3例のみで、非常に少ない。

3-2-16 먹다

먹다(食べる・食う)も21例。〈집을 먹다〉(おじける)や〈나이를 먹다〉(年を取る)・〈쇼크를 먹다〉(ショックを受ける)・〈더위를 먹다〉(暑さに負ける)など抽象名詞との結合が8例、아침밥(朝飯)や저녁(夕食)など活動名詞が6例、약(薬)など物質名詞が4例、その他3例であった。なお他動性という観点から見ると、物質名詞との結合では一般の他動詞と似た性質を示すが、抽象名詞と먹다との結合は語彙的な意味の上では他動性が非常に弱く、ある意味では主体にとっては受動的でさえある。連体修飾成分は4例にのみついている。

3-2-17 가지다

가지다(持つ・所有する)もやはり21例あった。미련(未練)・여유(余裕)・배짱(度胸)など抽象名詞が9例、사진(写真)・재떨이(灰皿)など具体名詞が4例、눈(眼)・치아(歯)という身体名詞が2例、봉우리(峰)・직장(職場)の場所名詞が2例、その他人間名詞아이(子供)と時間名詞시간(時間)があった。カテゴリーは7種に及んでいるがどれも所有の意味から大きく逸脱するものはない。連体修飾成分は13例、61.9%についている。

他に갖다の形で10例出ている。やはり관심(関心)など抽象名詞が6例で最も多い。

3-2-18 향하다

향하다(向かう)20例も先の위하다同様、他動詞というよりは後置詞的である。人間名詞7例をはじめ人間を表す体言が計11例を占める。場所名詞・位置名詞・場所代名詞で4例、具体名詞2例、身体名詞1例であった。

3-2-19 만들다

만들다(つくる・させる)20例も-를格の体言範疇が12種と多岐にわたっている。うち8例は用言の副詞形語尾-게を持つ単語が-를格と用言の間の位置に現われ、「…させる」の意の使役動詞として働いている。その場合の-를格の体言は6例が人間を表すものとなっている。またそれらとは別に2例は-로／-으로格が-를格と用言の間の位置に来ている。

3-2-20 쳐다보다

쳐다보다(見つめる)19例を見ると、보다(見る)の体言のカテゴリーが16種類に及んでいたのに比して6種と、はるかに少なくなっている。その上、人間名詞8例を始

めとする人間を表す名詞が16例、84.2%に達しており、この点でも보다とは大きく異なっている。보다가知覚動詞以外でも用いられたのとは異なり、쳐다보다の方は基本的に知覚動詞として用いられているわけである。なお4例に눈으로(眼で)・얼굴로(顔で)など-로/-으로格が現れている。

3-2-21 부르다

부르다(呼ぶ・歌う)も19例あった。노래(歌) 5例、이름(名前) 1例など事柄名詞が計7例、人称代名詞4例、親族名詞3例、抽象名詞2例など。1例は<덧니를 꽃나라고 부르다>(八重歯を花齒と呼ぶ)、つまり<A를 B라고 부르다>(AをBと呼ぶ)という、後述の認定動詞構造で現れている。連体修飾成分は4例のみ。

3-2-22 찾다

찾다(探す・見つける)は18例。담뱃가게(煙草屋)・자리(場所)など場所名詞が6例、안경(眼鏡)など具体名詞が3例、활기(活気)など抽象名詞が3例、사람(人)など人間名詞が2例、具体名詞문제(問題)が2例などである。12例、66.7%に連体修飾成分がついている。

3-2-23 마시다

마시다も18例。体言範疇の片寄りが非常に激しいのが特徴である。16例、88.9%가술(酒)や물(水)などの物質名詞である。1例は<소주 한 병을>(焼酎1本を)の形での数量名詞との結合、いま1例は<가짜를 마시다>(偽物を飲む)という抽象名詞との結合であった。連体修飾成分は4例のみ。

3-2-24 주다

주다(与える・くれる・やる)は17例。영향(影響)・안도감(安堵感)・핀잔(けんつく)など抽象名詞が9例、감동(感動)・사랑(愛)など活動名詞が4例、삼천원(三千ウォン)など数量名詞が3例あった。連体修飾は5例のみ。

3-2-25 보내다

보내다(送る)は17例。날(日)・하루(一日)・여름(夏)など時間名詞が7例もある点が際だっている。他には미소(微笑)など抽象名詞が4例、具体名詞편지(手紙)が2例など。1位の하다からこの보내다の次に続く생각하다(考える)・열다(開く)ぐらいまでで頻度上は全用例の約3分の1を占めている。

3-3 用言のない例

用言が現れていない例も19例ある。うち5例は次のように体言+-를の後に-로/-으로(…に)を持つ単語が現れるものである：

이것을 기점으로 동식은 안절부절 못 하기 시작했다. <군것질43>

これを起点にトンシクは居ても立ってもいられなくなってきた。

하나씨의 죽음을 계기로 할아버지도 생각이 달라지셨는지...〈호박65〉
花子の死を契機におじいさんも考えが変わったのか...

...한 학부형이 마침 닥친 주석을 기회로 가윗돈을 한 봉투 주었을 때는...〈병어회175〉

ある父兄がちょうど迫ってきた秋夕を機会に余分な金を封筒に一袋くれた時は...

他にも<곰팡내가 나는 것을 이유로>(かびの匂いがするのを理由に)や<집을 나간 것을 계기로>(家を出たのを契機に:2例)が現れており、出現頻度の上からも-를格の用法の1つのタイプと認めることができる。

これらは発生論的にはともかくとして、いずれも-로/-으로の後ろに하다などの用言が省略されていると見るよりは、そうした用言がなくとも、資格や契機を表す語尾-로/-으로自体が-를をとりえていると考えるべきであろう。機能的にはこの<-를-로>全体で状況語的な成分の役割を果たしている。この用法は小説より新聞記事や論説文に多く現れる。日本語における同様の型については村木新次郎(1991)が詳しい。

用言が現れない型にはまた次のような例がある:

...다시 집착하기를 몇번. 〈바구니58〉
またも執着すること数度。

자네의 과감한 결단에 다시 한번 존경을. 〈군것질33〉
君の果敢なる決断に今一度尊敬を。

この他にも、<선생님께서 말씀하시기를>(先生がおっしゃることには)のようなものも考えられるが資料には現れていない。これら以外で用言のない例のほとんどは聞き返しの発話に現れたものである:

「그런데 친구들이 옆에다 방을 또 준비했대.」

「아니, 방을 왜요?」〈신혼24〉

「ところで友達が隣に部屋をまた用意したってさ。」

「えっ、部屋を、どうして?」

「함께 일하자고 온 거야.」

「무슨 일을요?」〈모독20〉

「一緒に仕事しようと来たんだ。」

「どんな仕事をですか?」

3-4 -을格の体言範疇の多様性と動詞

以上見てきたように多くの種類の体言範疇をとる動詞と体言の種類が限られている動詞があることがわかる。全3044例中、10例以上出現した用言について、それぞれの用言の頻度を縦軸にとり、また-을格にそれぞれ何種類の体言範疇をとるかを横軸にとって、それらの相関関係を図式化すると次頁のごとくである。

4 -을格と用言の間に立つ要素の問題

<N을・V하다>つまり<Nを・Vする>という2つの要素NとVの間に他の要素が現れる文が、全3044例の18.9%、575例ある。このNとVの間に立つ要素を<間の要素>と呼ぶことにする：

体言 + -를	間の要素	動詞
꽃다발을	다	사다
花束を	みんな	買う

この<間の要素>を観察すると、副詞類(341例)と体言類(220例)がほとんどである。以下、副詞類と体言類に分けて見てみることにする。その際に、典型的な文構造の型を《》に入れて示すことにする。またしばしば使用する動詞範疇の名称は7章で詳述する。

4-1 副詞類が<間の要素>に立つ構文

4-1-1 間の要素が一般の副詞類である構文

擬声擬態語以外の一般の副詞類が<間の要素>に立つ例は117例あり、間の要素に立つものとしては最も多い。この117例中には不活動体主語は2例しかない。副詞を程度副詞・頻度副詞・時間副詞・様態副詞・陳述副詞・否定副詞(안と못)に分類して検討してみることにする。なお副詞の分類の問題、特にそのカテゴリーの連続性については徐尚揆(1991)参照。

程度副詞다(皆・全部)と더(もっと・より)、頻度副詞다시(再び)の頻度が高い。様態副詞잘(よく)も目立つ。

-을格の体言は117例中20例、17.1%が人間を表す体言である。

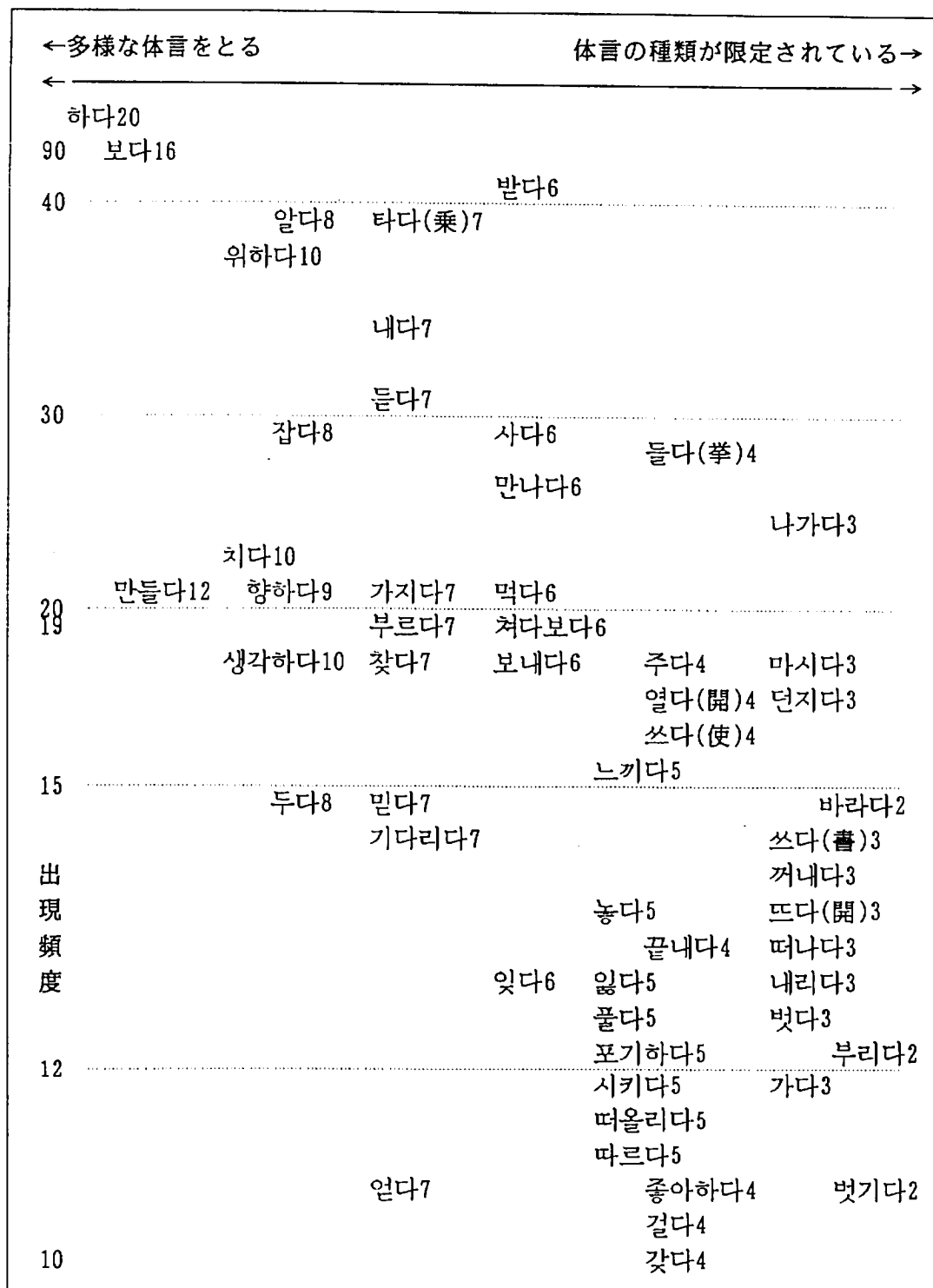
-을格の68例、58.1%に連体修飾成分がついているが、全3044例中で40.8%に比してやや高めの数値である。

この型は次のようにまとめることができる：

《連体修飾成分58.1% + 体言 + -를 副詞 動詞》

これをさらに副詞別に代表的な例を挙げて観察してみることにする。

【図】用言の出現頻度と-을格の体言範疇の多様性による用言の分布
(語彙の横の数字は体言分類の種類数を示す)



《体言+ -를 程度副詞 授受動詞など》

<物や事を ある量や程度だけ Vする>

この型が最も量的には多い。-를格には様々な体言が立つ。

시장을	몽땅	사다	(市場を	まるごと	買う)
꽃다발을	다	사다	(花束を	みんな	買う)
힘을	다	빼앗기다	(力を	みんな	奪われる)
공부를	더	하다	(勉強を	もっと	する)
회를	무척	즐거하다	(刺身を	とても	好む)
말을	너무	믿다	(ことばを	あまりにも	信ずる)
물건을	전부	꺼내다	(品物を	全部	取り出す)
절차를	모두	마치다	(手続きを	皆	済ます)
밖을	좀	보다	(外を	ちょっと	見る)

この型のうち特に次のタイプが目立つ。

《数量名詞+ -를 程度副詞 더 動詞》

운전수에게	돈 천원을	더 주다	(運転士に	千ウオンを	余計に やる)
이들을	더	살다	(2日を	余計に	生きる)

《体言+ -를 様態副詞 動詞》

옷을	그대로	입다	(服を	そのまま	着る)
미션을	파로	만나다	(미션に	別の機会に	会う)
몸을	그냥	던지다	(身を	そのまま	投げる)
일을	빨리	끝내다	(仕事を	早く	終える)
아이들을	잘	보살피다	(子供たちを	よく	面倒見る)

《体言+ -를 時間副詞 動詞》

집을	오래	비우다	(家を	長く	空ける)
남편을	평생	떠받들다	(夫を	一生	崇める)
사람들을	계속	위협하다	(人々を	ずっと	脅す)
손을	잠깐	멈추다	(手を	しばらく	止める)

《体言+ -를 頻度副詞 動詞》

백을	또	사다	(バッグを	また	買う)
협박을	다시	듣다	(脅迫を	再び	聞く)
시아버지를	처음	보다	(義理の父を	初めて	見る)

《体言+ -를 陳述副詞 動詞》

117例中、陳述副詞が間の要素になった例は과연(果たして)を用いた次の1例のみであった：

… 2박 3일의 시간을 과연 배낼 수 있을까, 어림없는 일이었다. <군것질34>

…二泊三日の時間を果たして出せるか、とんでもないことであった。

4-1-2 間の要素が擬声擬態語である構文

間の要素が擬声擬態語の副詞である型は計57例であった。擬声擬態語の高頻度の単語は少なく、最も頻度の高いㅍ(ぎゅっと)でも4例しかない。なお、朝鮮語では一般に擬声擬態語は語層としては頻度が高いにも拘らず個々の単語で高頻度のものはほとんどないのであるがここでもその傾向は踏襲されている。野間秀樹(1991)参照。副詞の種類からみると様態副詞がほとんどである。不活動体主語は5例であった。前置の共起格のある例は5例のみ。

-을格につく連体修飾成分は27例、47.4%。体言の範疇別では13種類と多岐にわたっているが、身体名詞が17例29.8%と非常に多い。以下具体名詞7例12.3%、抽象名詞6例10.5%、場所名詞5例8.8%と続く。

用言は人間の動作を表す動作動詞が非常に多い。中でも身体名詞・具体名詞ではほとんどが動作動詞である。

《身体名詞29.3%・具体名詞12.3%+-을 擬声擬態語の様態副詞 動作動詞》

입술을	꼭	깨물다	(唇を	ぎゅっと	かむ)
머리를	꽂	움켜잡다	(髪を	ぎゅっと	つかむ)
손을	쌩쌩	비비다	(手を	ごしごし	こする)
뺨을	철썩	갈기다	(頬を	びしゃりと	打つ)
어깨를	툑툑	치다	(肩を	とんとん	打つ)
철망을	광광	치다	(金網を	がんがん	叩く)
교복을	털털	털어내다	(制服を	ばたばた	はたく)

《その他の名詞+-을 擬声擬態語の様態副詞 動詞》

앞을	뚜벅뚜벅	걸어다니다	(前を	すたすた	歩き回る)
뒤를	줄줄	따라다니다	(後ろを	ぞろぞろ	ついて回る)
결정을	딱	내리다	(決定を	すぱっと	下す)
삽질을	꼭꼭	하다	(シャベルで	ざくざく	すくう)
침을	질질	흘리다	(唾を	たらたら	垂らす)
냄새를	확	퐁기다	(匂いを	ふんと	匂わす)
숨을	훅	들이키다	(息を	すっと	飲み込む)
큰숨을	호호호호	들이마시다	(大きな息を	ふうふう	吸う)

《時間名詞・抽象名詞等+-을 擬声擬態語 動詞》

첫날밤을	잔뜩	기대하다	(初夜に	めいっぱい	期待する)
마음을	꼭	참다	(気持ちを	ぐっと	押さえる)
악을	버럭버럭	쓰다	(声を	ぎゃあぎゃあ	張り上げる)
결기를	바짝	세우다	(頑固に怒る)		
눈치를	슬금슬금	살피다	(顔色を	それとなく	伺う)

4-1-3 間の要素が-이を持つ副詞

-이を持つ副詞は計24例。副詞分類上では様態副詞が多く、程度副詞や頻度副詞がこれに次ぐ。使役の意味になっている例はない。また不活動体主語は1例もない。主語が明示的に現れている6例のうち-가/-이の比率は16.7%。-를格の体言は12種にわたっており、とりわけ多い範疇はないが、人間を表すものが極端に少なく、わずかさ남매를(四人兄妹を)の1例、4.2%しかないことが特徴である。ただしこれとて分類上は数量名詞になる。

16例、66.7%と、-를格に連体修飾成分がついている例が多い。

《連体修飾成分66.7%+体言(人間4.2%/事物95.9%)+-를 -이の副詞 動詞》
발바닥을 사정없이 갈겨대다 (足の裏を 情け容赦なく ひっぱたく)
술잔을 높이 들다 (杯を 高く 上げる)
술을 많이 마시다 (酒を たくさん 飲む)
행동을 같이 하다 (行動を 共に する)
월부금을 다달이 물다 (月賦を 毎月 払う)
어머니로서 가정을 끊임없이 훈도하다 (母として 家庭を 絶えず 訓導する)

4-1-4 間の要素が動詞の-게副詞形である構文

動詞の-게副詞形は計24例。このうち不活動体主語は9例もあり、動詞の-게副詞形24例中の35.5%、主語が明示的に現れている15例のうちでは60.0%にのぼる。一般的な朝鮮語の文における不活動体主語の少なさからみても、また-를格を持つ文において不活動体主語は5.8%しかいないことに照らしても、動詞の-게副詞形を持つ文におけるこの不活動体主語の多さは注目に値する。なお、主語がある文のうち、-가/-이の比率は66.6%である。

-를格の体言は10種あるが、うち人間を表すものが12例50.0%を占め、非常に多い。用言は2例を除いて하다19例と만들다3例で、この22例は全て使役の意を表すものとなっている。

使役の意味となっている22例のうち、主語が明示的に現れているのは15例68.1%、現れていないものは7例31.8%と、全体の50.4%に比べると使役の場合には主語が明示的に現れる傾向があることがわかる。＜AがBにCをさせる＞という使役の関係を曖昧にしないためには主語を明示化する必要があるし、とりわけ不活動体主語の場合にはレトリック上の点でもこれを明示することに意義があるからである。

連体修飾成分のついた-를格は少なく、8例、33.3%である。このうち人間を表す体言についたものは1例しかない。

《体言(活動体40.0%/不活動体60.0%)이 体言(人間50%/事物50%)을 動詞の-게副詞形 使役動詞하다/만들다91.7%》

-게副詞形全体でみるとこうなるが、さらに主語別に見ると次のような型を抽出できる：

《体言(不活動体9例)이 体言(人間3例33.3%/事物6例66.7%)을 動詞の-게副詞形 使役動詞하다/만들다》

한마디가 나를 놀라게 하다 (一言が 私を 驚かせる)
 비애가 가슴을 메이게 하다 (悲哀が 胸を つまらせる)
 물음이 생각을 낳게 하다 (問いが 考えを 産ませる)
 광경이 입을 딱 벌리게 하다 (光景が 口を あんぐり 開けさせる)
 착각은 저를 스물여섯이 아닌 서른 여섯으로 여기게 만들다 (錯覚は 私を 26
 歳ならぬ36歳であるように 感じさせる)
 얼굴빛이 고모를 피곤한 중년의 모습으로 보이게 하다 (顔色が おばを 疲れた中
 年の姿に見せる)

《体言(活動体6例)이 体言(人間3例50.0%/事物3例50.0%)을 動詞の-게副詞形 使役
 動詞하다/만들다》

시아버지는 식구들을 놀라게 하다 (義理の父は 家族を 驚かす)
 내가 5 만원을 타게 하다 (私が5万ウォンを貰うようにする)
 미선은 나를 당황하게 만들다 (ミソンは 私を 慌てさせる)

《主語なし7例 体言(人間4例57.1%/事物3例42.9%)을 動詞の-게副詞形 使役動詞하
 다/만들다》

저희를 고민하게 만들다 (私たちを 悩ませる)
 아이를 갖게 하다 (子供を はらませる)
 과장을 만나게 하다 (課長に 会わせる)
 시부모를 긴장케 하다 (義理の父母を 緊張させる)
 말로를 예측케 하다 (末路を 予測させる)

《主語なし2例 体言(人間50%/事物50%)을 動詞の-게副詞形 非使役動詞》

以下の2例のみ。

물을 알맞게 넣다 (水を ちょうどよく 入れる)
 저를 흔들리지 않게 지키다 (私を ぐらつかないよう 守る)

4-1-5 間の要素が形容詞の-게副詞形である構文

形容詞の-게副詞形は63例あった。うち不活動体主語は7例、11.1%。主語が明示的
 に現れているのは31例なのでそのうち22.6%が不活動体主語ということになる。動詞
 の-게副詞形に比べ不活動体主語がはるかに少ないことがわかる。なお主語のうち-가
 /-이の比率は22.6%と、これも動詞の-게副詞形と逆転している。

使役的な意味になっているものは<마음을 너무 아프게 하다>(心をあまりにも
 痛ませる)など8例しかなく、形容詞の-게副詞形の多くは動作の様態を表すものであ
 った。動詞の-게副詞形にはなかった-시키다の形式の動詞がこの他に2例現れている。
 非使役的な例は53例である。

また-를格の体言には人間を表すものが19例で30.2%、事物を表すものが44例69.8
 %と、こちらも動詞の-게副詞形に比べると人間を表す体言が少ない。人間名詞は11
 例、具体名詞8例、抽象名詞8例、不完全名詞6例、活動名詞6例、親族名詞5例など。

-를格に連体修飾成分がついた例は34例、54.0%であるが、人間を表す名詞には31.6%しかついておらず、抽象名詞・活動名詞計14例中の11例、78.6%についている。不完全名詞にはもちろんついてる。

《体言(主語ありのうち活動体77.4%/不活動体22.6%)이 連体修飾成分54.0% + 体言(人間30.2%/事物69.8%)을 形容詞の-게副詞形 非使役動詞》

全体として平均化するとこうだが、さらに細分化すると：

《体言(活動体24例45.3%/不活動体3例5.7%/なし26例49.1%)이 連体修飾成分31例58.5% + 体言(人間14例7.5%/事物39例76.5%)을 形容詞の-게副詞形 非使役動詞》

말을 그렇게 하다 (ことばを そのように 言う)

아버지는 이야기를 이렇게 들려주다 (父は 話を このように 聞かせてくれる)

마누라를 점잖게 말리다 (妻を おとなしく 制する)

할아버지를 쉽게 이해하다 (おじいさんを 容易に 理解する)

저는 머리를 길게 늘어뜨리다 (私は 髪を 長く 垂らす)

대문을 거칠게 밀다 (門を 手荒に 押す)

사람은 소리를 크게 내다 (人は 声を 大きく 発する)

결과를 확실하게 얻다 (結果を 確実に 得る)

이 노릇을 어떻게 수습하다 (このことを どう 收拾する)

나는 머릿속까지 울렁거리는 것을 기이하게 여기며 위장계를 만져 보았다. <막차69>

私は頭の中までくらくらするのを奇異に感じながら胃腸のあたりをさわってみた。

《体言(活動体12.5%/不活動体50.0%/なし37.5%)이 連体修飾成分37.5% + 体言(人間4例50.0%/事物4例50.0%)을 形容詞の-게副詞形 使役動詞만들다/하다》

고모의 귀국이 우리 집안을 그토록 우울하게 만들다 (おばの帰国がうちの身内をそれほどまでに憂鬱にさせる)

나선 것이 아버지를 더 난처하게 만들다 (でしゃばったのが父を一層困らせる)

그것이 아버지를 숙연하게 만들다 (それが父を肅然とさせる)

결정됐던 점이 무엇보다 마음을 상하게 하다 (決定された点が何よりも心を痛ましめる)

그는 마누라를 더욱 방싯방싯하게 만들다 (彼は女房を一層にここにこさせる)

어머니를 몹시도 기쁘게 해 드리다 (母をひどく喜ばせてさしあげる)

그이의 마음을 너무 아프게 하다 (彼の心をあまりにも傷つける)

내 기분을 막막하게 만들다 (私の気分を漠々とさせる)

《体言(活動体1例/不活動体1例)이 体言(人間1例50.0%/身体1例50.0%)을 形容詞の-게副詞形 시키다動詞》

욕망이 궁극적으로 인간을 어떻게 파멸시키다 (欲望が窮極的に人間をどう破滅させる)

공장장은 눈을 시뻘겋게 충혈시키다 (工場長は目を真っ赤に充血させる)

ここで間の要素が動詞の-게副詞形である構文と形容詞の-게副詞形である構文の互いの特徴を対照して整理してみることにする：

	動詞の-게副詞形	形容詞の-게副詞形
用例数	24例	63例
明示主語のうち不活動体主語	多い(60.0%)	少ない(22.6%)
明示主語のうち-가/-이	多い(66.6%)	少ない(22.6%)
-를格体言のうち人間を表すもの	特に多い(50.0%)	やや多い(30.2%)
連体修飾成分	少ない(33.3%)	多い(54.0%)
機能	使役が多い	動作の様態が多い

4-1-6 間の要素が形容詞の-히副詞形である構文

形容詞の-히副詞形は25例。副詞分類ではおおむね様態副詞である。不活動体主語は1例のみ。主語がある例13例のうち-가/-이の比率は23.1%。形容詞の-게副詞形では使役が10例ほどあったのに対し、この-히副詞形では使役の意味になっているものは1例もない。-히は-디の異形態であるから納得できる結果である。

-를格の体言は人間が3例、12.0%しかない。連体修飾成分は17例、68.0%のついている。これも-이と並行的な数値である。

《体言(活動体92.3%/不活動体7.7%)이 連体修飾成分68.0% 体言(人間12.0%/事物88.0%)을 形容詞の-히副詞形の様態副詞 動詞》

시동생들은 대학을 무난히 졸업하다 (義理の弟たちは 大学を 無難に 卒業する)

아버지는 속을 뻥히 들여다보다 (父は 腹の中を すっかり 覗き見る)

위치를 굳건히 하다 (位置を 強固に する)

소식을 자세히 전하다 (消息を 詳しく 伝える)

가장임을 충분히 자인하다 (家長であることを 充分に 自任する)

副詞的なものには、この他に-듯・-듯이・-처럼・-대로などの語尾をもつものが10例あった。

4-2 体言類が<間の要素>に立つ構文

4-2-1 間の要素が数量名詞である構文

量を表す数量名詞の類が<間の要素>に立つ構文である。ほとんどが번(…回) 8例や차례(…回)のように主として動作動詞と共に用言で表される行為の回数を示すものと、-를格の体言の数量を示す数量名詞と授受関係を表す動詞との組み合わせである。わずかに<학교를 한 해만 다니다>(学校に一年間だけ通う)のように時間名詞で期間を表す例がある。計38例。

15例、39.5%の-를格に連体修飾成分がついているが、全体のほぼ平均値である。

《名詞+-를 数量名詞 動作動詞など》

<対象を 回数分だけ 行為する>

동식씨를	한번	만나뵈다	(トンシクさんに 1度 お目にかかる)
손금고를	열두 번	열다	(手提げ金庫を 12回 開ける)
머느리를	한 방	때리다	(嫁を 1発 叩く)
뺨을	한 대	올려붙이다	(頬を 1発 ひっぱたく)
편지를	몇 차례	보내다	(手紙を 何度か 出す)
심호흡을	몇 번이나	하다	(深呼吸を 何度も する)
고통을	단 한번이라도	생각하다	(苦痛を ただ1度だけでも 考える)
동식을	서너 걸음	앞서다	(トンシクに 3・4歩 先んじる)

《名詞+-를 数量名詞 授受動詞など》

<対象を その量だけ 操作する>

백을	꼭 하나	사주다	(バッグを 必ず1つ 買ってやる)
보리쌀을	석 되나	주다	(麦を 3升も くれる)
가윗돈을	한 봉투	주다	(余分な金を 1袋 くれる)
월급을	70퍼센트	80퍼센트 받다	(月給を 70%80% 貰う)
핑계거리를	하나	만들다	(口実を 1つ 作る)
이파리를	하나씩	따다	(葉っぱを 1枚づつ 摘む)
가족을	하나 더	늘리다	(家族を もう1人 増やす)

《名詞+-를 혼자等 動詞》

<対象を 対象一人で・主体一人で 行為する>

결정을	혼자	내리다	(決定を 1人で 下す)
신부를	혼자	뇌두다	(新婦を 1人 おいておく)

4-2-2 間の要素が主語である構文

主語となる間の要素は1例(波が打ち寄せる)を除いて全て活動体であった。計52例。なお、-를格の体言に連体修飾成分がついているものの比率が46例88.5%と著しく高いことが特徴となっている。全3044例でみると連体修飾成分のあるものは1243例、40.8%なので、間の要素があるもの、とりわけ間の要素が後置の主語である場合は-를格の体言に連体修飾成分がついている場合が非常に多いことがわかる。

《連体修飾成分88.5%+名詞+-를 体言(活動体98.1%/不活動体1.9%)-이 動詞》

-가/-이	15例	うち13例86.7%に連体修飾語あり
-는/-은	36例	うち32例88.9%に連体修飾語あり
その他	1例	うち1例100.0%に連体修飾語あり

なお体言形Ⅱ-口을の場合は-는/-은による主語は後置となりやすい。体言形でく

くる文が長くなりやすく、体言形となった用言の主語と紛れ易いためだと思われる：

연극은 어떤 상업적인 효과보다도, 연습을 시작할 때부터 끝날 때까지 내가 극중의 인물 속으로 빠져 들어가는 그 엑스타지가 좋아서 하는 것임을 우리는 잘 알고 있다. <호박26・7>

演劇はある商業的な効果よりも、練習を始めるときから終わるときまで私が劇中の人物の中にはいりこむ、そのエクスタシーが好きだからするのだということを我々はよく知っている。

4-2-3 間の要素が-로/-으로である構文

間の要素に語尾-로/-으로(…で…に)を持つ名詞類が来るものである。前置の-로/-으로は108例あったのに対し、こちらはその55.6%の60例があった。格的な要素のうちでは間の要素に最も立ちやすいのがこの-로/-으로である。

前置の-로/-으로の場合には-를格の体言に連体修飾成分がかかっているものが28例25.9%しかなかったのに、この後置の場合となると35例、58.3%に達する。ただし-를格の体言が名詞でなく代名詞である場合には連体修飾成分のあるものは1例もない。代名詞には連体修飾成分がつきにくい傾向がはっきりと現れている。

前置の主語-는/-은は21例35.0%に出現している。前置の主語-가/-이は10.0%である。前置の-로/-으로の場合はそれぞれ42.6%、21.3%であったから、相対的に-로/-으로が-를の前にあった方が前置の主語の出現率が高いわけである。なお不活動体主語は1例のみ。

-를格の体言の種類は多岐にわたっている。抽象名詞8例・人間名詞8例で共に13.3%、具体名詞・活動名詞・身体名詞が共に7例11.7%、人称代名詞が6例10.0%、그것など事物代名詞が5例8.3%、等々である。6.5%であった前置の-로/-으로に比べて代名詞の比率が20.0%と高い。これは特に事物代名詞の多さによるものである。

《連体修飾成分58.3%+体言1+-을 体言2+-로 動詞》

4-2-4 間の要素が-에である構文

間の要素が-에(…に)を持つ名詞となっているものを見ると、-에そのものには場所名詞と位置名詞が多く、身体名詞・現象名詞・時間名詞などがわずかに見られる。前置の-에126例に対し後置の-에はその28.6%の36例であった。

うち21例60.0%の-를格に連体修飾成分がついている。前置の-에では20.6%にしかついていないのでここでも-를格の体言に連体修飾成分がつくと共起格が-를格の後ろに追いやられるという統辞論上の傾向を見てとることができる。なおここでも代名詞3例にはやはり連体修飾成分がついていない。

-를格の体言の範疇では具体名詞が11例31.4%と群を抜いて多い。そして人間名詞6例17.1%、親族名詞4例11.4%、抽象名詞3例8.6%と続く。前置の-에では抽象名詞が22.2%で1位、活動名詞が19.8%で2位であったから体言範疇の比率は随分と様変わりしていることになる。1つには活動名詞の場合は<대답을 하다>(答えをする)・<기겁을 하다>(仰天をする)・<연애를 하다>(恋をする)・<실수를 하다>

(しくじる)等、分離用言が基本であって、これらは体言と用言하다との間に他の要素が入り込みにくいからだと考えることができる。抽象名詞の方にも<기를 쓰다>(氣張る)・<앙심을 품다>(恨みを抱く)・<잠을 자다>(眠る)・<욕심을 내다>(欲を出す)など分離用言的なものが多く、やはり間の要素が入り込みにくい傾向にあるのだと思われる。

《連体修飾成分60.0%+体言을 場所名詞・位置名詞等+-에 動詞》

4-2-5 間の要素が-에게・-한테・-께である構文

人間を表す名詞に-에게・-한테・-께(…に)の語尾がついたもの。前置では56例であったが後置では11例。63.6%に連体修飾成分がついているが、標本数が少なく、充分なことは言えない。

《連体修飾成分63.6%+体言+-을 人間名詞等+-에게 動詞》

4-2-6 間の要素が-에서である構文

間の要素が-에서(…で)を持つ名詞である例は、前置の-에서が59例あるのに比べ非常に少ない。場所名詞と位置名詞がほとんどで、団体名詞が1例、具体名詞が1例、計9例。これもあれこれ論じるには標本数が少ない。

《連体修飾成分66.7%+体言+-을 場所名詞・位置名詞等+-에서 動詞》

4-2-7 間の要素が否定の副詞である構文

否定を表す副詞안7例と不可能を表す副詞못11例、計18例。ただしこの型は<否定の副詞+用言>全体で用言と見ることができるので、間の要素がない例だと考えた方がよい。その傍証として-를/-을格にかかる連体修飾成分のある例が3例、16.7%と非常に少ないことを挙げることができる。体言は活動名詞4例、抽象名詞4例など。

《名詞+-를 안・못 動詞》

4-2-8 その他の間の要素を持つ構文

この他に格語尾としては-에다・-다(…に)が2例、-한테서(…から)が1例あり、-를が重なって出てくる、いわゆる二重対格の例が2例あった。1例は用言が시키다(させる)である：

… 아니,무엇보다 팔자식을 대학 공부를 시킬 수 있었던 집안에서 자란 내가 …
<병어회174>

…いや、何よりも、娘に(対格)大学の勉強を(対格)させることができた家で育った私が…

いま1例は誤植の可能性が高い。

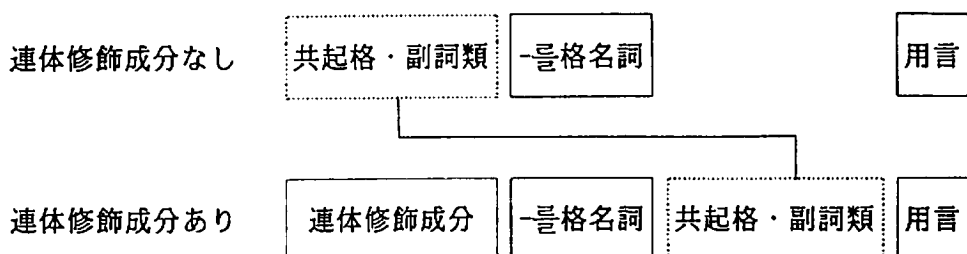
4-3 間の要素の量的な分布

以上の<間の要素>を整理すると次の如くである：

【表】-를格と用言との間に出現する要素の分類別頻度

副詞	小計 341例
一般の副詞	117例
形容詞の-게副詞形	63例
擬声擬態語	57例
形容詞の-히副詞形	25例
動詞の-게副詞形	24例
-이副詞	24例
안・못	18例
-처럼・-듯이等	10例
その他の副詞類	3例
体言類	小計 220例
-로／-으로	60例
主語	52例
数量名詞	38例
-에	36例
その他の体言類	12例
-에게・-한테・-께	11例
-에서	9例
-를	2例
その他	14例
間の要素	計 575例

間の要素のある例は総じて-을格に連体修飾成分がついているものが多い。全575例中330例、57.4%を占めるが、これは全3044例中では40.8%に比べ高い数値である。これまでもたびたび見たように、-을格に連体修飾成分がつくことによって共起格や副詞類などが-을格の後ろに追いやられるという語順の傾向を見て取ることができよう。ただし-을格が代名詞の場合はもともと連体修飾成分がつきにくい：



5 主語以外の他の格語尾との共起

<Nを・Vする>の構造の-을格の前に格語尾を伴った体言類が立つ<N1に/で/から等・N2を・Vする>という構造の文も資料にはしばしば現れる。これを<前置の共起格>と呼ぶことにする。先にみた<Nを>と<Vする>との<間に立つ要素>に出現した共起格はいわば<後置の共起格>ということになる。なお、主語については前述の通りである。

前置の共起格の類には次のようなものがあつた：

【表】-을格の前の位置に出現する共起格の類（=前置の共起格）の頻度

-에	126例
-로／-으로	108例
-에서	59例
-에게	30例
-한테	26例
-께	4例
-한테서	3例
-에다가	2例
-로서	3例
-로써	3例
-과／-와	1例
その他	
前置の共起格 計	126例

なお、-에는や-에도は-에で計量する方法を採った。

これら前置の共起格をもつものは、一般的に言って-를格の体言に連体修飾成分がないものが多い。前置の共起格があると連体修飾成分と競合するため、避けられる傾向にあるのであろう。

前置の共起格の主要なものを更に-를格の体言分類による分布の観点から調べてみることにする：

5-1 前置の-에格と共起する-를格

【表】前置の-에格と共起する-를格の体言の分類別頻度 計126例中

抽象	: 28	: 22.2%	事柄	: 4	: 3.2%
活動	: 25	: 19.8%	時間	: 2	: 1.6%
具体	: 21	: 16.7%	不完全	: 1	: 0.8%
身体	: 16	: 12.7%	動物	: 1	: 0.8%
人間	: 5	: 4.0%	体言形	: 1	: 0.8%
場所	: 5	: 4.0%	性質	: 1	: 0.8%
現象	: 5	: 4.0%	事物代名詞	: 1	: 0.8%
物質	: 4	: 3.2%	営為	: 1	: 0.8%
数量	: 4	: 3.2%	位置	: 1	: 0.8%
			計	: 126	: 100.0%

この-에格と共起する-를格の体言は人間名詞の比率が相対的に低い。全3044例中では人間名詞は8.0%であったから2分の1ということになる。代わりに身体名詞が全体比7.7%から12.7%と上がっている。-에格に来る体言はさまざまであるが場所名詞・位置名詞・時間名詞が相対的に多い。また後に例を挙げるように<…を契機に>の意を表す-에が散見される。

5-1-1 -에格と抽象名詞+-를格の共起

《場所名詞+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<対象を与える目標・相手に 抽象的な事柄を 与える・及ぼす>

가계	에	보탬	을	주다	(家計の 足しに する)
가슴	에	자포자기	를	불어넣다	(胸に 自暴自棄を 吹き込む)
길바닥	에	자유	를	쏟다	(道端に 自由を ぶちまける)
프론트	에	사정	을	얘기하다	(フロントに 事情を 話す)
무엇	에	책임	을	전가하다	(何に 責任を 転嫁する)
문제로	친정	에	누를	끼치다	(問題で 実家に 累を 及ぼす)

《位置名詞・活動名詞・抽象名詞等+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<限定された範囲で・ことに 抽象的なことを 行う>

집안	에	생기	를	불러일으키다	(家に 生気を 呼び起こす)
----	---	----	---	--------	----------------

무대 위에	다른 꿈을	꾸다	(舞台の上に 別の夢を 夢見る)
내심에는	앙심을	품다	(内心では 恨みを 抱く)
아동복지에	관심을	갖다	(児童福祉に 関心を 持つ)
주장에	일치를	보다	(主張に 一致を 見る)
일에	목숨을	걸다	(仕事に 命を 掛ける)
뒷바라지에	기를	쓰다	(世話に 力を 入れる)
매사에	정격만을	인정하다	(万事に 正式なものだけを 認める)
연습에	의욕을	잃다	(練習に 意欲を 失う)
경기도 송탄시에	혼례를	올리다	(京畿道松炭市にて 婚礼を 上げる)

《時間名詞等+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<限定された時に 抽象的なことを 行う>

일조점호 뒤에	애국가를	부르다	(朝の点呼の後に 愛国歌を 歌う)
다음달에	전역을	앞두다	(来月 転役を ひかえる)
동시에	욕심을	내다	(同時に 欲を 出す)
나중엔	전부를	떠맡다	(しまいには 全部を 引き受ける)
기간내에	일정한 물량을	판매하다	(期間内に 一定の物量を 販売する)
첫 만남에	부정을	타다	(最初の出会いから 祟る)

《連体修飾成分+事柄名詞・不完全名詞+-에 抽象名詞+-를 動詞》

<契機・原因で 抽象的なことを 受ける・被る>

벌어졌던 일에	쇼크를	먹다	(繰り広げられていたことに ショックを 受ける)
바르는 바람에	속설을	믿다	(塗るので 俗説を 信じる)
도마뱀 때문에	잠을	잘 수 없다	(とかげのために 眠れない)

5-1-2 -에格と活動名詞+-를格の共起

《場所名詞・具体名詞+-에 活動名詞+-를 하다・하다動詞》

<ある場に対して 活動을 行う>

가계부에	기재를	하다	(家計簿に 記載을 する)
파출소에	신고를	하다	(派出所に 申告을 する)
대학에	진학을	하다	(大学に 進學을 する)
덕에	연락을	취하다	(お宅に 連絡을 とる)

《活動名詞+-에 活動名詞+-를 動詞》

<あることに對して 活動을 行う>

남편 선택에	인생의 승부를	걸다	(夫の選択に 人生の勝負を かける)
--------	---------	----	--------------------

《場所名詞・位置名詞+-에 活動名詞+-를 動詞》

<限定された場のうちに 活動을 行う>

감시 속에 결혼식을 올리다 (監視の中で 結婚式を あげる)
 본정통에 살림을 꾸리다 (本町通りに 居を 構える)

《時間名詞+-에 活動名詞+-를 하다等》

<限定された時に 活動을 行う>

피리어드를 찍기도 전에 승락을 하다 (終止符も打つ前に 承諾을 する)
 첫날밤에 실수를 하다 (初夜に へまを する)
 졸업 후에는 진학을 하다 (卒業後には 進学을 する)
 오후에 연습을 하다 (午後に 練習을 する)
 옛날에 연애를 하다 (昔 恋愛을 する)
 오래간만에 화장을 하다 (久しぶりに 化粧을 する)
 침묵 뒤에 말을 내어놓다 (沈黙の後に ことばを 吐く)
 엄동설한에 구류를 살리다 (嚴冬に 拘留을 させる)
 결혼 다섯달만에 실직을 계획하다 (結婚5カ月で 失職을 計画する)

《活動名詞+-에 活動名詞+-를 하다》

<ことに加えて 活動을 行う>

5시 기상에 마루방 청소를 하다 (5時起床に 板の間の清掃을 する)

《抽象名詞+-에 活動名詞+-를 하다等》

<契機・原因にして 活動을 行う>

이번 기회에 방향전환을 하다 (この機会に 方向転換을 する)
 묻는 말에 대답을 하다 (聞くことに 答える)
 파티에서 거나해진 김에 폭로 발언을 하다 (パーティで酔ったついでに暴露發言을 する)

《抽象名詞等+-에 活動名詞+-를 하다等》

<契機・原因で 無意志的な活動等を 行う>

애정에 감동을 받다 (愛情に 感動을 する)
 추접스러움에 기겁을 하다 (汚らしさに 仰天을 する)
 얼굴빛에 기겁을 하다 (顔色に 仰天을 する)
 모습에 기겁을 하다 (姿に 仰天을 する)
 신랑의 말에 샤워를 끝내다 (新郎のことばに シャワー을 終える)

5-1-3 -에格と具体名詞+-를格の共起

《身体名詞・具体名詞・場所名詞+-에 具体名詞+-를 付与動詞・操作動詞》

<目標に 対象을 付与する・与える>

등에 물통을 걸머지다 (背中に 水桶을 背負う)
 머리에 모자를 쓰다 (頭に 帽子을 かぶる)
 입술에 꽃잎을 그리다 (唇に 花びら을 描く)

각서에 도장을 찍다 (覺書に 判を 押す)
 생애에 용이를 박다 (生涯に 節を つける)
 팍팍잡힌 체구에 검은 제복을 입다 (横太りした体に 黒い制服を 着る)
 뜰에 잔디를 깔다 (庭に 芝生を 植える)
 물가에 낚시대를 드리우다 (水辺に 釣竿を 垂らす)
 학교에 사직서를 내다 (学校に 辞表を 出す)
 병정들 앞에 돌멩이를 던지다 (兵隊たちの前に 石を 投げる)
 잠옷 위에 한복을 걸치다 (寝間着の上に 民族服を ひっかける)
 쳐들어오는 바닷물에 손전등을 휘젓다 (押し寄せる海の水に 懐中電灯を 照らす)

《身体名詞+-에 具体名詞+-를 動詞》

손에 손에 태극기를 흔들다 (手に手に 太極旗を 振る)

《抽象名詞+-에 具体名詞+-를 授受動詞》

<基準とする値で ものを 授受・取引する>

이 값에 좋은 물건을 사다 (こんな値で いい品を 買う)

<基準とする時に ものを 操作する>

그 나이에 등짐을 불이다 (あの歳で 荷を 背負う)

《時間名詞等+-에 具体名詞+-를 動詞》

<時に ものを 操作する・心的活動を行う>

생전에 송편을 좋아하다 (生前に 餅を 好む)

일년여만에 고깃배를 타다 (1年余ぶりに 漁船に 乗る)

몇분만에 식칼을 갈다 (数分で 包丁を 研ぐ)

입은 다음에야 문을 열다 (着た後ようやく ドアを 開ける)

《不完全名詞+-에 具体名詞+-를 動詞》

<契機・原因で ものを 授受する>

무슨 날이기 때문에 꽃을 사다 (何の日だから 花を 買う)

5-1-4 -에格と身体名詞+-를格の共起

《具体名詞・位置名詞等+-에 身体名詞+-를 動作動詞》

<目標・場に 身体を 任せる・与える・動かす>

고속버스에 몸을 싣다 (長距離バスに 身を 載せる)

손잡이에 전신을 매달다 (吊革に 全身を ぶらさげる)

칼날에 손끝을 누르다 (刃に 指先を 押しつける)

장사에 손을 대다 (商売に 手を そめる)

과외라는 것에 손을 대다 (課外というものに 手を つける)

책상 모서리에 이마를 찡다 (机の角に 額を ぶつける)

자기 배 위에 두 손을 올리다 (自分の腹の上に 両手を のせる)

연극반에 발을 들이다 (演劇部に 足を 踏み入れる)
 거기에 얼굴을 비추어보다 (そこに 顔を 写して見る)
 어머니 앞에 두 무릎을 꿇다 (母の前に 両膝を つく)

《抽象名詞・不完全名詞+-에 身体名詞+-를 動作動詞》

<契機・原因で 身体を 動かす>

심상치 않은 안색에 입을 다물다 (ただならぬ顔色に 口を つぐむ)
 아픔 때문에 다리를 놓다 (痛さのために 足を おく)
 가려움 때문에 몸을 뒤돌다 (かゆみのために 身を よじる)

《時間名詞等+-에 身体名詞+-를 動詞》

<時に 身体を 動かす>

아침에 눈을 뜨다 (朝 目を 開ける)

5-1-5 -에格と人間名詞の+-를格の共起

《位置名詞+-에 人間名詞+-를 動作動詞》

<場に 人を 動かす>

그 안에 미션을 끌어들이다 (その中に ミッションを 引き入れる)

《時間名詞等+-에 人間名詞+-를 動詞》

<時に 人を・人に対して 動作する>

밤중에 민수를 찾아가다 (夜中に ミン수를 訪ねる)
 오년만에야 아기를 낳다 (5年たって 子を 産む)

《不完全名詞+-에 人間名詞+-를 動作動詞》

<契機・原因で 人に対して 動作する>

그것 때문에 그 여자를 깔보다 (そのために その女を 見下す)

以上、-에と共起した-를格のうち代表的なものを見てみた。このように文が実現する意味には-에と-를に來る体言の範疇、およびそれら体言と用言との組み合わせによっていくつかの型があることがわかる。つまりどのような体言と用言が組み合わせられるかという統辞論的な条件によって文が実現する意味も条件づけられるのである。

5-1-6 -를格と共起した-에格の機能

これまでの例では-를格と共起する-에、つまり他動詞と共起する-에の方に着目するとおよそ次のような機能がある：

- 1)事物が付与される目標・対象
- 2)活動の場・環境
- 3)時

4) 基準となる値

5) 契機・原因

これらのうち、事物が付与される目標・対象の働きを持つ-에は、<가게에 보탬을 주다> (家計の足しにする) や <고속버스에 몸을 싣다> (高速バスに身を載せる) でもわかるように、補語的であり、基本的な格としての性格の強いものであって、他動詞が主体と-를格の2項のみではなく、さらにもう1項、-에格の項も要求する性格の濃い一群である。つまり動詞が3項他動詞的な性格が濃いのである。活動の場・環境を表す-에はそれより状況語的性格が強くなり、時を表す-에ではほとんどといっていいほど状況語であって、用言にとって必須の成分ではなく、任意の成分となっている。

それぞれ-에にとる名詞の範疇さえ定まればどの意味の-에になるかの大枠は決まるが、それらに後続する-를格や用言が出現して-에の意味が厳密に確定される。なお、これらの-에の用法は機械的に分類できるものというよりは1)から5)までのように互いに連続的に連なっているものだと思えるべきであろう。

また契機・原因の-에と共起する場合の動詞には受け身の動詞や他動性の弱い用言が出現しやすいことが1つの特徴となっている。<애정에 감동을 받다> (愛情に感動を受ける) や <벌어졌던 일에 쇼크를 먹다> (繰り広げられていたことにショックを受ける) ・ <추접스러움에 기겁을 하다> (汚らしさに仰天する) などがその例である。

5-2 前置の-로/-으格と共起する-를格

【表】前置の-로/-으格と共起する-를格の体言の分類別頻度 計108例中

具体	: 18	: 16.7%	物質	: 3	: 2.8%
活動	: 15	: 13.9%	事柄	: 3	: 2.8%
身体	: 14	: 13.0%	時間	: 2	: 1.9%
抽象	: 13	: 12.0%	営為	: 2	: 1.9%
人間	: 12	: 11.1%	位置	: 2	: 1.9%
人称代名詞	: 7	: 6.5%	不完全	: 1	: 0.9%
親族	: 7	: 6.5%	体言形	: 1	: 0.9%
場所	: 7	: 6.5%	数量	: 1	: 0.9%
			計	: 108	: 100.0%

この-로/-으格と共起する-를格の体言では、具体名詞の進出と、全3044例中では19.2%で第1位であった抽象名詞の順位の相対的下落が認められる。また人間名詞・人称代名詞・親族名詞の計26例24.1%は人間を表す名詞の比率が相対的に高いことを物語っている。また、前置の主語-는/-은をとるものが46例42.6%と、かなりの高率になっているのが特徴的である。

-로/-으格に来る体言を見ると身体名詞が26例24.1%の高率を占めているのが特

徹的である。特に-를格に身体名詞が来る14例のうち8例57.1%で-로/-으로格にも身体名詞が来ている。これに対し-를格に活動名詞や営為名詞が立つものには-로/-으로格に身体名詞が来るものは1例もない。具体名詞や人間名詞が-를格に来る場合も-로/-으로格に身体名詞が来るものが目立つ。-로/-으로格に来る場所名詞と位置名詞は計14例あった。

-로/-으로格に場所名詞系統の体言が来ると移動を表す動詞が目立つ：

《場所名詞+-로/-으로 営為名詞・場所名詞+-를 外出動詞》

＜ある場所に ことを しに行く・しに来る＞

서울로 신혼여행을 오다 (ソウルに 新婚旅行に 来る)

제주도로 신혼여행을 가다 (濟州島に 新婚旅行に 行く)

방으로 도망을 가다 (部屋に 逃げて 行く)

시아버지가 인천으로 어시장을 다녀오다 (義理の父が 仁川へと 魚市場に 行ってくる)

아버지가 읍내로 농업학교를 다니다 (父が村へと 農業学校に通う)

《쪽+-으로 身体名詞+-를 動作動詞》

＜ある方向に 身体を 動かす＞

유치장 쪽으로 손을 이끌다 (留置場の方に 手を 引っ張る)

나는 앞마당 쪽으로 고개를 내밀다 (私は 前庭の方へ 顔を 出す)

《位置名詞・場所名詞+-로/-으로 名詞+-를 動詞》

＜ある場へと 対象を 導く＞

영희는 밖으로 이어진 선을 뽑아놓다 (ヨンヒは 外へと 連なった線を 引っ張る)

대청으로 그를 맞아들이다 (板の間へ 彼を 招き入れる)

《位置名詞・場所名詞+-로/-으로 名詞+-를 知覚動詞》

＜空間を通して 対象を 知覚する＞

사람들이 울타리 사이로 우리 집을 엿보다 (人々が 垣根の間から うちを 覗き見る)

신랑은 열려진 문으로 각시를 쳐다보다 (新郎は 開かれたドア越しに 新婦を 見つめる)

この型から次のような例へと連なっている：

《속으로 名詞+-를 動詞》

나는 속으로 어머니를 욕하다 (私は 腹の中で 母を 罵倒する)

この속으로 (腹の中で) は位置名詞でもあり身体名詞でもある両義的な性格を持っている。この-로/-으로がはっきりと身体名詞になると次のように-로/-으로는方向的な意味がすっかり薄れてしまう：

《身体名詞+-로/-으로 身体名詞+-를 動作動詞》

<身体を使って 対象となる身体に対して 動作する>

신부는 손으로 입을 꼭 막다	(新婦は 手で 口を しっかりと 塞ぐ)
여인이 한손으로 손을 만지다	(女人在 片手で 手を さわる)
손으로 얼굴을 싸다	(手で 顔を おおう)
혀끝으로 입을 열다	(舌先で 口を 開く)
손으로 손을 잡다	(手で 手を つかむ)
손가락으로 무릎을 누르다	(指で 膝を 押す)

この延長上に次のような型がある：

《身体名詞+-로/-으로 具体名詞+-를 動作動詞》

<身体を使って 対象に対して 動作する>

손으로 봉투를 받아들다	(手で 封筒を 受け取る)
손으로 대본을 쓰다	(手で 台本を 書く)
여인은 손바닥으로 신발을 닦다	(女人は 掌で 靴を 磨く)

これらの型はさらに次のように展開する：

《身体名詞얼굴·눈+-로/-으로 具体名詞+-를 知覚動詞等》

<表情をもって 対象を 動作する>

동식은 비감한 얼굴로 자신의 가슴을 쳤다. <군것질46>
トシクは悲しそうな顔で自分の胸を叩いた。

아내가 동정적인 눈으로 뒷모습을 지켜보다 (妻が 同情的な目で 後ろ姿を 見守る)
나는 눈부신 얼굴로 마당을 둘러보다 (私は まぶしい顔で 庭を 見回す)
여인은 당혹한 눈으로 사나이를 주시하다 (女人は 当惑した目で 男を 注視する)
느긋한 얼굴로 여유를 보이다 (満足げな顔で 余裕を 見せる)
사람들은 우중충한 얼굴로 버스를 기다리다 (人々は 冴えない顔で バスを 待つ)
초췌해진 얼굴로 강소주를 들이키다 (憔悴しきった顔で 缶焼酎を あおる)

-로/-으로格의 身体名詞가 身体に関わる 抽象名詞に代わると次のようになる：

《抽象名詞+-로/-으로 具体名詞等+-를 動作動詞等》

<表情·気持ちを持って 対象を 動作する>

진지한 표정으로 답장을 쓰다 (真摯な表情で 返事を 書く)
그는 무서운 기세로 문을 열다 (彼は恐ろしい勢いで ドアを 開ける)
나는 이를 악문 기분으로 넥타이를 착착 잡아매다 (私は歯をくいしばる気持ちでネクタイをぎゅぎゅっと結ぶ)

협박조로 위협을 하다 (脅迫調で 脅す)
 그런 생각으로 글을 쓰다 (そういう考えで 文を 書く)

-적 (的) のついた形容名詞が来ると-로/-으로格は様態を表している：

《形容名詞적+-로/-으로 名詞+-를 動詞》

<ある様態で ことを する>

...인간의 욕망이 궁극적으로 인간을 어떻게 파멸시키는가를 따진다면...〈호박28〉
 ...人間の欲望が窮極的に人間をどのように破滅させるかを問うならば...

사람은 감격적으로 악수를 하다 (人は 感激して 握手を する)
 결사적으로 대가리를 쑤셔박다 (決死の覚悟で 頭を 突っ込む)
 주기적으로 집안식구들을 꾸짖다 (周期的に 家のみんなを 叱る)
 노골적으로 하나꼬를 욕하다 (露骨に 花子を 罵倒する)

これらからいわゆる手段・方法の-로/-으로へと連なっている：

《活動名詞+-로/-으로 名詞+-를 動詞》

<手段・方法で ことを する>

내가 농담으로 호감을 사다 (私が 冗談で 好感を 買う)
 시동생들은 아르바이트로 용돈을 최소한 조달하다 (義理の弟たちは アルバイトで 小遣いを 最小限 調達する)
 내가 전화로 귀가를 알리다 (私が 電話で 帰宅を 知らせる)

《具体名詞等+-로/-으로 名詞+-를 動作動詞等》

<手段・方法で ことを する>

허리띠로 발바닥을 사정없이 갈겨대다 (ベルトで 足の裏を 情け容赦なく 打ちまくる)
 내가 낫으로 호박덩굴을 토막내다 (私が 鎌で かぼちゃのつるを ぶつ切りにする)
 물로 약을 먹다 (水で 薬を 飲む)
 남자들은 우렁찬 목소리로 자기 번호를 외치다 (男たちは とどろきわたる声で 自分の番号を 叫ぶ)
 저는 거부감으로 밤을 세우다 (私は 拒否感で 夜を 明かす)

こうして他動詞構造の中にある-로/-으로はそれがとる名詞の範疇を代えることによって少しづつその働きを変えていること、そしてそれらの用法は互いに孤立して存在するのではなく、互いに連なったものであることがわかる。

5-3 前置の-에서格と共起する-를格

【表】前置の-에서格と共起する-를格の体言の分類別頻度 計59例中

抽象	: 14	: 23.7%	体言形	: 1	: 1.7%
具体	: 9	: 15.3%	性質	: 1	: 1.7%
活動	: 8	: 13.6%	數量	: 1	: 1.7%
物質	: 7	: 11.9%	親族	: 1	: 1.7%
身体	: 5	: 8.5%	場所	: 1	: 1.7%
人称代名詞	: 2	: 3.4%	時間	: 1	: 1.7%
人間	: 2	: 3.4%	事柄	: 1	: 1.7%
現象	: 2	: 3.4%	事物代名詞	: 1	: 1.7%
動物	: 1	: 1.7%	位置	: 1	: 1.7%
			計	: 59	: 100.0%

前置の-에서と共起する例は59例であった。後置の-에서는9例なので-에서의86.8%は-를格の前に来ていることになる。-에서는基本的に-를の前に来るのである。不活動体主語は2例、3.4%しかない。連体修飾成分のある例は13例、22.0%である。なお間の要素もある例が6例あるがうち5例は副詞である。

この-에서格と共起する-를格の体言では、抽象名詞の多さもさることながら、第4位物質名詞の11.9%が目立つ。全用例3044例中では物質名詞は2.4%しかなかったことに照らして大きな特徴である：

카페에서 술을 마시다 (カフェで 酒を 飲む)

누나가 집에서 보리쌀을 석 되나 주다 (姉さんが 家で 麦を 3升も くれる)

나는 앞에서 기름을 짜다 (私は 前で 油を 搾る)

-에서格に立つ名詞が場所名詞・位置名詞の場合は-에서格は状況語的な性格が濃く、随意成分的である。日本語では「…で」「…において」に対応することが多い。次に来る<-를格+動詞>で表される行為が-에서で指定された場のうちで行われることを示す：

《場所名詞・位置名詞+-에서 活動名詞+-를 動詞》

<ある場において 活動を 行う>

남편은 일본에서 공부를 하다 (夫は 日本で 勉強を する)

내가 시골에서 준비를 하다 (私が 田舎で 準備を する)

《場所名詞・位置名詞+-에서 具体名詞・人間名詞等+-를 動詞》

<ある場において 対象に対して ことを行う>

결에서 잡초를 뽑다 (脇で 雑草を 抜く)

그가 가게에서 개를 사다 (彼が 店で 犬を 買う)

길거리에서 동창을 만나다 (道で 同窓生に 会う)

옷집 앞에서 녀를 잃다 (洋服屋の前で 我を 忘れる)

침대에서 잠을 자다 (ベッドで 眠る)
 침대에서 신부를 안다 (ベッドで 新婦を 抱く)
 여기서 조사를 받다 (ここで 調査を 受ける)
 사나이가 복도 끝 쪽에서 방문을 열다 (男が 廊下の端の方で ドアを 開ける)
 뒤에서 그것을 보다 (後ろから それを 見る)
 다른 점에서 역사를 극복하다 (別の点で 歴史を 克服する)

上の場所名詞の部分により抽象化されると次のようにも展開される：

검사과정에서 철저를 기하다 (検査過程で 徹底を 期す)
 책임기에서 날짜를 끝다 (本読みで 日を かせぐ)

次のように、-에で数多くみられた契機的な意味を持つ-에서도あるが、これも「...において」の-에서に連なるものである：

《事柄名詞+-에서 名詞+-를 알다》

<契機にして ことを 知る>

그리고 그날 밥상을 박차고 나가는 시동생의 모습에서 그의 뜻 또한 마찬가지였음을 알았다. <병어회193>

そしてその日食膳を蹴って出ていく義理の弟の姿から彼の意志もまた同様であったことを知った。

ところが-에서가場所名詞・位置名詞ではなく具体名詞・身体名詞になったとたんに-에서는補語的な性格・必須的な性格が強くなり、動詞は、主体と対象語の他に更にもう1項を必要とする3項動詞的な性格を帯びる。日本語では「...から」がおおむね対応する。動詞は離脱や取り出し、奪取の意味を持ったものが多くなる。これらのうち事物から事物を離脱させる動詞を<奪取動詞>と呼ぶことにする。-에서는なんらかの事物が離脱する以前に所属していた場を示す。-에게서; -한테서を奪格と呼ぶなら、この用法の-에서는<離格>とも呼ぶべき機能を持った格である。頻度は相対的に低くなる：

《具体名詞・身体名詞等+-에서 名詞+-를 奪取動詞》

<もの・身体から 対象を 離脱させる>

모자에서 흙을 털어내다 (帽子から 土を はたき落とす)

손에서 원고뭉치를 여지없이 나눠채다 (手から 原稿の束を 有無を言わず ひったくる)

내가 냉장고에서 아이스크림을 꺼내다 (私が 冷蔵庫から アイスクリームを 取り出す)

《抽象名詞・事柄名詞・活動名詞+-에서 名詞+-를 動詞》

<ことから 対象を 離脱させる>

파분함에서 나를 해방시키다 (退屈さから 私を 解放する)
나는 과외지도에서 손을 떼다 (私は 課外指導から 手を ひく)

【図】-에서의名詞の種類と-를格を持つ動詞の性格

-에서의名詞가	
場所名詞・位置名詞	具体名詞・身体名詞
←	→
状況語的	補語的
随意成分的	必須成分的
…において・…で (処格的)	…から (離格的)
2項動詞的	3項動詞的
非奪取動詞	奪取動詞など
頻度は相対的に低い	頻度は相対的に高い

次の例は離格であろうが、-에서格の名詞が場所名詞的でもあるので処格的な色彩もあり、中間的な例となっている：

학교에서 자취를 감추다 (学校から 姿を 消す)
창문에서 밖을 내다보다 (窓から 外を 見おろす)

5-4 前置の-에게と共起する-를格

【表】前置の-에게と共起する-를格の体言の分類別頻度 計30例中

活動	: 15	: 50.0%
抽象	: 6	: 20.0%
数量	: 4	: 13.3%
具体	: 4	: 13.3%
場所	: 1	: 3.3%

-에게格との共起では、標本数は少ないが、人を表す名詞が1例もないことが特徴である。このように、-에게格と共起しない-를格には人も事物も現れるのに対し、-에게格と共起する-를格には人を表す体言が来にくいという傾向がある。他には活動名詞の比率の高さと、全体比では1.6%であった数量名詞の多さが目立っている：

시아버지는 내게 한마디를 던지다 (義理の父は 私に 一言を 投げかける)
아주머넌 운전수에게 돈 천 원을 더 주다 (おばさんは 運転手に 千ウォンを 上乗せして やる)

5-5 前置の-한테と共起する-를格

【表】前置の-한테と共起する-를格の体言の分類別頻度 計26例中

抽象	: 10	: 38.5%	人間	: 1	: 3.8%
活動	: 6	: 23.1%	身体	: 1	: 3.8%
具体	: 2	: 7.7%	親族	: 1	: 3.8%
文	: 1	: 3.8%	場所	: 1	: 3.8%
物質	: 1	: 3.8%	事物代名詞	: 1	: 3.8%
不完全	: 1	: 3.8%	計	: 26	: 100.0%

-한테と共起する-를格の体言では抽象名詞・活動名詞の圧倒的な優位が確認できる。

5-6 前置の-한테서と共起する-를格

-한테서의例は非常に少ない。

【表】前置の-한테서と共起する-를格の体言の分類別頻度 計3例中

抽象	: 2 : 66.7%
事柄	: 1 : 33.3%

6 他の前置斜格・後置斜格と共起していない-를格

6-1 斜格と共起しない例とする例

前置の共起格のある例、後置の共起格のある例を見たので最後に他の斜格と共起していない例について検討することにする。

前置・後置を問わず斜格と共起している例、間の要素に裸の格の名詞や数量名詞がある例を除いたものを取りあえず「斜格と共起していない例」と考えると、全3044例のうち2486例81.7%がこれに該当する。

斜格のあるグループとないグループを比較すると、主語の比率はほぼ同じで、不活動体主語が斜格のないグループの方に多く、また次のように-를格の体言にかかる連体修飾成分のあるなしにやや違いが出る：

	-를格体言に対する連体修飾成分	
	あり	なし
斜格あり	34.2%	65.8%
斜格なし	42.3%	57.7%

用言がない例は、斜格のあるグループ中には1例もないのに対し、斜格のないグループには19例が認められる。

-를格の名詞の範疇を比較すると、おおむね似た傾向を示すが、団体名詞だけは斜格なしのグループにのみ18例出現する。

動詞の出現頻度を比較するといずれも1位は하다で比率もそう差はないが、2位に来る動詞で違いが出てくる。斜格が共起しないグループでは보다(見る)が2位であるのに対し、斜格が共起するグループでは사다(買う)となっている。<나한테 술을 사다>(私に酒をおごる)や<돈으로 생선을 사다>(お金で魚を買う)、<이 값에 물건을 사다>(この値段で品物を買う)などのように、授受動詞사다가-를格の他に更にもう1項要求するという3項動詞的な性格が濃厚であることを物語っている。斜格が共起しないグループ中では사다는18位に転落する。同様のことが授受動詞주다にも言える。

ただし、-를格の他に常にもう1項を要求するというわけではないこと、および授受動詞だからといって-를格以外のもう1項は常に「…に」に該当する-에게格(-한테格)だというわけではないことも併せて押さえておく必要がある。具体的な言語事実の検討を経ると朝鮮語ではValenzという考え方だけで、動詞ごとに1価動詞・2価動詞などと割り切って考えることは難しいことがわかるのである。

6-2 斜格と共起しやすい動詞

斜格と共起する-를格を持つ例の方が多い動詞には次のようなものがある。共起している代表的な例も添えておく。数字は共起していない例と共起している例をそれぞれ示す：

	共起していない用例数	共起している用例数
	↓	↓
주다 (与える)	8例	9例
		내게 감동을 주다 (私に感動を与える)
		월급으로 가게에 보탬을 주다 (月給で家計の足しにする)
가다 (行く)	4	7
		제주도로 신혼여행을 가다 (濟州島に新婚旅行に行く)
		그에게 시집을 가다 (彼に嫁に行く)
걸다 (掛ける)	5	5
		수경이에게 전화를 걸다 (スギョンに電話を掛ける)
		일에 목숨을 걸다 (ことに命を掛ける)

斜格と共起する-를格を持つ例の比率が比較的高い動詞には次のようなものがある：

하다 (する)	238	45
보다 (見る)	84	11
타다 (乗る)	36	5
받다 (受ける)	29	10

내다 (出す)	27	7
쓰다 (書く・使う)	21	7
사다 (買う)	17	11
치다 (打つ)	15	5
던지다 (投げる)	8	7

6-3 斜格と共起しにくい動詞

以上の動詞とは対照的に、斜格と全く共起していない高頻度の動詞には次のようなものがある：

共起していない用例数	↓	共起している用例数	↓
위하다 (ためだ)	37	0	
들다 (挙げる)	25	0	
나가다 (出る)	23	0	
떠나다 (発つ)	13	0	
풀다 (解く)	12	0	
포기하다 (あきらめる)	12	0	
잊다 (忘れる)	12	0	
用言なし	19	0	

このように後置詞的な用法が大部分であった위하다においては、斜格と共起しているものは1例もないことがわかる。향하다も1例を除いて全て斜格と共起していない。また나가다や떠나다のようにもっぱら場所名詞・位置名詞類を-를格にとる動詞も斜格と共起しにくい傾向がある。なお、用言がないものも斜格と共起しない傾向が確認できる。

斜格と共起している例が1例しかない動詞には次のようなものがある。その例外となった例も併せて示す：

만나다 (会う)	24	1
길거리에서 동창을 만나다 (道で同窓生に会う)		
가지다 (持つ)	20	1
미혼시절에 시간을 가지다 (未婚の頃に時間を持つ)		
향하다 (向かう・向ける)	19	1
발길을 형님댁으로 향하다 (足を兄さんの家へと向ける)		
믿다 (信じる)	13	1
바르는 바람에 속설을 믿다 (塗るので俗説を信じる)		
뜨다 (開ける)	12	1
아침에 눈을 뜨다 (朝、眼を開ける)		
끝내다 (終える)	12	1

신랑의 말에 샤워를 끝내다 (新郎のことばにシャワーを終える)

更に斜格と共に起している例が2例ないしは3例しかない用言には例えば次のようなものがある:

共起していない用例数		共起している用例数
	↓	↓
알다 (知る・わかる)	36	3
사실을 경험으로 알다 (事実を経験で知る)		
집과 멀어지는 것을 다행으로 알다 (家と離れるのを幸いと思う)		
모습에서 마찬가지로였음을 알다 (姿から同じことだったことを知る)		
듣다 (聞く)	28	2
어머니한테 소식을 듣다 (母に消息を聞く)		
말을 아버지한테서 듣다 (ことを父から聞く)		
먹다 (食べる)	18	2
일에 쇼크를 먹다 (ことにショックを受ける)		
물로 약을 먹다 (水で薬を飲む)		
찾다 (探す・訪ねる)	15	3
이번에는 문제를 우리가 찾다 (今度は問題を我々が探す)		
들녘을 내 기억 속에서 찾다 (野を私の記憶の中で探す)		
것인가만을 필사적으로 찾다 (なのかだけを必死で探す)		
부르다 (呼ぶ・歌う)	15	3
목소리로 아버지를 부르다 (声で父を呼ぶ)		
목소리로 번호를 부르다 (声で番号を呼ぶ)		
일조점호 뒤에 애국가를 부르다 (朝の点呼の後に愛国歌を歌う)		
마시다 (飲む)	14	2
카페에서 술을 마시다 (カフェで酒を飲む)		
음식점에서 고구마주를 마시다 (飲食店で芋酒を飲む)		
느끼다 (感じる)	13	2
몸에 이상을 느끼다 (体に異常を感じる)		
고통을 우리의 아픔으로 느끼다 (苦痛を我々の痛みとを感じる)		

【表】斜格の共起の有無による用言の頻度順

共起斜格なし	798語	2486例中	共起斜格あり	521例中
238例 : 하다	:	9.6%	45例 : 하다	: 8.6%
84 : 보다	:	3.4%	11 : 사다	: 2.1%
37 : 위하다	:	1.5%	10 : 받다	: 1.9%
36 : 타다	:	1.4%	9 : 주다	: 1.7%
36 : 알다	:	1.4%	8 : 보다	: 1.5%
29 : 받다	:	1.2%	7 : 쓰다	: 1.3%

28	: 듣다	: 1.1%	·	7	: 던지다	: 1.3%
27	: 내다	: 1.1%	—	7	: 내다	: 1.3%
26	: 들다	: 1.0%	·	7	: 가다	: 1.3%
24	: 만나다	: 1.0%	·	5	: 타다	: 1.0%
23	: 잡다	: 0.9%	·	5	: 치다	: 1.0%
23	: 나가다	: 0.9%	·	5	: 쳐다보다	: 1.0%
21	: 쓰다	: 0.8%	·	5	: 만들다	: 1.0%
20	: 가지다	: 0.8%	·	5	: 걸다	: 1.0%
19	: 향하다	: 0.8%	·	4	: 잡다	: 0.8%
19	: O	: 0.8%	·	4	: 올리다	: 0.8%
18	: 먹다	: 0.7%	·	4	: 열다	: 0.8%
17	: 사다	: 0.7%	·	4	: 두다	: 0.8%
15	: 치다	: 0.6%	·	4	: 놓다	: 0.8%
15	: 찾다	: 0.6%	·	4	: 기다리다	: 0.8%
15	: 부르다	: 0.6%	·			
15	: 만들다	: 0.6%	·			

なお、斜格と共起している例としていない例の-을格の体言分類を調べると次のようになっている：

【表】斜格と共起している例としていない例の体言分類別頻度

共起している例 521例		共起していない例 2486例
102 : 抽象 : 19.6%	—	479 : 抽象 : 19.3%
93 : 活動 : 17.9%	—	387 : 活動 : 15.6%
81 : 具体 : 15.5%	—	362 : 具体 : 14.6%
45 : 身体 : 8.6%	—	198 : 人間 : 8.0%
39 : 人間 : 7.5%	—	185 : 身体 : 7.4%
23 : 場所 : 4.4%	—	155 : 場所 : 6.2%
21 : 人称代名詞 : 4.0%	—	91 : 人称代名詞 : 3.7%
18 : 物質 : 3.5%	—	86 : 親族 : 3.5%
16 : 親族 : 3.1%	—	77 : 事柄 : 3.1%
13 : 事柄 : 2.5%	—	77 : 現象 : 3.1%
12 : 数量 : 2.3%	—	71 : 不完全 : 2.9%
10 : 事物代名詞 : 1.9%	—	53 : 物質 : 2.1%
10 : 現象 : 1.9%	—	51 : 体言形 : 2.1%
8 : 不完全 : 1.5%	—	39 : 時間 : 1.6%
7 : 時間 : 1.3%	—	37 : 数量 : 1.5%
5 : 体言形 : 1.0%	—	34 : 事物代名詞 : 1.4%
4 : 文 : 0.8%	—	34 : 位置 : 1.4%

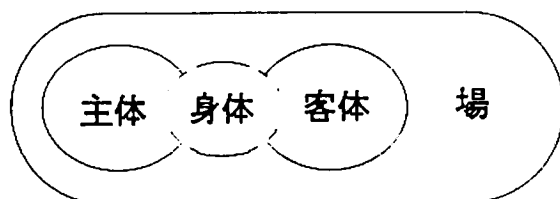
4	: 位置	: 0.8%	28	: 文	: 1.1%
3	: 性質	: 0.6%	18	: 団体	: 0.7%
3	: 営為	: 0.6%	11	: 営為	: 0.4%
2	: 動物	: 0.4%	10	: 性質	: 0.4%
2	: 場所代名詞	: 0.4%	2	: 場所代名詞	: 0.1%
			1	: 動物	: 0.0%

7 -言格を持つ文の

統辞論的＝連語論的な型と動詞分類

最後に、以上見てきたような様々な観点に照らしながら、とりわけ動詞との単語結合および斜格との共起関係を基本的な指標として、-言格を持つ文の統辞論的＝連語論的な型の分類と、それらの型が互いにどのようなはりあいの中にあるか、おのおのの型はどのように連なりあっているかということについての記述を試みることにする。

動作の主体と、その主体が関わる客体、そしてそれら主体客体をとりまく場を考え、それらのうちのどこを-言格に設定するか、そして動詞で表わされた動作の遂行や状態の推移は主にどこで行われるのかを考えると、-言格と動詞の単語結合がもたらす意味にはいくつかの型があり、それら意味論的な範疇と言語形式の上に現れた統辞論・連語論・語彙論的な範疇とは緊密な相関の中にあることがわかる。さらに何を主体に設定し、何を-言格に据えるかという問題は既にテキスト論の領域に踏み込んでみている。



主体と客体とは2項的な対立物としてのみあるのではなく、主体と客体との間には主体の身体という両義的な存在があって主客の間をとりもっている。身体名詞は再帰的な動作を始めとして主体と客体の間を容易に移行するのみならず、時として身体は主体にとっての場ともなりうるという、重要な役割を果たす。主体や客体は人間ではなくものやことである場合もあり、そうした際には主体に属する事物が人間における身体名詞の役割を果たすこともある。

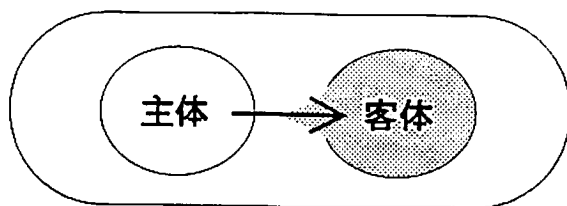
場とはテキストの文脈の中で与えられるところの、主体の存する空間的あるいは時間的な場であり、環境であり状況であるが、これもまた常に客体と区別できるとは限らない。-言格が客体的＝状況的な対象として設定されることはいくらかでもありうるのである。

さらに使役動詞や共起格を必要とする動詞などを典型として、動詞によっては客体

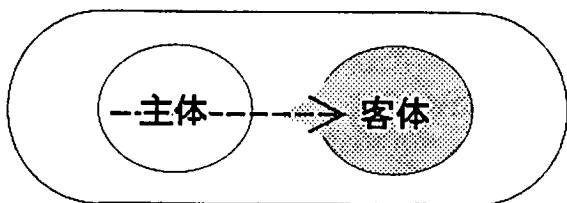
的な項が複数になることもある。

以上の点を踏まえて考えると一語格と動詞の結合には大きく分けて次の5つの型がある：

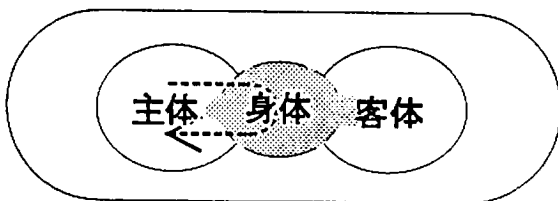
1) 客体的な対象への作用



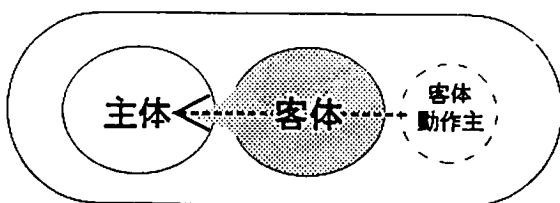
2) 客体的対象への主体内的な作用



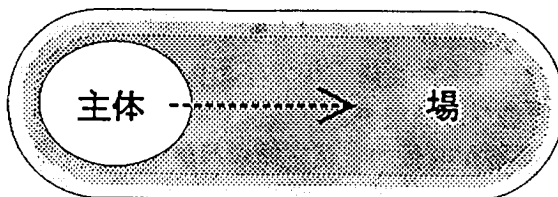
3) 主体への再帰的な作用



4) 客体的な対象からの主体への作用



5) 状況的な対象へのかかわり



● は一語格に設定する対象、→ ---→ は作用・かかわりの強さと方向

以下、順に見て行くことにする。単語結合のそれぞれの型に、例えば<付与動詞>など動詞に対する名づけを与えておいた。それぞれの型に用いられた動詞をその名づけて呼び、それぞれの型を例えば<付与動詞結合>のように呼ぶことを想定したものである。同じ動詞が複数の異なった動詞結合の型に所属することもありうる。基本資料中に現れた主要な型は可能な限り網羅するように努めたけれども、既に見たように例えば不活動体主語が非常に少ないなど、小説という文体に現れにくい型もあると考えられる。他の文体についても更なる調査が必要であろう。

なお、動詞結合の名称のあとの()内には共起し得る格を示した。資料中に実際に現れたものはそのまま共起した格を例にあげてある。

7-1 客体的な対象への作用

最も他動性が強いグループである。-를格に立つ対象は、主体と対峙するところの明確な輪郭を持った客体として設定される。この型の動詞からはしばしば受身形が作られる。また人に何事かをさせるという使役の構造を持つものもこの型に属する。

-에게; -한테格が共起しうる動詞を<与格他動詞>、そうでないものを<非与格他動詞>と名づけるならば、客体的な対象への作用を表すこのグループ中は与格他動詞と非与格他動詞に大きく2分することができる。同様に-를格と-에格が共起しうる動詞を<向格他動詞>、そうでないものを<非向格他動詞>と呼ぶことにする。

7-1-1 付与動詞 (事物+-에; -에다 もの+-를) <事物に事物を付与する>

事物を向格にとり、主として具体名詞などのものの体言を-를格にとる典型的な向格他動詞構造である。菅野裕臣(1987)はこのタイプのうち、-에と-에다の置き換えのきくものを「添加動詞」と呼んでいる。

- 뜰에 잔디를 깔다 (庭に芝を敷く)
- 앞에 돌맹이를 던지다 (前に石を投げる)
- 꽃병에 물을 담다 (花瓶に水を入れる)
- 식칼에 물을 뿌리다 (包丁に水をふりかける)
- 숫가락을 놓다 (箸を置く)
- 꽃병에다 꽃을 꽂다 (花瓶に花を差す)
- 핀을 꽂다 (ピンを刺す)
- 도장을 찍다 (判を押す)
- 설탕을 치다 (砂糖をかける)
- 등짐을 지다 (荷物を背負う)
- 신발을 걸다 (履物を掛ける)
- 논바닥에 불을 지르다 (田に火をつける)
- 고속버스에 몸을 싣다 (長距離バスに身を載せる)

7-1-2 従事動詞 (場など+-에 こと+-를) <場などに活動を加える>

向格に場などを表す体言が来て、-를格には主として活動名詞や抽象名詞などこ的事的な体言が立ち、場などに活動を加えたり、ことに乗り出したり従事する意を表す。<신발을 걸다> (履物を掛ける) が<승부를 걸다> (勝負をかける) になるよ

うに、付加動詞結合の-를格名詞が抽象化するとおおむねこの従事動詞の型に転化する：

선택에 승부를 걸다 (選択に勝負を掛ける)
척도를 어디에다 두다 (尺度をどこに置く)
책임을 무엇에 전가하다 (責任を何かに転嫁する)
택에 연락을 취하다 (お宅に連絡をとる)
가계부에 기재를 하다 (家計簿に記載をする)
파출소에 신고를 하다 (交番に申告をする)
대학에 진학을 하다 (大学に進学をする)
본정통에 살림을 꾸리다 (本町通りに所帯を持つ)

7-1-3 操作動詞 (もの+-를) <事物を操作する>

-를格には主として具体名詞などものを表す体言が立ち、主に身体的な動作を表す動詞が来る結合である。-에格と共に起る場合はその-에格は時や契機の意味を表す状況語的なものとなることが多い：

문을 열다 (ドアを開ける) · 문을 닫다 (ドアを閉める)
손에 손에 태극기를 흔들다 (手に手に太極旗を振る)
벨을 누르다 (ベルを押す)
문을 두드리다 (ドアを叩く)
철망을 치다 (金網をはる)
대문을 밀다 (門の扉を押す)
펜을 들다 (ペンをとる) · 술잔을 들다 (杯を持つ)
책가방을 잡다 (鞆を掴む)
칼을 쥐다 (刀をとる)
열매를 까다 (実を剥く)
펌프를 째다 (ポンプを打ちおろす)
공을 차다 (ボールを蹴る)
주머니를 털다 (財布をはたく)
통장을 펴다 (通帳を開く)
넥타이를 풀다 (ネクタイを解く)
치마를/모자를 내리다 (スカートを/帽子をおろす)
내장을 긁어내다 (内臓をかき出す)
전화통을 붙잡다 (電話機を掴む)
다이얼을 돌리다 (ダイヤルを回す)
차를 몰다 (車を駆る)
고깃배를 타다 (漁船に乗る) · 그네를 타다 (ブランコに乗る)
버스를 타다 (バスに乗る)

<다이얼을 · 돌리다> (ダイヤルを · 回す) のような単語結合はそれ全体が1つの
固い結合として<電話する>という活動動詞の意味で用いられると<친구에게 · 다이
얼을 돌리다> (友達に · ダイヤルを回す) という-에게格を従えた結合に転化しうる。
<펜을 들다> (ペンをとる) も同様である。

7-1-4 対身動詞 (他人の身体+-를) <対他的な身体にかかわる>

上の操作動詞の-를格の対象が客体としての他人の身体になるとこの型となる。

-에게; -한테と共に起しない、典型的な非与格他動詞である:

- 뺨을 갈기다 (頬をひっぱたく)
- 궁둥이를 만지다 (おしりをさわる)
- 옆구리를 찌르다 (脇を突く)
- 손을 잡다 (手を握る)
- 입을 틀어막다 (口を封じる)

7-1-5 加工動詞 (道具・手段+-로 もの+-를) <物を加工して変化させる>

しばしば道具や手段の意の<身体名詞・具体名詞+-로/-으로格>を伴う。基本的には非与格他動詞である:

- 손바닥으로 신발을 닦다 (掌で靴を磨く)
- 눈언저리를 씻다 (眼の縁をぬぐう)
- 불을 끄다 (火を消す)
- 칼을 갈다 (刀を研ぐ)
- 텐트를 접다 (テントを畳む)
- 탁상일기를 찢다 (卓上日記を破る)
- 흙을 파다 (土を掘る)
- 책을 싸다 (本を包む)

7-1-6 變成動詞 (事物+-를) <事物の状態を変化させる>

基本的には非与格他動詞である:

- 그릇을 비우다 (器を空ける)
- 집을 비우다 (家を空ける)
- 대답을 얼버무리다 (答をはぐらかす)

7-1-7 養育動詞 (生物+-를) <生物の状態を変化させる>

- 누에를 치다 (蚕を飼う)
- 육남매를 키우다 (6人兄妹を育てる)
- 여자를 기르다 (女を育てる)

7-1-8 生産動詞 (生産物+-를) <物を作り出す>

動詞が現す行為の後に-를格の名詞が初めてできあがるという結果を表す。希に-에게; -한테と共に起することがある:

- 대본을 쓰다 (台本を書く)・사표를 쓰다 (辞表を書く)
- 입술에 꽃잎을 그리다 (唇に花びらを描く)
- 밀개떡을 만들다 (餅を作る)
- 사진을 찍다 (写真を撮る)
- 커피를 타다 (コーヒーを入れる)
- 일곱을 만들다 (<友達を>7人作る)
- 기름을 짜다 (油を搾る)

次の例は付加動詞でもあると同時に生産動詞的でもある:

- 불을 붙이다 (火をつける)

7-1-9 転換動詞 (事物+ -를 動作後の事物+ -로) <ある事物を他のものとする>

この名称は菅野裕臣(1987)による。おおむね-를格が-로格の前に立つ。基本的に非与格他動詞である:

- 백을 자기 것으로 만들다 (バッグを自分のものにする)
- 노력을 생애의 할일로 삼다 (努力を生涯のなすべきこととする)
- 키를 핑계 삼다 (背を口実にする)
- 목적지를 부산으로 정하다 (目的地を釜山に決める)
- 발길을 형님 댁으로 향하다 (足を兄の家へと向ける)

7-1-10 認定動詞 (-를 -라고/-이라고; -게; -처럼 精神動詞) <事物をあるものとして認定する>

動詞に생각하다など、後述の精神動詞が立つ。-라고などは-로/-으로でも可能なものもある。-라고などは普通-를格の後ろに立つ:

- 자기를 내 전부라고 생각하다 (自分を私の全てと考える)
- 퇴근시간을 탈출의 디데이처럼 생각하다 (退社時間を脱出のディーデーのように思う)
- 이곳을 아침의 망명처쯤으로 생각하다 (ここを朝の亡命場所くらいに思う)
- 가장을 남남이라 여기다 (家長を他人と思う)
- 고모를 못마땅하게 여기다 (叔母を不満に思う)

7-1-11 授与動詞 (人+ -에게; -한테 事物+ -를) <人へ授与して受け取らせる>

与格の<人+ -에게><人+ -한테> (...に) を伴い得る3項動詞構造である。<사람에게 편지를 보내다> (人に手紙を送る) という事態は<사람이 편지를 받다> (人が手紙を受け取る) という事態を導くものであるように、与えられる方の人の動作は基本的に-를格と動詞받다 (受け取る) だけで表せる:

- 운전수에게 돈 천원을 주다 (運転手に千ウオンをあげる)
- 내게 사랑을 주다 (私に愛を与えてくれる)
- 편지를 보내다 (手紙を送る) · 박수를 보내다 (拍手を送る)
- 사직서를 내다 (辞表を出す)
- 전보를 치다 (電報を打つ)
- 소식을 전하다 (消息を伝える)
- 열쇠뭉치를 가져오다 (鍵の束を持って来る)
- 나한테 술을 사다 (私に酒をおごる)
- 물건을 팔다 (品物を売る)
- 이자를 물다 (利子を払う)

同じ사다でも<호감을 사다> (好感を買う) となると与格ではなく属格-의 (...の) をとる非与格他動詞であり、後述の受容動詞になってしまう。

7-1-12 提示動詞 (人+ -에게; -한테 事物+ -를) <人に事物を示す>

与格の<人+ -에게><人+ -한테> (...に) を伴い得る3項動詞構造であるが、実際のテキストでは文脈上でわからせることが多く、与格はこれといって現れないこ

とが多い。上の授与動詞と違って人に事物を提示することだけをいう動詞なので、与えられる方の人の動作は-를格と動詞받다(受け取る)だけでは表せないのが普通である：

동지들께 화이팅을 외치다 (同志たちにファイトのかけ声をかける)
 각시에게 사랑을 고백하다 (新婦に愛を告白する)
 경위를 설명하다 (経緯を説明する)
 얼굴로 여유를 보이다 (顔で余裕を見せる)
 제목을 가르치다 (題名を教える)
 비밀을 털어놓다 (秘密を打ち明ける)
 타락을 지적하다 (墮落を指摘する)
 의자를 가리키다 (椅子を指さす)
 원조를 약속하다 (援助を約束する)
 결혼을 조르다 (結婚をせがむ)
 주기를 청하다 (くれることを頼む)
 떡을 권하다 (餅をすすめる)
 말을 걸다 (ことばをかける)
 말을/이야기를 꺼내다 (ことばを/話を切り出す)
 아무에게나 반말을 쓰다 (誰にでもぞんざいなことばを使う)
 사람에게 평생을 맡기다 (人に一生をゆだねる)
 하나꼬한테 투정을 부리다 (花子に文句を言う)
 데이트를 신청하다 (デートを申し込む)
 애교를 부리다 (愛嬌をふりまく)
 키스를 퍼붓다 (キスを浴びせる)
 신경을 쓰다 (氣を使う) · 인상을 쓰다 (顔をしかめる)
 잘못을 인정하다 (過ちを認める)
 업적을 자랑하다 (業績を自慢する)

次の例のように、-에게格が団体名詞になり-에格をとった結合もある。このことは上の授与動詞でも同じことが言える：

프론트에 사정을 얘기하다 (フロントに事情を話す)

7-1-13 奪取動詞 (事物+-에서 事物+-를) <事物から事物を取り出す・奪取る>

5-3で述べたように、しばしば離格の-에서(…から)を伴う3項動詞構造である：

냉장고에서 아이스크림을 꺼내다 (冷蔵庫からアイスクリームを出す)
 모자에서 흙을 털어내다 (帽子から土をとる)
 과외지도에서 손을 떼다 (課外指導から手を引く)
 손에서 원고뭉치를 나뉘게다 (手から原稿の束をひったくる)
 돈을 훔치다 (お金を盗む)
 잡초를 뽑다 (雑草を抜く)

7-1-14 対人動詞 (人+-를. -에게; -한테をとらない) <人にかかわりあう>

>

人に対するかわりあいという単語結合であるが、人を表す与格の-에게; -한테と共起しない、非与格他動詞だという点で授与動詞や提示動詞結合と異なる。主体の動作は単なる身体的な動作というより、心的な営みでもることが多い:

동창을 만나다 (同窓生に会う)
학생을 맞다 (学生を迎える)
아들딸들을 달래다 (息子娘たちをなだめる)
그이를 재촉하다 (彼を催促する)
아이들을 보살피다 (子供たちを世話する)
아버지를 돕다 (父を手助けする)
나를 죽이다 (私を殺す)
아이들을 가르치다 (子供たちを教える)
친구를 데리다 (友達を連れている)
상인들을 쫓다 (商人たちを追う)
중생을 따르다 (衆生に従う)
기집애들을 사귀다 (女の子たちとつき合う)
부모를 설득하다 (父母を説得する)
여자를 외면하다 (女を相手にしない)
강과장을 찾아가다 (姜課長を訪ねる)
식구들을 찾아나서다 (家族を捜しに出る)
나를 찾아오다 (私を訪ねて来る)
친구를 찾아내다 (友人を捜し当てる)

7-1-15 行為動詞 (人+-를, -에게; -한테をとらない) <人を動かす>

上の対人動詞の下位範疇と考えてもよい。主体の動作が単なる身体的動作である点だけが対人動詞と異なっている:

신부를 안다 (新婦を抱く)
신부를 껴안다 (新婦をかき抱く)
전신으로 승객을 밀다 (全身で乗客を押す)

7-1-16 処遇動詞 (人など+-를) <人などに対して態度を取る>

対人動詞に連なる一群である。-를格には主として人間名詞・親族名詞が立つが団体名詞が立つこともある:

목소리로 아버지를 부르다 (声で父を呼ぶ)
속으로 어머니를 욕하다 (心の中で母を罵る)
사람들을 위협하다 (人々を脅す)
사람들을 탓하다 (人のせいにする)
집안식구들을 꾸짖다 (家の者たちを叱る)
민수를 힐난하다 (민스를なじる)
마을을 지키다 (村を守る)
마을을 휩쓸다 (村を襲う)

7-1-17 言語動詞 (人+-에게; -한테; -더러) <人に言語活動を行う>

의견을 말하다 (意見を述べる)

책임을 묻다 (責任を問う)

용서를 빌다 (許しを乞う) · 잘못을 빌다 (過ちを詫びる)

7-1-18 加減動詞 (事物+-를) <事物の量や値を変化させる>

가치를 높이다 (価値を高める)

키를 낮추다 (背を低くする)

값을 깎다 (値段を値切る)

미장원을 한번 줄이다 (美容院<に行くの>を1度減らす)

물건들을 치우다 (物をかたずける)

나이에 십년을 더 치다 (歳に10年を更に加える)

7-1-19 使役動詞 <人に動作などをさせる>

<主体Aが動作主Bに動作Cをさせる>のごとく、主体が他の人に命じるなどして何らかの動作などをさせる意味的な関係を使役と呼ぶ。統辞論上ではABCの3項のうち、動作主Bが-에게; -한테 (...に) 格をとる構造もあり、また-를格をとる構造もある。また動作Cが他動詞の場合と自動詞の場合とがある。現象的には常に3項が体言の形で揃うとは限らない。使役動詞以外の他動詞は主体と動作主が基本的には一致している点が使役動詞と単純な他動詞の大きな違いではあるがそれらは連続していてその境界は形式上からは判定しがたい。

-를格に人が来るものを<人間使役>と呼び、事物が来るものを<事物使役>と呼ぶことにする。それぞれ形式上では分析的な使役形と総合的な使役形とがある。

7-1-19-1 人間使役動詞 (人+-를)

分析的な使役形としては<-게 하다>と<-게 만들다>の形がある:

시부모를 긴장케 하다 (義理の父母を緊張させる)

아버지를 난처하게 만들다 (父を困らせる)

저희를 고민하게 만들다 (私たちを悩ませる)

総合的な使役形には接尾辞-이-·-히-·-리-·-기-·- | 우-などで形成される動詞がある:

담당은 함께 연행된 일곱 사람을 나란히 세웠다. <신발303>

担当は共に連行された7人を1列に立たせた。

ただし使役動詞は次の束縛動詞との区別が必要である。

7-1-20 束縛動詞 (人+-를 派生動詞。-에게; -한테をとらない。) <動作を強要したり感情を束縛したりする>

次のような앉히다は<意志を持った子供(=動作主)に命じて座らせる>という意の使役動詞ではなく、<無意志的な存在である子供(≠動作主)をブランコにさせる>という意の他動詞である:

그렇게 걱정하고 나니까 아기를 그네에 앉히고 어저고 하는 꿈에 젖어 있던 일이 어리석게만 느껴졌다. <병어회197>

そう決心すると、子供をブランコに（抱いて）乗せたりなどという夢にひたっていたことが愚かにばかり感じられた。

上の例のように、能動の意の動詞からの派生動詞で、-를格に活動体体言をとってその活動体で表される人などに直接働きかけ、動作などを強要したり感情などを束縛したりする他動詞を<束縛動詞>と呼び、使役動詞とは区別して扱うことにする。束縛動詞は非与格他動詞で-에게; -한테と共起しない。

一方、次の例を見よう：

흥분해서 떠드는 학생들을 우선 자리에 앉히고 나서 (=앉게 하고 나서) 김 선생은 조용히 이야기를 하기 시작했다. <作例>

興奮して騒ぐ学生たちをまず席につかせてから金先生は静かに話しはじめた。

こうした場合の앉히다は<主体김 선생（金先生）が動作主학생들（学生たち）に 앉다（座る）という意志的な動作をさせる>という使役動詞である。<앉게 하고 나서>と言い替えてもおおむね意味は変わらないこともその傍証となろう。次のような例もまた使役の앉히다である：

그러자 어머니가 나를 불러앉혀 놓고 난생 처음 부드러운 얼굴로 타이르시는 것이었어요. <신혼51>

すると母が私を呼びつけて座らせておいて、生まれて初めてやさしい顔で言い聞かせるのでした。

このように앉히다は自動詞앉다（座る）からいわゆる使役の接尾辞-히-によって作られた派生語ではあるが、片や他動詞、片や使役動詞の振る舞いをするわけである。このように使役かどうかの判断は語形成など、単語それ自体では判断できぬばかりか、単語結合のレベルでも判断できぬことも多く、正確な位置づけには必ず文脈の助けが必要となることを確認しておかねばならない。頻度的には接尾辞-이-・-히-・-리-・-기-・-|우-などで形成される他動詞は使役動詞よりも束縛動詞であることが多い：

신郎을 애태우다（新郎に気をもませる）

우리를 괴롭히다（我々を苦しめる）

신부를 울리다（新婦を泣かせる）

7-1-19-2 事物使役動詞（事物+-를）

-를格に事物が来る事物使役動詞の分析的な使役形としては、시키다（…させる）とその合成語を用いた形式が頻度が高い。しばしば-에게; -한테と共起する：

...것을 남편에게 이해시키다（…なことを夫に理解させる）

각 부부별로 노래를 시키다（各夫婦別に歌を歌わせる）

결혼을 시키다（結婚をさせる）

ただし次の시키다は<注文する>の意の操作動詞である：

인터폰으로 맥주 두 병을 시키다（インタフォンでビール2本を頼む）

また次のように-를格に事物ではなくて人がたつものは先の束縛動詞であり、-에게; -한테をとらぬ非与格他動詞である:

아버지를 안심시키다 (父を安心させる)

事物使役には<-게 하다>の形もある:

섬을 보게 하다 (島を見させる)

ただしここでは<섬을 보다>が成立するので섬을の用言は보다である。

接尾辞-이-・-히-・-리-・-기-・-우-などで形成される総合的な使役形はやはり単純な他動詞との区別が難しい。次の例は与格他動詞で、7-1-12で述べた提示動詞に属する:

여자한테 그것을 알리다 (女にそれを知らせる)

귀가를 알리다 (帰宅を知らせる)

7-1-21 強制動詞 (事物+-를 接尾辞-이-・-히-・-리-・-기-・-우-などで形成される派生動詞) <人に事物を強制する>

입다 (着る) -입히다 (着せる・着させる) のように対応する他動詞形を持つ動詞のうち、-를格に事物が来る動詞のうち使役でないものは強制動詞と呼び、事物使役動詞と区別する:

옷을 입히다 (服を着せる)

수갑을 채우다 (手錠をはめる)

옷을 벗기다 (服を脱がせる)

7-1-22 指令動詞 (人+-를; -에や-로など) <人に動作などを指図する>

活動体を-를格にとり動作などを強要する点で束縛動詞と似ているが、束縛動詞が<있다-있히다>のような対応する能動形動詞を持つのに対し、この指令動詞は持たない。また人を-를格にとり-에게; -한테をとらぬ非与格他動詞だという点でも7-1-14の対人動詞に連なるものであるが、-에格や-로格と共起しやすい点が対人動詞とやや性格を異にする:

딸을 대학에 보내다 (娘を大学にやる)

대청으로 그를 맞아들이다 (居間に彼を迎え入れる)

7-1-23 比較動詞 (人など+-를) <人と比較対照する>

人間名詞などを-를格にとり、比較対照を表す。非与格他動詞である:

동식을 서너 걸음 앞서다 (トンシクに数歩先んじている)

7-1-24 共同動詞 (人間名詞+-과/-와; -하고。-에게は不可) <人と共にことをする>

単数の主体の場合に共格<人間名詞+-과/-와; -하고> (…と) をとりえ、かつ-에게 (…に) はとりえないものである。例えば最初の例の共格박과장과 (朴課長と) は与格박과장에게 (朴課長に) で言い替えることができない。また共格がない場合は主体が複数となることが多い:

박과장과 행동을 같이하다 (朴課長と行動を共にする)

대화를 나누다 (対話を交わす)

이야기를 주고받다 (話のやりとりをする)

연애를 하다 (恋愛をする)

힘을 합치다 (力を合わせる)

팔짱을 끼다 (腕を組む)

<선을 보다> (見合いをする) や <결혼식을 올리다> (結婚式をあげる) は処理動詞との中間的な例であろう。なお、これら共同動詞結合は、主体への再帰的な作用を表すグループへと連なる一群である。それらについては7-3で見る。

7-1-25 処理動詞 (事物+-를) <ことを処理する>

-를格には主として事物を表す名詞、とりわけ抽象名詞・活動名詞・団体名詞が立つ。<할아버지를 비웃다> (おじいさんをあざ笑う) は先の処遇動詞結合であるが、<수준을 비웃다> (水準をあざ笑う) に見えるように、-를格が人間でなくなるとこの処理動詞結合に転化する。<시험을 보다> (試験を受ける) のように形式動詞との結合がしばしば見られる。なお処理動詞でも <누나하고 얘기를 시작하다> (姉と話を始める) は人間名詞+-하고 (…と) もとりうるが、<누나에게 얘기를 시작하다> (姉に話を始める) の如く、-하고の代わりに-에게 (…に) も可能だという点で共同動詞とは構造が異なっている。また単数主体でも自由に用いられる点が共同動詞と性格がやや異なっている：

얘기를 시작하다 (話を始める)

업무를 계속하다 (業務を続ける)

회사를 그만두다 (会社を辞める)

직장을 관두다 (職場を辞める)

결혼식을 마치다 (結婚式を終える)

식사를 끝내다 (食事を終える)

학교를 파하다 (学校がひける)

일을 망치다 (事を台無しにする)

최선을 다하다 (最善を尽くす)

약속을 어기다 (約束を違える)

약속을 지키다 (約束を守る)

계획을 세우다 (計画を立てる)

전략을 짜다 (戦略を組む)

결론을/결정을 내리다 (結論を/決定を下す)

벌을 내리다 (罰を下す)

쿠데타를 일으키다 (クーデターを起こす)

TKO승을 거두다 (TKO勝ちをおさめる)

노래를 부르다 (歌を歌う)

대학을 졸업하다 (大学を卒業する)

인생을 아름답게 이루다 (人生を美しく成就する)

농사를 짓다 (農業をする)

시험을 보다 (試験を受ける)

말을/뒤를 잇다 (ことばを/あとをつぐ)

울분을 풀다 (鬱憤を晴らす)

この処理動詞は-를格にとる名詞が主体の外にある物理的な物体よりは主体のか

かわっている営みを表していることが多く、次の7-2のグループとの中間的な位置をなす一群だといえる。

7-2 客体的対象への主体内的な作用

対象が主体の外にあっても、動作自体は専ら主体内での作用が主となっているグループである。飲食動詞や知覚動詞・精神動詞のように-를格の対象が明らかに客体的な位置にあるものから、生理動詞のように-를格の対象が息や涙など主体から発せられた事物である一群へと連なる。このグループはほとんどが非与格他動詞である。

7-2-1 飲食動詞 (飲食物+-를 飲食を表す動詞) <飲食物を摂取する>

밥을 먹다 (ご飯を食べる) · 약을 먹다 (薬を飲む)

술을 마시다 (酒を飲む)

소주 한 병을 마시다 (焼酎一本を飲む)

가시를 삼키다 (小骨を飲み込む)

담배를 태우다 / 피우다 (煙草を吸う)

7-2-2 知覚動詞 (事物・人+-를 知覚を表す動詞) <対象を知覚する>

사진을 보다 (写真を見る) · 아버지를 쳐다보다 (パパを見つめる)

아래를 내려다보다 (下を見おろす) · 동생을 노려보다 (弟を睨む)

얘기를 듣다 (話を聞く) · 소리를 듣다 (音を聞く)

말을 알아듣다 (ことばを聞き取る)

작업을 바라다보다 (作業を眺める)

눈치를 살피다 (様子を見る)

뒷모습을 지켜보다 (後ろ姿を見守る)

엄마를 쳐다보다 (お母さんを見つめる)

知覚動詞結合<집을 보다><家を・見る>が1つの固定的な結合として<留守を見る><留守を守る>の意味で用いられるように、知覚動詞結合には処理動詞結合など他の型の動詞結合に発展しているものも多い。

7-2-3 精神動詞 (客体的対象+-를 精神活動を表す動詞) <客体的対象に対して精神活動を行う>

<사진을 보다> (写真を見る) などの知覚動詞から<사건을 이해하다> (事件を理解する) のような精神動詞へと連なっているのであろう：

사실을 알다 (事実を知る)

그것을 깨닫다 (それを悟る)

나를 알아보다 (私をそれとわかる)

나를 모르다 (私を知らない)

사건을 / 할아버지를 이해하다 (事件を / おじいさんを理解する)

말을 / 나를 / 나라를 믿다 (ことばを / 私を / 国を信じる)

하나꼬를 의심하다 (花子を疑う)

그이를 사랑하다 (彼を愛する)

송편을 좋아하다 (餅を好む) · 남편을 좋아하다 (夫が好きだ)

여자를 싫어하다 (女を嫌う)

아버지를 원망하다 (父を恨む)
 아내를 아끼다 (妻を大事にする)
 삶을 꿈꾸다 (暮らしを夢見る)
 미선을/앞날을 기대하다 (ミソに/将来に期待する)
 북극을 상상하다 (北極を想像する)
 큰오빠를/편지를 생각하다 (長兄のことを/手紙のことを思う)
 결심이 흔들릴 경우를 생각하다 (決心が揺れた場合を考える)
 주제를 택하다 (主題を選ぶ)
 책을 고르다 (本を選ぶ)
 됴됨이를 평가하다 (人となりを評価する)
 요행수를/있기를 바라다 (まぐれ当たりを/あることを願う)
 편지를/남편을/오기를 기다리다 (手紙を/夫を/来るのを待つ)

7-2-4 生理動詞 (身体に関わる現象名詞など+-를 生理作用を表す動詞) <生理的な作用をする>

-를格には主体から発せられた事物など、身体に関わる名詞がくる：

한숨을 쉬다 (ため息をつく)
 숨을 죽이다 (息を殺す)
 소리를/고함을 지르다 (悲鳴を/叫び声を上げる)
 용변을 지리다 (便を洩らす)
 울음을 터뜨리다 (泣き出す)
 실소를 터뜨리다 (失笑をもらす)
 눈물을 흘리다 (涙を流す)
 숨을 거두다 (息を引きとる)
 코를 골다 (いびきをかく)
 잠을 자다 (眠る)
 애를 낳다 (子を産む)
 소리를 내다 (声を出す)
 냄새를 풍기다 (匂いを発する)

これらは-를格の対象が主体の心理の内にあると考えられる次の心理動詞へと連なっている。また<미소를 짓다> (ほほえむ) など、7-3-5 表情動詞に連なるものもある。

7-3 主体への再帰的な作用

7-3-1 心理動詞 (主体内の対象+-를 精神活動を表す動詞) <主体が主体内の心的な対象に対して作用する>

精神動詞と似ているが、-를格で表される対象が主体のうちにいる場合がこれで、心的な作用を表す：

정신을/기운을 차리다 (氣をしっかりと持つ)
 의욕을 잃다 (意欲を失う)
 기억을 잃다 (記憶を失う)

욕심을 내다 (欲を出す)
 화를 내다 (怒る)
 쾌감을／고통을 느끼다 (快感を／苦痛を感じる)
 증오를／앙심을 품다 (憎惡を／恨みを抱く)
 신경을 곤두세우다 (神經を尖らす)
 고민을 하다 (悩む)
 궁리를 하다 (思案をする)
 생각을 하다 (思いをする)
 생각을 떠올리다 (想いを浮かべる)
 기쁨을 누리다 (喜びを味わう)
 실패를 예감하다 (失敗を予感する)
 겁을 먹다 (怖じ気づく)
 결기를 세우다 (かっとなる)
 마음을 이기다 (心に打ち勝つ)
 인사하고 싶은 마음을 참다 (挨拶したい気持ちをこらえる)
 생각을／꿈을 포기하다 (考えを／夢を諦める)
 마음을 감추다 (気持ちを隠す)
 결심을 굳히다 (決心を固める)

7-3-2 表情動詞 (表情など+-를) <主体が主体の表情を制御する>

心理動詞が心的な作用として主体内に留まるのに対し、こちらはその外的な表現の方に重点がある：

미소를／표정을 짓다 (微笑を／表情を作る)
 포즈를／자세를 취하다 (ポーズを／姿勢を取る)

上の例は生産動詞的でもあるが、次の例はそうではない：

태도를 바꾸다 (態度を変える)
 감정을 폭발시키다 (感情を爆発させる)
 목소리를 가다듬다 (声を落ちつかせる)

7-3-3 着用動詞 (衣服+-를 着用を表す動詞) <主体が主体自身の衣服などを着用する>

操作動詞より連なる一群であるが、動作が再帰的である点で客体的な対象への作用のグループとの境界的な位置にある結合である：

한복을 걸치다 (民族服をまとう)
 넥타이를 잡아매다 (ネクタイを締める)
 머리에 모자를 쓰다 (頭に帽子をかぶる)
 이불을 뒤집어쓰다 (布団をかぶる)
 갑옷을 입다 (鎧をまとう) · 옷을 입다 (服を着る)
 몸을 꾸미다 (身を飾る)
 옷을 갈아입다 (服を着替える)
 화장을 고치다 (化粧を直す)

7-3-4 脱衣動詞 (衣服+-를 取り外しを表す動詞) <衣服などを取り外す>

모자를 벗다 (帽子を脱ぐ)

땀을 닦다 (汗をぬぐい取る)

7-3-5 喪失動詞 (事物+를 喪失を表す動詞) <事物を放棄・喪失する>

所有・具備していたものやするはずのものを主体が失うことを表す:

명예를 버리다 (名譽を捨てる)

손을 뿌리치다 (手をふりほどく)

신발을 잃다 (靴をなくす)

버스를 놓치다 (バスを逃す)

나를/첫사랑을 잊다 (私を/初恋を忘れる)

오なじ있다でも、<의식을 잃다> (意識を失う) のように-를格が主体内の対象になると心理動詞とまたがることになる。

7-3-6 身体動詞 (主体自身の身体+-를 動作動詞) <主体が主体自身の身体を動かす>

-를格に主体自身の身体を表す名詞が立つ結合で、再帰的動作を表す典型的な一群である:

손으로 입을 막다 (手で口を塞ぐ)

손으로 손을 잡다 (手で手を握る)

고개를 내밀다 (顔をつき出す)

앞에 무릎을 꿇다 (前にひざまずく)

몸을 뒤틀다 (身をよじる)

눈을 뜨다 (眼を開ける)

이를 갈다 (齒ぎしりする)

고개를 돌리다 (振り返る)

고개를 들다 (顔を挙げる)

고개를 숙이다 (頭を垂れる)

고개를 젖다 (首を振る)

몸을 떨다 (身を震わせる)

머리를 말리다 (髪を乾かす)

머리를 조아리다 (頭を下げる)

팔을 벌리다 (腕を広げる)

눈을 비비다 (眼をこする)

눈시울을 적시다 (目頭を熱くする)

코를 풀다 (はなをかむ)

허리를 굽히다 (腰を屈める)

몸을 일으키다 (身を起こす)

입을 열다 (口を開く)

배를 채우다 (腹を満たす)

일손을 멈추다 (仕事の手を休める)

<장사에・손을 대다> (商売に・手をつける) などは身体動詞構造から-에格を必須成分とする構造に転化したものである。

7-3-7 出沒動詞 (主体自身+-를 出沒を表す動詞) <主体が自身を出現させたり消滅させたりする>

학교에서 자취를 감추다 (学校から姿をくらます)

모습을 드러내다 (姿を現す)

모습을 나타내다 (姿を現す)

7-3-8 所有動詞 (事物+-를 所有を表す動詞) <所有・具備する>

힘을/가지다 (力を持つ)

애를 가지다 (子をはらむ)

관심을/기대를 갖다 (関心を/期待を持つ)

준비를 갖추다 (準備を整える)

기차표를 끊다 (汽車の切符を買う)

この所有動詞には-를格に立つ名詞の性格によって他のカテゴリーにまたがってしまう中間的な例が多い。<모임을 가지다> (集まりを持つ)などは処理動詞との中間的な例であろう。また<자리를 찾다> (席を見つける)なども知覚動詞や精神動詞ともまたがっているような例である。また<시간을 가지다> (時間を持つ)のように-를格に時間名詞が立つと7-5の状況的な対象へのかかわりのグループに属する経験動詞へと連なることになるし、<안방을 차지하다> (居間を取る・居間に陣取る)のごとく場所名詞をとってもやはり状況的な対象へのかかわりの性格を帯びることになる。

7-4 客体的対象からの主体への作用

他動詞であっても他動性が非常に弱く、客体的な対象に働きかけるというよりはむしろ受身的である動詞がこれに属する。まずほとんどの動詞が受身形をつくることはできない。受身動詞と、他動詞である享受動詞・受容動詞は区別される。また享受動詞は-에게서; -한테서 (...から) をとりうるもの、受容動詞は主として-에게서; -한테서などの共起格なしで用いられるものである。このグループでは受身動詞が与格をとるほかは、与格他動詞が多いが非与格他動詞も見られる。

7-4-1 受身動詞 (人+-에게; -한테) <行為を受ける>

-를格に事物が来る<事物受身>は多い:

조사를 받다 (調査を受ける)・허락을 받다 (許しを得る)

평가를 받다 (評価を受ける)・소개를 받다 (紹介される)

아가씨에게 오해를 받다 (娘さんに誤解される)

망신을 당하다 (恥をかく)・참패를 당하다 (惨敗を期す)

비웃음을 당하다 (あざ笑われる)

가방을 빼앗기다 (鞆を盗られる)

모자를 밟히다 (帽子を踏まれる)

-를格に人間がくる<人間受身>もあるが頻度は少ない:

사람을 소개받다 (人を紹介してもらう)

7-4-2 享受動詞 (人+-에게서; -한테서) <人から事物を受け取る>

享受動詞の多くは「人から」の意を表す奪格-에게서; -한테서 (...から) を与格

-에게; -한테 (...に) で言い替えることができる:

편지를 받다 (手紙をもらう) · 도움을 받다 (手助けを受ける)

옷을 빌리다 (服を借りる)

빚을 내다 (借金をする)

월급을 타다 (月給を貰う)

물을 얻다 (水をもらう)

사법을 배우다 (司法を学ぶ)

아르바이트로 용돈을 조달하다 (アルバイトで小遣いを調達する)

次の例は奪格-한테서を与格-한테で言い替えると意味が変わってしまう:

백을/꽃을 사다 (バッグを/花を買う)

7-4-2 受容動詞 (事物+-를) <ことを被る>

動詞そのものは3項動詞的なものが多いが実際にはほとんど2項動詞として用いられる:

시험에 백점을 맞다 (試験で百点をもらう)

안정을 얻다 (安定を得る)

상처를 입다 (傷を受ける)

충격을 받다 (衝撃を受ける) · 벌을 받다 (罰を受ける)

호감을 사다 (好感を買う)

この受容動詞は次のような例から生理動詞など他の結合に連なっている:

나이를 먹다 (歳をとる) · 더위를 먹다 (暑気あたりする)

7-5 状況的な対象へのかかわり

-를格が場や時、環境といった状況的な対象として設定されているグループがこれである。これらの動詞を自動詞と考える研究者もあるが、ここでは他動詞の下位範疇と考えておく。とりわけ経験動詞の結合では、-를格と結合する用言の位置にどんな自動詞でも立ち得るというわけではないことにも注目すべきであろう。もちろん形容詞は立たない。なお、このグループは先のグループより遥かに他動性が弱く、大部分の動詞は受身形を作りえない。このグループは基本的に全て非与格他動詞である。

7-5-1 移動動詞 (場・人+-를 移動を表す動詞) <場や人を訪れる>

場所名詞や人間名詞が-를格に立ち、主体の移動を表す。<학교를 가다> (学校へ行く) が<학교에 가다> (学校に行く) となりうるように、-를格の代わりに-에게や-한테; -한테格を従えた自動詞の移動動詞と相互に転化しうる:

학교를 가다 (学校へ行く)

우리집을 찾아오다 (うちを訪ねて来る)

읍내로 농업학교를 다니다 (村の方へ農業学校に通う)

민수를 찾아가다 (민스를訪れる)

7-5-2 外出動詞 (営為名詞+-를 移動を表す動詞) <営みを行いに移動する>

営為名詞を-를格に従え、移動動詞が来る構造である。営為名詞は移動する目的になる。-를格は-에게で言い替えることができない:

구경을 가다 (見物に行く)

서울로 신혼여행을 오다 (ソウルに新婚旅行に来る)

방으로 도망을 가다 (部屋に逃げて行く)

일을 나가다 (仕事に出かける)

구경을 다니다 (見物して回る)

7-5-3 離脱動詞 (場+-를 移動を表す動詞) <場としての対象から離脱する>

-를格は主体がそこから離脱する場としての対象を表す。나오다のような移動動詞のごとく-를格を奪格の-에서で言い替えることができるものもある:

집을 나가다 (家を出る)

다방을 나오다 (喫茶店を出る)

교무실을 나서다 (職員室を出る)

마을을 떠나다 (村を発つ)

마을을 뜨다 (村を離れる)

소녀티를 벗어나다 (少女らしさから抜けでる)

7-5-4 往来動詞 (場+-를 移動などを表す動詞) <場としての対象のうちを移動する>

-를格には場所名詞・位置名詞が来て、主体は場として捉えた対象の中を移動する:

들길을 걷다 (野道を歩く)

하늘을 날다 (空を飛ぶ)

계단을 오르다・올라가다 (階段を上がる)

소나무밭을 지나다 (松畑を過ぎる)

문턱을 넘다 (敷居をまたぐ)

관문을 거치다 (関門を経る)

호수를 건너다 (湖を渡る)

밀림을 헤치다 (密林をかき分ける)

혼란을 겪다 (混乱を経る)

7-5-5 経験動詞 (体験・環境+-를) <時や環境としての対象を経験する>

<파나마운하를 거치다> (パナマ運河を経る) という往来動詞構造の場所名詞が<연애를 거치다> (恋愛を経る) のように体験や環境を表す名詞に代わるとこの型になる。更に進んで時間名詞を-를格にとって経験した期間を表すことができる:

첫날밤을 맞다 (初夜を迎える)

첫날밤을 치르다／보내다 (初夜を過ごす)

시험을 앞두다 (試験をひかえる)

대단원을 맺다 (大団円を迎える)

결정을 보다 (決定を見る)

기회를 노리다 (機会をうかがう)

밤을 지새우다 (夜を明かす)

거부감으로 밤을 새우다 (拒否感で夜を明かす)

오년간을 사이 좋게／밤을 지내다 (5年間を仲良く／夜を過ごす)

반나절을 헤매다 (半日さまよう)

스물을 넘다 (二十歳を越える)
간격을 두다 (間隔を置く)
시간을 끌다 (時間を長引かせる)

これら経験動詞は、次のような例を紐帯として自動詞のカテゴリーへと連なっていると見ることができる：

몇번을 들랑거리다 (何度も出入りする)
한참을 울다 (しばらくの間泣く)

結局のところ他動詞と自動詞の区別は、個々の動詞に固有不変の属性と考えるのではなく、他の単語との共起関係のなかでのみ最終的に定まると考えるべきであろう。そうであるならば-를格と共起している動詞は他動性の強弱にかかわらず全て他動詞であるとも考えることも可能になってくる。〈한참을 울다〉のような例は、基本的には自動詞結合の中で用いられる울다 (泣く) が時間名詞を対格にとることによって他動詞結合を結びながら他動詞化しているものだと見ることができるのである。

「動詞울다は自動詞である」といった具合に固定的に考えるのではなく、これこれの条件のもとではこの動詞は自動詞であり、同じ動詞がまた別の条件下では他動詞のようにふるまうというように、自動詞と他動詞という複数のカテゴリー間を動き回る言語現象を認める方がより言語事実に近いと考えたい。

〈한참을 울다〉が表す事態は自動詞結合〈한참 울다〉が表す事態と違いはないが、한참という時間を対象化して捉えているという点では、-를格という形式はやはりいくばくかのニュアンスの差を生み出しているという点では、いづれにせよ、言語形式が表す事態が同一だからといって言語形式のカテゴリーが常に同一である必要はないし、ニュアンスの差がとりたてて記述するほどではないからといって言語形式上の差を不問に付す必要もないのである。言語が形式にのっとったものである以上、カテゴリー設定の基準もまた可能な限り形式に依拠する方が言語学の現段階では妥当であろう。

以上述べてきた、主として他動詞で-를格を受けるもののほかに、3-2-6などで述べた위하야などの後置詞で受けるもののグループ、3-3で述べた〈-를格 -로 / -으로格〉の型を始めとする用言のないグループがあり、それらを合わせれば-를格の基本的な用法としてはおおむね尽くされたことになる。

なお、資料中10例以上出現した高頻度の用言をとりあげ、それぞれの用言について-를格の体言範疇の量的な分布を表したgradation-matrixと、主要な用言의가나다順リスト、および動詞結合の一覧を本稿末尾に付した。

7-6 機能動詞

以上のような単語結合による動詞分類の他に、機能の点から、機能動詞を抽出することができる。-를格に立つ名詞に語彙的な意味のほとんどを負わせて、動詞自体は文法的な機能だけを受け持つ動詞である。中でも하다はその典型的な例といえよう。機能動詞結合全体が更に-를格をとる形式も、極端な例を挙げれば〈그 문제를 한참을 고민을 하다〉(その問題をしばらくの間を苦悶をする) のような形で理論的にはありえそうだが、例えば〈그 문제에 대해서 한참 고민을 하다〉のようにほぐされ

てしまうことがほとんどで、機能動詞の-를格の重出は資料中には出てこない：

일본에서 공부를 하다 (日本で勉強をする)
악수를 하다 (握手をする)・고민을 하다 (悩む)
결혼식을 올리다 (結婚式をあげる)
택에 연락을 취하다 (お宅に連絡をとる)
포즈를/자세를 취하다 (ポーズを/姿勢を取る)
끝장을 내다 (けりをつける)・빚을 내다 (借金をする)
결정을 내리다 (決定を下す)・결론을 내리다 (結論を出す)
다짐을 두다 (念を押す)
고집을 부리다 (我を張る)・애교를 부리다 (愛嬌をふりまく)
살림을 살다 (暮らしをする)
계획을 세우다 (計画を立てる)
악을 쓰다 (わめく)
농사를 짓다 (農業をする)
야단을 치다 (叱る)・소리를 치다 (叫ぶ)
아우성을 치다 (喚声を上げる)・줄행랑을 치다 (高飛びをする)
살림을 꾸리다 (所帯を持つ)

なお前述のように機能動詞結合の中には分離用言が非常に多い。

7-7 無意志動詞

他動詞は一般に命令形・勧誘形・I-고 싶다の願望形を作ることができるので菅野裕臣(1986-7)も言うように基本的には意志動詞であると考えてよいが、専ら不活動体主語で用いられる次のような例は無意志動詞的である：

대단원을 맞다 (大団円を迎える)
결정을 보다 (決定を見る)

不活動体主語が立つと命令形・勧誘形が作りにくいこともあって、次のような例でも不活動体主語の場合は無意志動詞的になる：

그 즐거움이 여자의 신경을 건드리고 경계의 촉각을 세우게 했다. <군것질 34>

その楽しみが女の神経にさわり、警戒の触角を立たしめた。

7-8 動名詞他動詞

<있기를 바라다> (あらんことを願う) のように<I-기를 動詞>の形式をとる他動詞は極めて限定されているが、このグループを<動名詞対格他動詞>あるいはより簡単に<動名詞他動詞>と呼ぶことができよう。菅野裕臣(1987)は<I-기를

動詞>の形式をとりうる他動詞のうち、願望文を作るものを「願望動詞」と呼んだが、これが動名詞他動詞の典型である。動名詞他動詞構造は바라다(望む)・원하다(願う)・부탁하다(頼む)・조르다(せがむ)・청하다(頼む)・권하다(すすめる)・빌다(乞う)・노리다(ねらう)・꿈꾸다(夢見る)・상상하다(想像する)・기다리다(待つ)・기대하다(期待する)・믿다(信じる)・자청하다(自ら請う)などで作られる。この願望動詞は提示動詞や精神動詞と重なるものが多いことが注目される。좋아하다(好む)や싫어하다(嫌う)・택하다(選ぶ)など、<好悪動詞>とも呼べそうな好悪の感情を表す一群の動詞もまた動名詞他動詞になりうるが、やはり精神動詞である。このほかには알리다(知らせる)や이해시키다(理解させる)など精神動詞が使役になったような意味のもの、시작하다(始める)や계속하다(続ける)などの処理動詞構造に現れるものがある。動名詞他動詞構造では、総じて、既に終わった事態ではなく、まだ起こっていない未発の事態を動名詞で表すことが多いことが特徴である。これと対照的にII-口の体言形では<외로움을 달래다>(淋しさを慰める)・<외침을 듣다>(叫びを聞く)・<있음을 말하다>(あるということを語る)などのように既然的な事態を表す例が多い。

8 おわりに

以上見てきたように、-을格には他動性が非常に強い用法から弱い用法までさまざまな用法が存在し、それらは他の斜格との共起関係、間の要素の有無や種別、連体修飾成分との関係、主語の種類、名詞の範疇と動詞の範疇との相関といった諸条件と密接に結びつく形で支えられていることがわかる。今後の-을格の研究および他動詞構文の研究では、こうした諸条件をより大規模な言語事実の調査によって解明してゆくことが必要であろう。本稿ではテキストを小説と手記に限って基礎資料としたが、更に戯曲ではどうか、論説文ではどうかといったテキストや文体別の検討も試みられねばならない。野間秀樹(1988)で行ったように文を命題とモダリティとに分けて考えるなら、格は命題そのものを組み立てるところの、モダリティから最も遠い文法範疇の1つだといえる。その格でさえ、本稿でみたように、テキストの性格が例えば名詞の範疇の量的な分布といった点に見事に写し出されるのであった。文はやはりテキスト内存在なのである。今後の格研究は、恣意的に文を羅列して孤立した文のレベルでのみあれこれ述べ立てるのではなく、いかなるテキストのうちで格というものがいかに実現されるかという、テキストのレベルまで射程に入れた視点が必須のものとなろう。いずれにせよ資料の量は非常に大切に、少なくとも本稿で扱った標本数3044例の10倍の規模での調査がなされるなら、朝鮮語の-을格及び他動詞構文については相当の精度をもって明らかになってくるに違いない。

最初に述べたように、本稿は-을格及び他動詞の研究のみならず広く朝鮮語の文法研究一般に対する方法論的な提起でもある。対象とした資料の量的な限界から来る不十分さは多々ありこそすれ、言語事実に立脚しなおかつ量的な分布にも着目しながら解析してゆくというこうした方法は、この方法の行く先に我々の問に対する何らかの解答が待っていることを確信させるのである。朝鮮語研究は主観的な思弁や概念装置

の操作のみに陥ることなく、言語事実に立脚して言語を語る時に来ているといつてよい。ただ、資料の量的な拡大に対する研究者の欲望は既に個人の扱える範囲を越えているかもしれない。その時にこそまたしても重要なのは方法であり、そして我々の経験の蓄積である。

用例を収集した資料 <>は引用の際の略号

- 강석・김혜영編(1990)『나의 신혼일기』명서원 (手記)<신혼>
宋河春(1987)『호박꽃 여름』고려원 (小説)<호박>
양인자(1988)『선비 꿈트 문학선1 비오는 날의 군것질』선비 (小説)<군것질>
윤정모(1985)「신발」黃皙暎・金正煥編『우리들의 공동체 하나됨을 위하여——80년대 대표 소설선 3』지양사 所収 (小説)<신발>
李筍(1985)「병어회—아들·2」黃皙暎・金正煥編『일과 사랑과 우리들의 공동체——80년대 대표 소설선 2』지양사 所収 (小説)<병어회>
林菊姬・禹鍾範編(1984)『바구니에 가득찬 행복』文化放送 정예원 (手記)<바구니>
鄭然喜(1988)「막차요, 막차」『뽕』文學思想社 所収 (小説)<막차>
趙世熙(1983;1989)「모독」『趙世熙小説集 시간여행』文學과知性社 所収 (小説)<모독>

参考文献

- Akademija nauk SSSR.(1980) "Russkaja grammatika" TOM 1,2, Institut russkogo jazyka, Moskva (菅野裕臣訳(1990-1)『ロシア語文法1,2』東京外国語大学講義資料、未公刊、部分訳)
李琬鎬(1988)『國語格助詞 ‘을/를’ 의 研究』탑출판사
伊藤英人(1989)「現代朝鮮語動詞の非過去テンス形式の用法について」『朝鮮學報』第131輯 pp.1-44 朝鮮学会
奥田一廣(1976)「朝鮮語の対格助詞「를(을)」について——とくに、その文法機能および意義素を中心に——」『朝鮮學報』第78輯 pp.1-35 朝鮮学会
奥田靖雄(1983)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編(1983)所収 pp.21-149
奥田靖雄(1983)「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編(1983)所収 pp.151-279
菅野裕臣(1981)『朝鮮語の入門』白水社
菅野裕臣(1986-7)「中級講座」『基礎ハングル』1-12号 三修社
菅野裕臣(1987)「東京外国語大学講義資料」(未公刊)
工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房 所収 pp.47-102
言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
柴公也「漢字語+시키다」について——再帰性・他動性・使役性・受動性との関わり

- をめぐって――」『朝鮮学報』第144輯 pp.87-150 朝鮮学会
- SUGAMOTO, Nobuko (1982) "Transitivity and Objecthood in Japanese",
In Paul J. Hopper/Sandra A. Thompson (ed.), *Syntax and Semantics 15: Studies in Transitivity*. Academic Press. pp.423-447
- 徐尚揆(1991)「現代朝鮮語の程度副詞について――副詞<아주>の<程度>と<様態>の意味を中心に――」『朝鮮学報』第140輯 pp.1-62 朝鮮学会
- 千村哲也(1987)「現代朝鮮語の格語尾{-로}について」東京外国語大学卒業論文(未公開)
- 趙義成(1992)「現代朝鮮語の処格語尾-에서について」第85回朝鮮語研究会発表要旨
- 野間秀樹(1988)「<하겠다>の研究――現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐって」
『朝鮮学報』129輯 pp.1-73 朝鮮学会
- 野間秀樹(1990a)「<할것이다>の研究――再び現代朝鮮語の用言のmood形式をめぐって」『朝鮮学報』134輯 pp.1-64 朝鮮学会
- 野間秀樹(1990b)「現代朝鮮語の名詞分類――語彙論・文法論のために」『朝鮮学報』135輯 pp.1-59 朝鮮学会
- 野間秀樹(1991)「朝鮮語のオノマトペ――擬声擬態語と派生・単語結合・シンタックス・テキストについて――」『学習院大学言語共同研究所紀要』第14号 pp.75-88 学習院大学言語共同研究所
- 浜之上幸(1991)「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』138輯 pp.1-93 朝鮮学会
- Helbig, G./Buscha, J. (1977) "Deutsche Grammatik, Ein Handbuch für den Ausländerunterricht", Leipzig (在間進訳(1982)『現代ドイツ文法』三修社)
- Xolodovich, A.A. (1954) "Ocherk grammatiki korejskogo jazyka", Moskva
- 村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

*菅野裕臣・権在淑・浜之上幸・高東昊の諸先生方には貴重な助言を頂戴しました。町田和彦先生にはデータ処理について貴重な示唆を頂戴し、また徐尚揆先生には用例収集の資料の点でお世話になりました。記して感謝します。

主要な用言の代表的な用言結合一覽 (가나다順)

가다	外出	구경을 가다 (見物に行く)
가다	外出	방으로 도망을 가다 (部屋に逃げて行く)
가다	移動	학교를 가다 (学校へ行く)
가다듬다	表情	목소리를 가다듬다 (声を落ちつかせる)
가르치다	対人	아이들을 가르치다 (子供たちを教える)
가르치다	提示	제목을 가르치다 (題名を教える)
가리키다	提示	의자를 가리키다 (椅子を指さす)
가져오다	授与	열쇠를 가져오다 (鍵の束を持って来る)
가지다	所有	애를 가지다 (子をはらむ)
가지다	所有	힘을/시간을 가지다 (力を/時間を持つ)
값다	加減	값을 값다 (値段を値切る)
갈기다	対身	뺨을 갈기다 (頬をひっぱたく)
갈다	身体	이를 갈다 (齒ぎしりする)
갈다	加工	칼을 갈다 (刀を研ぐ)
갈아입다	着用	옷을 갈아입다 (服を着替える)
감추다	出没	학교에서 자취를 감추다 (学校から姿をくらます)
감추다	心理	마음을 감추다 (気持ちをかくす)
갖다	所有	관심을/기대를 갖다 (関心を/期待を持つ)
갖추다	所有	준비를 갖추다 (準備を整える)
같이하다	共同	박과장과 행동을 같이하다 (朴課長と行動を共にする)
거두다	処理	T K O 승을 거두다 (T K O 勝ちをおさめる)
거두다	生理	숨을 거두다 (息を引きとる)
거치다	往来	관문을 거치다 (関門を経る)
거치다	經驗	약혼을 거치다 (婚約を済ます)
걷다	往来	들길을 걷다 (野道を歩く)
걸다	付与	신발을 걸다 (履き物をかける)
걸다	提示	말을 걸다 (ことばをかける)
걸다	從事	선택에 승부를 걸다 (選択に勝負を掛ける)
걸치다	着用	한복을 걸치다 (民族服をまとう)
겪다	往来	혼란을 겪다 (混乱を経る)
계속하다	処理	업무를 계속하다 (業務を続ける)
고다	生理	코를 골다 (いびきをかく)
고르다	精神	책을 고르다 (本を選ぶ)
고백하다	提示	각시에게 사랑을 고백하다 (新婦に愛を告白する)
고치다	着用	화장을 고치다 (化粧を直す)
관두다	処理	직장을 관두다 (職場を辞める)
괴롭히다	束縛	우리를 괴롭히다 (我々を苦しませる)
굳히다	心理	결심을 굳히다 (決心を固める)
굽히다	身体	허리를 굽히다 (腰を屈める)
권하다	提示	떡을 권하다 (餅をすすめる)
그리다	生産	입술에 꽃잎을 그리다 (唇に花びらを描く)
그만두다	処理	회사를 그만두다 (会社を辞める)
긁어내다	操作	내장을 긁어내다 (内臓をかき出す)
기다리다	精神	버스를/오기를 기다리다 (バスを/来るのを待つ)

기르다	養育	여자를 기르다 (女を育てる)
깔다	付与	뜰에 잔디를 깔다 (庭に芝を敷く)
깨닫다	精神	그것을 깨닫다 (それを悟る)
꺼내다	奪取	냉장고에서 아이스크림을 꺼내다 (冷蔵庫からアイスクリームを出す)
껴안다	行為	신부를껴안다 (新婦をかき抱く)
꽂다	付与	꽃병에다 꽃을 꽂다 (花瓶に花を差す)
꽂다	付与	핀을 꽂다 (ピンを刺す)
꾸리다	從事	본정통에 살림을 꾸리다 (本町通りに所帯を持つ)
꾸미다	着用	몸을 꾸미다 (身を飾る)
꾸짖다	処遇	집안식구들을 꾸짖다 (家の者たちを叱る)
꿇다	身体	앞에 무릎을 꿇다 (前にひざまずく)
꿈꾸다	精神	삶을 꿈꾸다 (暮らしを夢見る)
끄다	加工	불을 끄다 (火を消す)
끊다	所有	기차표를 끊다 (汽車の切符を買う)
끌다	經驗	시간을 끌다 (時間を長引かせる)
끝내다	処理	식사를 끝내다 (食事を終える)
끼다	共同	팔짱을 끼다 (腕を組む)
나가다	離脱	집을 나가다 (家を出る)
나가다	外出	일을 나가다 (仕事に出かける)
나누다	共同	대화를 나누다 (對話を交わす)
나서다	離脱	교무실을 나서다 (職員室を出る)
나오다	離脱	다방을 나오다 (喫茶店を出る)
나타나다	出沒	모습을 나타나다 (姿を現す)
낳다	生理	애를 낳다 (子を産む)
내다	授与	사직서를 내다 (辞表を出す)
내다	享受	빚을 내다 (借金をする)
내다	生理	소리를 내다 (声を出す)
내다	心理	욕심을 내다 (欲を出す)
내다	心理	화를 내다 (怒る)
내려다보다	知覚	아래를 내려다보다 (下を見おろす)
내리다	操作	치마를/모자를 내리다 (スカートを/帽子をおろす)
내밀다	身体	고개를 내밀다 (顔をつき出す)
넘다	經驗	스물을 넘다 (二十歳を越える)
노려보다	知覚	동생을 노려보다 (弟を睨む)
노리다	經驗	기회를 노리다 (機会をうかがう)
높이다	加減	가치를 높이다 (価値を高める)
놓다	付与	손가락을 놓다 (箸を置く)
놓치다	喪失	버스를 놓치다 (バスを逃す)
누르다	操作	벨을 누르다 (ベルを押す)
느끼다	心理	쾌감을 느끼다 (快感を感じる)
다니다	移動	읍내로 농업학교를 다니다 (村の農業学校に通う)
다하다	処理	최선을 다하다 (最善を尽くす)
닳다	加工	손바닥으로 신발을 닳다 (掌で靴を磨く)
닫다	操作	문을 닫다 (ドアを閉める)
달래다	対人	아들딸들을 달래다 (息子娘たちをなだめる)

담다	付与	꽃병에 물을 담다 (花瓶に水を入れる)
당하다	受身	망신을 당하다 (恥をかく)
당하다	受身	참패를 당하다 (惨敗を期す)
당하다	受身	비웃음을 당하다 (あざ笑われる)
던지다	付与	앞에 돌맹이를 던지다 (前に石を投げる)
던지다	操作	타올을 던지다 (タオルを投げる)
데리다	対人	친구를 데리다 (友達を連れている)
돌리다	操作	다이얼을 돌리다 (ダイヤルを回す)
돌리다	身体	고개를 돌리다 (振り返る)
돕다	対人	아버지를 돕다 (父を手助けする)
두다	付与	서류를 두다 (書類を置く)
두다	従事	척도를 어디에다 두다 (尺度をどこに置く)
두다	経験	간격을 두다 (間隔を置く)
두드리다	操作	문을 두드리다 (ドアを叩く)
뒤집어쓰다	着用	이불을 뒤집어쓰다 (布団をかぶる)
뒤틀다	身体	몸을 뒤틀다 (身をよじる)
드러내다	出沒	모습을 드러내다 (姿を現す)
듣다	知覚	얘기를 듣다 (話を聞く) · 소리를 듣다 (音を聞く)
들다	身体	고개를 들다 (顔を挙げる)
들다	操作	펜을 들다 (ペンをとる) · 술잔을 들다 (杯を持つ)
들랑거리다	経験	몇번을 들랑거리다 (何度か出入りする)
따르다	対人	중생을 따르다 (衆生に従う)
떠나다	離脱	마을을 떠나다 (村を発つ)
떠올리다	心理	생각을 떠올리다 (想いを浮かべる)
떨다	身体	몸을 떨다 (身を震わせる)
떼다	奪取	과외지도에서 손을 떼다 (課外指導から手を引く)
뜨다	身体	눈을 뜨다 (眼を開ける)
뜨다	離脱	마을을 뜨다 (村を離れる)
마시다	飲食	소주 한 병을 마시다 (焼酎一本を飲む)
마시다	飲食	술을 마시다 (酒を飲む)
마치다	処理	결혼식을 마치다 (結婚式を終える)
막다	身体	손으로 입을 막다 (手で口を塞ぐ)
만나다	対人	동창을 만나다 (同窓生に会う)
만들다	生産	밀개떡을 만들다 (餅を作る)
만들다	生産	일곱을 만들다 (<友達を>7人作る)
만들다	轉換	백을 자기 것으로 만들다 (鞆を自分のものにする)
만들다	使役	아버지를 난처하게 만들다 (父を困らせる)
만들다	使役	저희를 고민하게 만들다 (私たちを悩ませる)
만지다	対身	궁둥이를 만지다 (おしりをさわる)
말리다	身体	머리를 말리다 (髪を乾かす)
말하다	言語	의견을 말하다 (意見を述べる)
망치다	処理	일을 망치다 (事を台無しにする)
맞다	受容	시험에 백점을 맞다 (試験で百点をとる)
맞다	経験	첫날밤을 맞다 (初夜を迎える)
맞다	対人	학생을 맞다 (学生を迎える)
맞아들이다	指令	대청으로 그를 맞아들이다 (居間に彼を迎え入れる)

말기다	提示	사람에게 평생을 말기다 (人に一生をゆだねる)
맏다	經驗	대단원을 맏다 (大団円を迎える)
먹다	飲食	밥을 먹다 (ご飯を食べる)
먹다	飲食	약을 먹다 (薬を飲む)
먹다	受容	나이를 먹다 (歳をとる)
먹다	受容	더위를 먹다 (暑氣あたりする)
먹다	心理	겁을 먹다 (怖じ氣づく)
멈추다	身体	일손을 멈추다 (仕事の手を休める)
모르다	精神	나를 모르다 (私を知らない)
몰다	操作	차를 몰다 (車を駆る)
묻다	言語	책임을 묻다 (責任を問う)
물다	授与	이자를 물다 (利子を払う)
믿다	精神	말을／나를／나라를 믿다 (ことばを／私を／国を信じる)
밀다	操作	대문을 밀다 (門の扉を押す)
밀다	行為	전신으로 승객을 밀다 (全身で乗客を押す)
바꾸다	表情	태도를 바꾸다 (態度を変える)
바라다	精神	요행수를／있기를 바라다 (まぐれ当たりを／あることを願う)
바라다보다	知覚	작업을 바라다보다 (作業を眺める)
받다	受身	아가씨에게 오해를 받다 (娘さんに誤解をされる)
받다	受身	조사를 받다 (調査を受ける)
받다	受身	허락을 받다 (許しを得る)
받다	受身	평가를 받다 (評価を受ける)
받다	受身	소개를 받다 (紹介される)
받다	受容	충격을 받다 (衝撃を受ける)
받다	享受	편지를 받다 (手紙をもらう)
받다	享受	도움을 받다 (手助けを受ける)
배우다	享受	사법을 배우다 (司法を学ぶ)
버리다	喪失	명예를 버리다 (名誉を捨てる)
벌리다	身体	팔을 벌리다 (腕を広げる)
벗기다	強制	옷을 벗기다 (服を脱がせる)
벗다	脱衣	모자를 벗다 (帽子を脱ぐ)
벗어나다	離脱	소녀티를 벗어나다 (少女らしさから抜けでる)
보내다	經驗	여름을 보내다 (夏を過ごす)
보내다	指令	딸을 대학에 보내다 (娘を大学にやる)
보내다	授与	편지를／박수를 보내다 (手紙を／拍手を送る)
보다	知覚	사진을 보다 (写真を見る)
보다	処理	시험을 보다 (試験を受ける)
보다	經驗	결정을 보다 (決定を見る)
보살피다	対人	아이들을 보살피다 (子供たちを世話する)
보이다	提示	얼굴로 여유를 보이다 (顔で余裕を見せる)
부르다	処理	노래를 부르다 (歌を歌う)
부르다	処遇	목소리로 아버지를 부르다 (声で父を呼ぶ)
부리다	提示	애교를 부리다 (愛嬌をふりまく)
부리다	提示	하나꼬한테 투정을 부리다 (花子にあたりちらす)
붙이다	生産	불을 붙이다 (火をつける)
붙잡다	操作	전화통을 붙잡다 (電話機を掴む)

비비다	身体	눈을 비비다 (眼をこする)
비우다	變成	그릇을 비우다 (器を空ける)
비우다	變成	집을 비우다 (家を空ける)
빌다	言語	용서를 빌다 (許しを乞う)
빌다	言語	잘못을 빌다 (過ちを詫びる)
빌리다	享受	옷을 빌리다 (服を借りる)
빼앗기다	受身	가방을 빼앗기다 (鞆を奪われる)
뽑다	奪取	잡초를 뽑다 (雜草を抜く)
뿌리다	付与	식칼에 물을 뿌리다 (包丁に水を振りかける)
뿌리치다	喪失	손을 뿌리치다 (手をふりはらう)
사귀다	对人	기집애들을 사귀다 (女の子たちとつき合う)
사다	授与	나한테 술을 사다 (私に酒をおごる)
사다	享受	담배를 사다 (煙草を買う)
사다	受容	호감을 사다 (好感を買う)
사랑하다	精神	그이를 사랑하다 (彼を愛する)
살피다	知覚	눈치를 살피다 (様子をうかがう)
삼다	轉換	노력을 생애의 할일로 삼다 (努力を生涯のなすべきこととする)
삼다	轉換	키를 핑계 삼다 (背を口実にする)
삼키다	飲食	가시를 삼키다 (小骨を飲み込む)
상상하다	精神	북극을 상상하다 (北極を想像する)
새우다	經驗	거부감으로 밤을 새우다 (拒否感で夜を明かす)
생각하다	精神	큰오빠를/편지를/경우를 생각하다 (長兄のことを/手紙の ことを/場合を考える)
생각하다	認定	이곳을 아침의 망명처쯤으로 생각하다 (ここを朝の亡命場所 ぐらいに思う)
생각하다	認定	자기를 내 전부라고 생각하다 (自分を私の全てと考える)
생각하다	認定	퇴근시간을 탈출의 디데이처럼 생각하다 (退社時間を脱出の デューデイのように思う)
설득하다	对人	부모를 설득하다 (父母を説得する)
설명하다	提示	경위를 설명하다 (経緯を説明する)
세우다	処理	계획을 세우다 (計画を立てる)
세우다	心理	결기를 세우다 (かっとなる)
세우다	使役	일곱 사람을 나란히 세우다 (7人を一列に立たせる)
소개받다	受身	사람을 소개받다 (人を紹介してもらう)
숙이다	身体	고개를 숙이다 (頭を垂れる)
쉬다	生理	한숨을 쉬다 (ため息をつく)
시작하다	処理	얘기를 시작하다 (話を始める)
시키다	操作	인터폰으로 맥주 두 병을 시키다 (インタフォンでビール2本 を頼む)
시키다	使役	각 부부별로 노래를 시키다 (各夫婦別に歌をやらせる)
시키다	使役	결혼을 시키다 (結婚をさせる)
신청하다	提示	데이트를 신청하다 (デートを申し込む)
싣다	付与	고속버스에 몸을 싣다 (高速バスに身を載せる)
싫어하다	精神	여자를 싫어하다 (女を嫌う)
싸다	加工	책을 싸다 (本を包む)
쓰다	生産	대본을/사표를 쓰다 (台本を/辞表を書く)

쓰다	着用	머리에 모자를 쓰다 (頭に帽子をかぶる)
쓰다	提示	신경을 쓰다 (氣を使う)
쓰다	提示	인상을 쓰다 (顔をしかめる)
쓰다	提示	아무에게나 반말을 쓰다 (誰にでもぞんざいなことばを使う)
씻다	加工	눈언저리를 씻다 (眼のあたりを洗う)
아끼다	精神	아내를 아끼다 (妻を大事にする)
안다	行為	신부를 안다 (新婦を抱く)
안심시키다	束縛	아버지를 안심시키다 (父を安心させる)
앉히다	束縛	아기를 그네에 앉히다 (子供をブランコに乗せる)
앉히다	使役	학생들을 자리에 앉히다 (学生たちを席につかせる)
알다	精神	사실을 알다 (事実を知る)
알리다	提示	귀가를 알리다 (帰宅を知らせる)
알리다	提示	여자한테 그것을 알리다 (女にそれを知らせる)
알아듣다	知覚	말을 알아듣다 (ことばを聞き取る)
알아보다	精神	나를 알아보다 (私をそれとわかる)
앞두다	経験	시험을 앞두다 (試験をひかえる)
앞서다	比較	동식을 서너 걸음 앞서다 (トンシクに数歩先んじている)
애태우다	束縛	신랑을 애태우다 (新郎に氣をもませる)
약속하다	提示	원조를 약속하다 (援助を約束する)
얘기하다	提示	프론트에 사정을 얘기하다 (フロントに事情を話す)
어기다	処理	약속을 어기다 (約束を違える)
얻다	享受	물을 얻다 (水をもらう)
얻다	受容	안정을 얻다 (安定を得る)
얼버무리다	變成	대답을 얼버무리다 (答をはぐらかす)
여기다	認定	가정을 남남이라 여기다 (家庭を他人同士と思う)
여기다	認定	고모를 못마땅하게 여기다 (叔母を不満に思う)
열다	操作	문을 열다 (ドアを開ける)
열다	身体	입을 열다 (口を開く)
예감하다	心理	실패를 예감하다 (失敗を予感する)
오다	外出	서울로 신혼여행을 오다 (ソウルに新婚旅行に来る)
오르다	往来	계단을 오르다 (階段を上る)
올라가다	往来	계단을 올라가다 (階段を上がる)
외면하다	対人	여자를 외면하다 (女を相手にしない)
외치다	提示	동지들께 화이팅을 외치다 (同志たちにファイトのかけ声をかける)
욕하다	処遇	속으로 어머니를 욕하다 (心の中で母を罵る)
울다	経験	한참을 울다 (しばらくの間泣く)
울리다	束縛	신부를 울리다 (新婦を泣かせる)
원망하다	精神	아버지를 원망하다 (父を恨む)
위협하다	処遇	사람들을 위협하다 (人々を脅す)
의심하다	精神	하나꼬를 의심하다 (花子を疑う)
이기다	心理	마음을 이기다 (心に打ち勝つ)
이루다	処理	인생을 아름답게 이루다 (人生を美しく成就する)
이해하다	精神	사건을／할아버지를 이해하다 (事件を／おじいさんを理解する)
인정하다	提示	잘못을 인정하다 (過ちを認める)
일으키다	身体	몸을 일으키다 (身を起こす)

일으키다	処理	쿠데타를 일으키다 (クーデターを起こす)
잃다	喪失	신발을 잃다 (靴をなくす)
잃다	心理	의욕을 잃다 (意欲を失う)
입다	着用	옷을 입다 (服を着る)
입다	着用	갑옷을 입다 (鎧をまとう)
입다	受容	상처를 입다 (傷を受ける)
입히다	強制	옷을 입히다 (服を着せる)
잇다	処理	말을／뒤를 잇다 (ことばを／あとをつぐ)
잊다	心理	기억을 잊다 (記憶を失う)
잊다	喪失	나를／첫사랑을 잊다 (私を／初恋を忘れる)
자다	生理	잠을 자다 (眠る)
자랑하다	提示	업적을 자랑하다 (業績を自慢する)
잡다	身体	손으로 손을 잡다 (手で手を握る)
잡다	対身	손을 잡다 (手を握る)
잡다	操作	책가방을 잡다 (鞆を掴む)
잡아매다	着用	넥타이를 잡아매다 (ネクタイを締める)
재촉하다	対人	그이를 재촉하다 (彼を催促する)
적시다	身体	눈시울을 적시다 (目頭を熱くする)
전가하다	從事	책임을 무엇에 전가하다 (責任を何かに転嫁する)
전하다	授与	소식을 전하다 (消息を伝える)
접다	加工	텐트를 접다 (テントを畳む)
젓다	身体	고개를 젓다 (首を振る)
정하다	轉換	목적지를 부산으로 정하다 (目的地を釜山に決める)
조달하다	享受	아르바이트로 용돈을 조달하다 (アルバイトで小遣いを調達する)
조르다	提示	결혼을 조르다 (結婚をせがむ)
조아리다	身体	머리를 조아리다 (頭を下げる)
졸업하다	処理	대학을 졸업하다 (大学を卒業する)
좋아하다	精神	송편을 좋아하다 (餅を好む) · 남편을 좋아하다 (夫が好きだ)
주고받다	共同	이야기를 주고받다 (話をやりとりする)
주다	授与	내게 사랑을 주다 (私に愛を与える)
주다	授与	운전수에게 돈 천원을 주다 (運転手に千ウオンをあげる)
죽이다	対人	나를 죽이다 (私を殺す)
죽이다	生理	숨을 죽이다 (息を殺す)
줄이다	加減	미장원을 한번 줄이다 (美容院<に行くの>を1度減らす)
취다	操作	칼을 취다 (刀をとる)
지나다	往来	소나무밭을 지나다 (松林を通り過ぎる)
지내다	経験	오년간을 사이 좋게／밤을 지내다 (5年間を仲良く／夜を過ごす)
지다	付与	등짐을 지다 (荷物を背負う)
지르다	生理	소리를／고함을 지르다 (悲鳴を／叫び声を上げる)
지를다	生産	불을 지르다 (放火する)
지리다	生理	용변을 지리다 (便を洩らす)
지새우다	経験	밤을 지새우다 (夜を明かす)
지적하다	提示	타락을 지적하다 (墮落を指摘する)
지켜보다	知覚	뒷모습을 지켜보다 (後ろ姿を見守る)

지키다	処遇	마을을 지키다 (村を守る)
지키다	処理	약속을 지키다 (約束を守る)
짓다	表情	미소를 / 표정을 짓다 (微笑を / 表情を作る)
짓다	処理	농사를 짓다 (農業をする)
짓밟히다	受身	모자를 짓밟히다 (帽子を踏まれる)
짜다	生産	기름을 짜다 (油を搾る)
짜다	処理	전략을 짜다 (戰略を組む)
쫓다	対人	상인들을 쫓다 (商人たちを追う)
찌르다	対身	옆구리를 찌르다 (脇を突く)
찍다	付与	도장을 찍다 (判を押す)
찍다	生産	사진을 찍다 (写真を撮る)
찢다	加工	탁상일기를 찢다 (卓上日記を破る)
짚다	操作	펌프를 짚다 (ポンプを打ちおろす)
차다	操作	공을 차다 (ボールを蹴る)
차리다	心理	정신을 / 기운을 차리다 (氣をしっかり持つ)
차지하다	所有	안방을 차지하다 (居間に陣取る)
참다	心理	인사하고 싶은 마음을 참다 (挨拶したい気持ちをこらえる)
찾아가다	対人	강과장을 찾아가다 (姜課長を訪ねる)
찾아나서다	対人	식구들을 찾아나서다 (家族を捜しに出る)
찾아내다	対人	친구를 찾아내다 (友人を捜し当てる)
찾아오다	対人	나를 찾아오다 (私を訪ねて来る)
찾아오다	移動	우리집을 찾아오다 (うちを訪ねて来る)
채우다	身体	배를 채우다 (腹を満たす)
채우다	強制	수갑을 채우다 (手錠をはめる)
청하다	提示	주기를 청하다 (くれることを頼む)
쳐다보다	知覚	엄마를 쳐다보다 (お母さんを見つめる)
취하다	従事	연락을 취하다 (連絡を取る)
취하다	表情	포즈를 / 자세를 취하다 (ポーズを / 姿勢を取る)
치다	加減	나이에 십년을 더 치다 (歳に10年を更に上乗せする)
치다	養育	누에를 치다 (蚕を飼う)
치다	付与	설탕을 치다 (砂糖をかける)
치다	授与	전보를 치다 (電報を打つ)
치다	操作	철망을 치다 (金網を張り巡らす)
치르다	経験	첫날밤을 치르다 (初夜を過ごす)
치우다	加減	물건들을 치우다 (物をかたずける)
키우다	養育	육남매를 키우다 (6人兄妹を育てる)
타다	操作	고깃배를 / 그네를 타다 (漁船に / ブランコに乗る)
타다	操作	버스를 타다 (バスに乗る)
타다	享受	월급을 타다 (月給を貰う)
타다	生産	커피를 타다 (コーヒーを入れる)
탓하다	処遇	사람들을 탓하다 (人のせいにする)
태우다	飲食	담배를 태우다 (煙草を吸う)
택하다	精神	주제를 택하다 (主題を選ぶ)
터뜨리다	生理	실소를 터뜨리다 (失笑をもらす)
터뜨리다	生理	울음을 터뜨리다 (泣き出す)
털다	操作	주머니를 털다 (財布をはたく)

털어내다	奪取	모자에서 흙을 털어내다 (帽子から土をはらう)
털어놓다	提示	비밀을 털어놓다 (秘密を打ち明ける)
틀어막다	封身	입을 틀어막다 (口を封じる)
파다	加工	흙을 파다 (土を掘る)
파하다	処理	학교를 파하다 (学校がひける)
팔다	授与	물건을 팔다 (品物を売る)
퍼붓다	提示	키스를 퍼붓다 (キスを浴びせる)
퍼다	操作	통장을 퍼다 (通帳を開く)
평가하다	精神	됨됨이를 평가하다 (人となりを評価する)
포기하다	心理	생각을／꿈을 포기하다 (考えを／夢を諦める)
폭발시키다	表情	감정을 폭발시키다 (感情を爆発させる)
풀다	操作	넥타이를 풀다 (ネクタイを解く)
풀다	処理	울분을 풀다 (鬱憤を晴らす)
풀다	身体	코를 풀다 (はなをかむ)
품다	心理	증오를／앙심을 품다 (憎惡を／恨みを抱く)
퐁기다	生理	냄새를 퐁기다 (匂いを発する)
피우다	飲食	담배를 피우다 (煙草を吸う)
하다	心理	고민을 하다 (悩む)
하다	心理	궁리를 하다 (思案する)
하다	心理	생각을 하다 (考える)
하다	従事	파출소에 신고를 하다 (交番に届出をする)
하다	従事	대학에 진학을 하다 (大学に進学をする)
하다	共同	연애를 하다 (恋愛をする)
하다	使役	섬을 보게 하다 (島を見させる)
하다	使役	시부모를 긴장케 하다 (義理の父母を緊張させる)
합치다	共同	힘을 합치다 (力を合わせる)
향하다	轉換	발길을 형님 댁으로 향하다 (足を兄の家へと向ける)
헤매다	経験	반나절을 헤매다 (半日さまよう)
헤치다	往来	밀림을 헤치다 (密林をかき分ける)
훔치다	奪取	돈을 훔치다 (お金を盗む)
휩쓸다	処遇	마을을 휩쓸다 (村を襲う)
흔들다	操作	손에 손에 태극기를 흔들다 (手に手に太極旗を振る)
흘리다	生理	눈물을 흘리다 (涙を流す)
힐난하다	処遇	민수를 힐난하다 (ミンスを難詰する)

用言結合分類一覽

		-를格体言の主要なありか (○で示す)			
共起格		主体内	身体など	客体的人間	客体的事物 場・時
7 - 1					
向格	-에				付与動詞
他動詞	-에				従事動詞
	-에게				授与動詞
与格	-에게				提示動詞
他動詞	-에게				事物使役動詞
	-에게				強制動詞
	-에게 ; -더러				言語動詞
	(-로)				加工動詞
					生産動詞
					操作動詞
					処理動詞
					變成動詞
					加減動詞
	-에게不可		対身動詞	対人動詞	
	-에게不可			行為動詞	
非与格	-에게不可			処遇動詞	
他動詞	-에게不可			指令動詞	
	-에게不可			人間使役動詞	
	-에게不可			束縛動詞	
	-에게不可			比較動詞	
	-에게不可 ; -하고				共同動詞
	-에게不可			養育動詞	
離格					
他動詞	-에서				奪取動詞
	-로				轉換動詞
	-라고 ; 처럼等				認定動詞
7 - 2					
非与格	-에게不可				飲食動詞
他動詞	-에게不可				知覚動詞
	-에게不可				精神動詞
			生理動詞		

共起格	-를格体言の主要なありか (で示す) 主体内 身体など 客体的人間 客体的事物 場・時
7 - 3	心理動詞 表情動詞
-에게不可 -에게不可 非与格 -에게不可 他動詞 -에게不可 -에게不可 -에게不可	着用動詞 脱衣動詞 身体動詞 喪失動詞 出沒動詞 所有動詞
7 - 4	-에게 与格 -에게 動詞 -에게 ; (-에게서) 事物受身動詞 人間受身動詞 享受動詞 受容動詞
7 - 5	-에게不可 非与格 -에게不可 他動詞 -에게不可 -에게不可 -에게不可 移動動詞 外出動詞 離脱動詞 往来動詞 經驗動詞

主要な用言の代表的な用言結合一覧(가나다順)

가다	外出	구경을 가다 (見物に行く)
가다	外出	방으로 도망을 가다 (部屋に逃げて行く)
가다	移動	학교를 가다 (学校へ行く)
가다듬다	表情	목소리를 가다듬다 (声を落ちつかせる)
가르치다	対人	아이들을 가르치다 (子供たちを教える)
가르치다	提示	제목을 가르치다 (題名を教える)
가리키다	提示	의자를 가리키다 (椅子を指さす)
가져오다	授与	열쇠뭉치를 가져오다 (鍵の束を持って来る)
가지다	所有	애를 가지다 (子をはらむ)
가지다	所有	힘을/시간을 가지다 (力を/時間を持つ)
값다	加減	값을 값다 (値段を値切る)
갈기다	対身	뺨을 갈기다 (頬をひっぱたく)
갈다	身体	이를 갈다 (齒ぎしりする)
갈다	加工	칼을 갈다 (刀を研ぐ)
갈아입다	着用	옷을 갈아입다 (服を着替える)
감추다	出没	학교에서 자취를 감추다 (学校から姿をくらます)
감추다	心理	마음을 감추다 (気持ちをかくす)
갖다	所有	관심을/기대를 갖다 (関心を/期待を持つ)
갖추다	所有	준비를 갖추다 (準備を整える)
같이하다	共同	박과장과 행동을 같이하다 (朴課長と行動を共にする)
거두다	処理	T K O 승을 거두다 (T K O 勝ちをおさめる)
거두다	生理	숨을 거두다 (息を引きとる)
거치다	往来	관문을 거치다 (関門を経る)
거치다	経験	약혼을 거치다 (婚約を済ます)
걷다	往来	들길을 걷다 (野道を歩く)
걸다	付与	신발을 걸다 (履き物をかける)
걸다	提示	말을 걸다 (ことばをかける)
걸다	従事	선택에 승부를 걸다 (選択に勝負を掛ける)
걸치다	着用	한복을 걸치다 (民族服をまとう)
겪다	往来	혼란을 겪다 (混乱を経る)
계속하다	処理	업무를 계속하다 (業務を続ける)
고다	生理	코를 골다 (いびきをかく)
고르다	精神	책을 고르다 (本を選ぶ)
고백하다	提示	각시에게 사랑을 고백하다 (新婦に愛を告白する)
고치다	着用	화장을 고치다 (化粧を直す)
관두다	処理	직장을 관두다 (職場を辞める)
괴롭히다	束縛	우리를 괴롭히다 (我々を苦しませる)
굳히다	心理	결심을 굳히다 (決心を固める)
굽히다	身体	허리를 굽히다 (腰を屈める)
권하다	提示	떡을 권하다 (餅をすすめる)
그리다	生産	입술에 꽃잎을 그리다 (唇に花びらを描く)
그만두다	処理	회사를 그만두다 (会社を辞める)
긁어내다	操作	내장을 긁어내다 (内臓をかき出す)
기다리다	精神	버스를/오기를 기다리다 (バスを/来るのを待つ)

기르다	養育	여자를 기르다 (女を育てる)
깔다	付与	뜰에 잔디를 깔다 (庭に芝を敷く)
깨닫다	精神	그것을 깨닫다 (それを悟る)
꺼내다	奪取	냉장고에서 아이스크림을 꺼내다 (冷蔵庫からアイスクリームを出す)
껴안다	行為	신부를껴안다 (新婦をかき抱く)
꽂다	付与	꽃병에다 꽃을 꽂다 (花瓶に花を差す)
꽂다	付与	핀을 꽂다 (ピンを刺す)
꾸리다	従事	본정통에 살림을 꾸리다 (本町通りに所帯を持つ)
꾸미다	着用	몸을 꾸미다 (身を飾る)
꾸짖다	処遇	집안식구들을 꾸짖다 (家の者たちを叱る)
꿇다	身体	앞에 무릎을 꿇다 (前にひざまずく)
꿈꾸다	精神	삶을 꿈꾸다 (暮らしを夢見る)
끄다	加工	불을 끄다 (火を消す)
끊다	所有	기차표를 끊다 (汽車の切符を買う)
끌다	経験	시간을 끌다 (時間を長引かせる)
끝내다	処理	식사를 끝내다 (食事を終える)
끼다	共同	팔짱을 끼다 (腕を組む)
나가다	離脱	집을 나가다 (家を出る)
나가다	外出	일을 나가다 (仕事に出かける)
나누다	共同	대화를 나누다 (對話を交わす)
나서다	離脱	교무실을 나서다 (職員室を出る)
나오다	離脱	다방을 나오다 (喫茶店を出る)
나타내다	出沒	모습을 나타내다 (姿を現す)
낳다	生理	애를 낳다 (子を産む)
내다	授与	사직서를 내다 (辞表を出す)
내다	享受	빚을 내다 (借金をする)
내다	生理	소리를 내다 (声を出す)
내다	心理	욕심을 내다 (欲を出す)
내다	心理	화를 내다 (怒る)
내려다보다	知覚	아래를 내려다보다 (下を見おろす)
내리다	操作	치마를/모자를 내리다 (スカートを/帽子をおろす)
내밀다	身体	고개를 내밀다 (顔をつき出す)
넘다	経験	스물을 넘다 (二十歳を越える)
노려보다	知覚	동생을 노려보다 (弟を睨む)
노리다	経験	기회를 노리다 (機会をうかがう)
높이다	加減	가치를 높이다 (価値を高める)
놓다	付与	손가락을 놓다 (箸を置く)
놓치다	喪失	버스를 놓치다 (バスを逃す)
누르다	操作	벨을 누르다 (ベルを押す)
느끼다	心理	쾌감을 느끼다 (快感を感じる)
다니다	移動	읍내로 농업학교를 다니다 (村の農業学校に通う)
다하다	処理	최선을 다하다 (最善を尽くす)
닦다	加工	손바닥으로 신발을 닦다 (掌で靴を磨く)
닫다	操作	문을 닫다 (ドアを閉める)
달래다	対人	아들딸들을 달래다 (息子娘たちをなだめる)

담다	付与	꽃병에 물을 담다 (花瓶に水を入れる)
당하다	受身	망신을 당하다 (恥をかく)
당하다	受身	참패를 당하다 (惨敗を期す)
당하다	受身	비웃음을 당하다 (あざ笑われる)
던지다	付与	앞에 돌맹이를 던지다 (前に石を投げる)
던지다	操作	타올을 던지다 (タオルを投げる)
데리다	対人	친구를 데리다 (友達を連れている)
돌리다	操作	다이얼을 돌리다 (ダイヤルを回す)
돌리다	身体	고개를 돌리다 (振り返る)
돕다	対人	아버지를 돕다 (父を手助けする)
두다	付与	서류를 두다 (書類を置く)
두다	従事	척도를 어디에다 두다 (尺度をどこに置く)
두다	経験	간격을 두다 (間隔を置く)
두드리다	操作	문을 두드리다 (ドアを叩く)
뒤집어쓰다	着用	이불을 뒤집어쓰다 (布団をかぶる)
뒤틀다	身体	몸을 뒤틀다 (身をよじる)
드러내다	出沒	모습을 드러내다 (姿を現す)
듣다	知覚	얘기를 듣다 (話を聞く) · 소리를 듣다 (音を聞く)
들다	身体	고개를 들다 (顔を挙げる)
들다	操作	펜을 들다 (ペンをとる) · 술잔을 들다 (杯を持つ)
들랑거리다	経験	몇번을 들랑거리다 (何度か出入りする)
따르다	対人	중생을 따르다 (衆生に従う)
떠나다	離脱	마을을 떠나다 (村を発つ)
떠올리다	心理	생각을 떠올리다 (想いを浮かべる)
떨다	身体	몸을 떨다 (身を震わせる)
떼다	奪取	과외지도에서 손을 떼다 (課外指導から手を引く)
뜨다	身体	눈을 뜨다 (眼を開ける)
뜨다	離脱	마을을 뜨다 (村を離れる)
마시다	飲食	소주 한 병을 마시다 (焼酎一本を飲む)
마시다	飲食	술을 마시다 (酒を飲む)
마치다	処理	결혼식을 마치다 (結婚式を終える)
막다	身体	손으로 입을 막다 (手で口を塞ぐ)
만나다	対人	동창을 만나다 (同窓生に会う)
만들다	生産	밀개떡을 만들다 (餅を作る)
만들다	生産	일곱을 만들다 (<友達を>7人作る)
만들다	轉換	백을 자기 것으로 만들다 (鞆を自分のものにする)
만들다	使役	아버지를 난처하게 만들다 (父を困らせる)
만들다	使役	저희를 고민하게 만들다 (私たちを悩ませる)
만지다	対身	궁둥이를 만지다 (おしりをさわる)
말리다	身体	머리를 말리다 (髪を乾かす)
말하다	言語	의견을 말하다 (意見を述べる)
망치다	処理	일을 망치다 (事を台無しにする)
맞다	受容	시험에 백점을 맞다 (試験で百点をとる)
맞다	経験	첫날밤을 맞다 (初夜を迎える)
맞다	対人	학생을 맞다 (学生を迎える)
맞아들이다	指令	대청으로 그를 맞아들이다 (居間に彼を迎え入れる)

맡기다	提示	사람에게 평생을 맡기다 (人に一生をゆだねる)
맺다	經驗	대단원을 맺다 (大團圓を迎える)
먹다	飲食	밥을 먹다 (ご飯を食べる)
먹다	飲食	약을 먹다 (藥を飲む)
먹다	受容	나이를 먹다 (歳をとる)
먹다	受容	더위를 먹다 (暑氣あたりする)
먹다	心理	겁을 먹다 (怖じ氣づく)
멈추다	身体	일손을 멈추다 (仕事の手を休める)
모르다	精神	나를 모르다 (私を知らない)
몰다	操作	차를 몰다 (車を駆る)
묻다	言語	책임을 묻다 (責任を問う)
묻다	授与	이자를 묻다 (利子を払う)
믿다	精神	말을／나를／나라를 믿다 (ことばを／私を／国を信じる)
밀다	操作	대문을 밀다 (門の扉を押す)
밀다	行為	전신으로 승객을 밀다 (全身で乗客を押す)
바꾸다	表情	태도를 바꾸다 (態度を変える)
바라다	精神	요행수를／있기를 바라다 (まぐれ当たりを／あることを願う)
바라다보다	知覚	작업을 바라다보다 (作業を眺める)
받다	受身	아가씨에게 오해를 받다 (娘さんに誤解をされる)
받다	受身	조사를 받다 (調査を受ける)
받다	受身	허락을 받다 (許しを得る)
받다	受身	평가를 받다 (評価を受ける)
받다	受身	소개를 받다 (紹介される)
받다	受容	충격을 받다 (衝撃を受ける)
받다	享受	편지를 받다 (手紙をもらう)
받다	享受	도움을 받다 (手助けを受ける)
배우다	享受	사법을 배우다 (司法を学ぶ)
버리다	喪失	명예를 버리다 (名譽を捨てる)
벌리다	身体	팔을 벌리다 (腕を広げる)
벗기다	強制	옷을 벗기다 (服を脱がせる)
벗다	脱衣	모자를 벗다 (帽子を脱ぐ)
벗어나다	離脱	소녀티를 벗어나다 (少女らしさから抜けでる)
보내다	經驗	여름을 보내다 (夏を過ごす)
보내다	指令	딸을 대학에 보내다 (娘を大学にやる)
보내다	授与	편지를／박수를 보내다 (手紙を／拍手を送る)
보다	知覚	사진을 보다 (写真を見る)
보다	処理	시험을 보다 (試験を受ける)
보다	經驗	결정을 보다 (決定を見る)
보살피다	対人	아이들을 보살피다 (子供たちを世話する)
보이다	提示	얼굴로 여유를 보이다 (顔で余裕を見せる)
부르다	処理	노래를 부르다 (歌を歌う)
부르다	処遇	목소리로 아버지를 부르다 (声で父を呼ぶ)
부리다	提示	애교를 부리다 (愛嬌をふりまく)
부리다	提示	하나꼬한테 투정을 부리다 (花子にあたりちらす)
붙이다	生産	불을 붙이다 (火をつける)
붙잡다	操作	전화통을 붙잡다 (電話機を掴む)

쓰다	着用	머리에 모자를 쓰다 (頭に帽子をかぶる)
쓰다	提示	신경을 쓰다 (氣を使う)
쓰다	提示	인상을 쓰다 (顔をしかめる)
쓰다	提示	아무에게나 반말을 쓰다 (誰にでもぞんざいなことばを使う)
씻다	加工	눈언저리를 씻다 (眼のあたりを洗う)
아끼다	精神	아내를 아끼다 (妻を大事にする)
안다	行為	신부를 안다 (新婦を抱く)
안심시키다	束縛	아버지를 안심시키다 (父を安心させる)
앉히다	束縛	아기를 그네에 앉히다 (子供をブランコに乗せる)
앉히다	使役	학생들을 자리에 앉히다 (学生たちを席につかせる)
알다	精神	사실을 알다 (事実を知る)
알리다	提示	귀가를 알리다 (帰宅を知らせる)
알리다	提示	여자한테 그것을 알리다 (女にそれを知らせる)
알아듣다	知覚	말을 알아듣다 (ことばを聞き取る)
알아보다	精神	나를 알아보다 (私をそれとわかる)
앞두다	經驗	시험을 앞두다 (試験をひかえる)
앞서다	比較	동식을 서너 걸음 앞서다 (トンシクに数歩先んじている)
애태우다	束縛	신郎을 애태우다 (新郎に氣をもませる)
약속하다	提示	원조를 약속하다 (援助を約束する)
얘기하다	提示	프론트에 사정을 얘기하다 (フロントに事情を話す)
어기다	処理	약속을 어기다 (約束を違える)
얻다	享受	물을 얻다 (水をもらう)
얻다	受容	안정을 얻다 (安定を得る)
얼버무리다	變成	대답을 얼버무리다 (答をはぐらかす)
여기다	認定	가정을 남남이라 여기다 (家庭を他人同士と思う)
여기다	認定	고모를 못마땅하게 여기다 (叔母を不満に思う)
열다	操作	문을 열다 (ドアを開ける)
열다	身体	입을 열다 (口を開く)
예감하다	心理	실패를 예감하다 (失敗を予感する)
오다	外出	서울로 신혼여행을 오다 (ソウルに新婚旅行に来る)
오르다	往来	계단을 오르다 (階段を上る)
올라가다	往来	계단을 올라가다 (階段を上がる)
외면하다	対人	여자를 외면하다 (女を相手にしない)
외치다	提示	동지들께 화이팅을 외치다 (同志たちにファイトのかけ声をかける)
욕하다	処遇	속으로 어머니를 욕하다 (心の中で母を罵る)
울다	經驗	한참을 울다 (しばらくの間泣く)
울리다	束縛	신부를 울리다 (新婦を泣かせる)
원망하다	精神	아버지를 원망하다 (父を恨む)
위협하다	処遇	사람들을 위협하다 (人々を脅す)
의심하다	精神	하나꼬를 의심하다 (花子を疑う)
이기다	心理	마음을 이기다 (心に打ち勝つ)
이루다	処理	인생을 아름답게 이루다 (人生を美しく成就する)
이해하다	精神	사건을／할아버지를 이해하다 (事件を／おじいさんを理解する)
인정하다	提示	잘못을 인정하다 (過ちを認める)
일으키다	身体	몸을 일으키다 (身を起こす)

일으키다	処理	쿠데타를 일으키다 (クーデターを起こす)
잃다	喪失	신발을 잃다 (靴をなくす)
잃다	心理	의욕을 잃다 (意欲を失う)
입다	着用	옷을 입다 (服を着る)
입다	着用	갑옷을 입다 (鎧をまとう)
입다	受容	상처를 입다 (傷を受ける)
입히다	強制	옷을 입히다 (服を着せる)
잊다	処理	말을/뒤를 잊다 (ことばを/あとをつぐ)
잊다	心理	기억을 잊다 (記憶を失う)
잊다	喪失	나를/첫사랑을 잊다 (私を/初恋を忘れる)
자다	生理	잠을 자다 (眠る)
자랑하다	提示	업적을 자랑하다 (業績を自慢する)
잡다	身体	손으로 손을 잡다 (手で手を握る)
잡다	対身	손을 잡다 (手を握る)
잡다	操作	책가방을 잡다 (鞆を掴む)
잡아매다	着用	넥타이를 잡아매다 (ネクタイを締める)
재촉하다	対人	그이를 재촉하다 (彼を催促する)
적시다	身体	눈시울을 적시다 (目頭を熱くする)
전가하다	従事	책임을 무엇에 전가하다 (責任を何かに転嫁する)
전하다	授与	소식을 전하다 (消息を伝える)
접다	加工	텐트를 접다 (テントを畳む)
젓다	身体	고개를 젓다 (首を振る)
정하다	轉換	목적지를 부산으로 정하다 (目的地を釜山に決める)
조달하다	享受	아르바이트로 용돈을 조달하다 (アルバイトで小遣いを調達する)
조르다	提示	결혼을 조르다 (結婚をせがむ)
조아리다	身体	머리를 조아리다 (頭を下げる)
졸업하다	処理	대학을 졸업하다 (大学を卒業する)
좋아하다	精神	송편을 좋아하다 (餅を好む) · 남편을 좋아하다 (夫が好きだ)
주고받다	共同	이야기를 주고받다 (話をやりとりする)
주다	授与	내게 사랑을 주다 (私に愛を与える)
주다	授与	운전수에게 돈 천원을 주다 (運転手に千ウォンをあげる)
죽이다	対人	나를 죽이다 (私を殺す)
죽이다	生理	숨을 죽이다 (息を殺す)
줄이다	加減	미장원을 한번 줄이다 (美容院<に行くの>を1度減らす)
취다	操作	칼을 취다 (刀をとる)
지나다	往来	소나무밭을 지나다 (松林を通り過ぎる)
지내다	経験	오년간을 사이 좋게/밤을 지내다 (5年間を仲良く/夜を過ごす)
지다	付与	등짐을 지다 (荷物を背負う)
지르다	生理	소리를/고함을 지르다 (悲鳴を/叫び声を上げる)
지르다	生産	불을 지르다 (放火する)
지리다	生理	용변을 지리다 (便を洩らす)
지새우다	経験	밤을 지새우다 (夜を明かす)
지적하다	提示	타락을 지적하다 (墮落を指摘する)
지켜보다	知覚	뒷모습을 지켜보다 (後ろ姿を見守る)

지키다	処遇	마을을 지키다 (村を守る)
지키다	処理	약속을 지키다 (約束を守る)
짓다	表情	미소를 / 표정을 짓다 (微笑を / 表情を作る)
짓다	処理	농사를 짓다 (農業をする)
짓밟히다	受身	모자를 짓밟히다 (帽子を踏まれる)
짜다	生産	기름을 짜다 (油を搾る)
짜다	処理	전략을 짜다 (戰略を組む)
쫓다	対人	상인들을 쫓다 (商人たちを追う)
찌르다	対身	옆구리를 찌르다 (脇を突く)
찍다	付与	도장을 찍다 (判を押す)
찍다	生産	사진을 찍다 (写真を撮る)
찢다	加工	탁상일기를 찢다 (卓上日記を破る)
짚다	操作	펌프를 짚다 (ポンプを打ちおろす)
차다	操作	공을 차다 (ボールを蹴る)
차리다	心理	정신을 / 기운을 차리다 (氣をしっかり持つ)
차지하다	所有	안방을 차지하다 (居間に陣取る)
참다	心理	인사하고 싶은 마음을 참다 (挨拶したい気持ちをこらえる)
찾아가다	対人	강과장을 찾아가다 (姜課長を訪ねる)
찾아나서다	対人	식구들을 찾아나서다 (家族を捜しに出る)
찾아내다	対人	친구를 찾아내다 (友人を捜し当てる)
찾아오다	対人	나를 찾아오다 (私を訪ねて来る)
찾아오다	移動	우리집을 찾아오다 (うちを訪ねて来る)
채우다	身体	배를 채우다 (腹を満たす)
채우다	強制	수갑을 채우다 (手錠をはめる)
청하다	提示	주기를 청하다 (くれることを頼む)
쳐다보다	知覚	엄마를 쳐다보다 (お母さんを見つめる)
취하다	従事	연락을 취하다 (連絡を取る)
취하다	表情	포즈를 / 자세를 취하다 (ポーズを / 姿勢を取る)
치다	加減	나이에 십년을 더 치다 (歳に10年を更に上乘せする)
치다	養育	누에를 치다 (蚕を飼う)
치다	付与	설탕을 치다 (砂糖をかける)
치다	授与	전보를 치다 (電報を打つ)
치다	操作	철망을 치다 (金網を張り巡らす)
치르다	経験	첫날밤을 치르다 (初夜を過ごす)
치우다	加減	물건들을 치우다 (物をかたずける)
키우다	養育	육남매를 키우다 (6人兄妹を育てる)
타다	操作	고깃배를 / 그네를 타다 (漁船に / ブランコに乗る)
타다	操作	버스를 타다 (バスに乗る)
타다	享受	월급을 타다 (月給を貰う)
타다	生産	커피를 타다 (コーヒーを入れる)
탓하다	処遇	사람들을 탓하다 (人のせいにする)
태우다	飲食	담배를 태우다 (煙草を吸う)
택하다	精神	주제를 택하다 (主題を選ぶ)
터뜨리다	生理	실소를 터뜨리다 (失笑をもらす)
터뜨리다	生理	울음을 터뜨리다 (泣き出す)
털다	操作	주머니를 털다 (財布をはたく)

털어내다	奪取	모자에서 흙을 털어내다 (帽子から土をはらう)
털어놓다	提示	비밀을 털어놓다 (秘密を打ち明ける)
틀어막다	封身	입을 틀어막다 (口を封じる)
파다	加工	흙을 파다 (土を掘る)
파하다	処理	학교를 파하다 (学校がひける)
팔다	授与	물건을 팔다 (品物を売る)
퍼붓다	提示	키스를 퍼붓다 (キスを浴びせる)
퍼다	操作	통장을 퍼다 (通帳を開く)
평가하다	精神	됨됨이를 평가하다 (人となりを評価する)
포기하다	心理	생각을/꿈을 포기하다 (考えを/夢を諦める)
폭발시키다	表情	감정을 폭발시키다 (感情を爆発させる)
풀다	操作	넥타이를 풀다 (ネクタイを解く)
풀다	処理	울분을 풀다 (鬱憤を晴らす)
풀다	身体	코를 풀다 (はなをかむ)
품다	心理	증오를/앙심을 품다 (憎悪を/恨みを抱く)
퐁기다	生理	냄새를 퐁기다 (匂いを発する)
피우다	飲食	담배를 피우다 (煙草を吸う)
하다	心理	고민을 하다 (悩む)
하다	心理	궁리를 하다 (思案する)
하다	心理	생각을 하다 (考える)
하다	従事	파출소에 신고를 하다 (交番に届出をする)
하다	従事	대학에 진학을 하다 (大学に進学をする)
하다	共同	연애를 하다 (恋愛をする)
하다	使役	섬을 보게 하다 (島を見させる)
하다	使役	시부모를 긴장케 하다 (義理の父母を緊張させる)
합치다	共同	힘을 합치다 (力を合わせる)
향하다	轉換	발길을 형님 댁으로 향하다 (足を兄の家へと向ける)
헤매다	経験	반나절을 헤매다 (半日さまよう)
헤치다	往来	밀림을 헤치다 (密林をかき分ける)
훔치다	奪取	돈을 훔치다 (お金を盗む)
휩쓸다	処遇	마을을 휩쓸다 (村を襲う)
흔들다	操作	손에 손에 태극기를 흔들다 (手に手に太極旗を振る)
흘리다	生理	눈물을 흘리다 (涙を流す)
힐난하다	処遇	민수를 힐난하다 (ミンスを難詰する)

用言結合分類一覽

共起格		-를格体言の主要なありか (.....で示す)			
主体内		身体など	客体的人間	客体的事物	場・時
7-1					
向格	-에			付与動詞	
他動詞	-에			從事動詞	
与格	-에게			授与動詞	
他動詞	-에게			提示動詞	
	-에게			事物使役動詞	
	-에게			強制動詞	
	-에게 ; -더러			言語動詞	
	(-로)			加工動詞	
				生産動詞	
				操作動詞	
				処理動詞	
				變成動詞	
				加減動詞	
非与格	-에게不可	対身動詞	対人動詞		
他動詞	-에게不可		行為動詞		
	-에게不可		処遇動詞		
	-에게不可		指令動詞		
	-에게不可		人間使役動詞		
	-에게不可		束縛動詞		
	-에게不可 ; -하고		比較動詞		
	-에게不可		共同動詞		
			養育動詞		
離格					
他動詞	-에서			奪取動詞	
	-로			轉換動詞	
	-라고 ; 처럼等			認定動詞	
7-2					
非与格	-에게不可			飲食動詞	
他動詞	-에게不可			知覚動詞	
	-에게不可			精神動詞	
		生理動詞			

共起格		-를格体言の主要なありか (.....で示す)			
主体内		身体など	客体的人間	客体的事物	場・時
7-3					
				心理動詞	
				表情動詞	
	-에게不可			着用動詞	
	-에게不可			脱衣動詞	
非与格	-에게不可			身体動詞	
他動詞	-에게不可			喪失動詞	
	-에게不可				所有動詞
	-에게不可			出役動詞	
7-4					
	-에게			事物受身動詞	
与格	-에게		人間受身動詞		
動詞	-에게 ; (-에게서)			享受動詞	
				受容動詞	
7-5					
	-에게不可			移動動詞	
非与格	-에게不可			外出動詞	
他動詞	-에게不可			離脱動詞	
	-에게不可			往來動詞	
	-에게不可			經驗動詞	

【図】用言別の対格の体言範疇分布

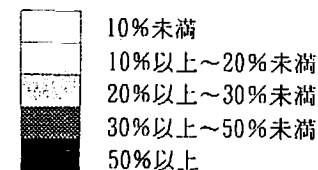
用言	抽象	現象	営為	活動	性質	事柄	体言	文	不完	事物	数量	時間	場代	位置	場所	団体	物質	具体	身体	人間	親族	人稱	動物	計		資料中高頻度の動詞結合の型
全用例	585	87	14	485	14	91	57	32	79	44	49	46	4	38	183	18	73	449	233	243	105	112	3	3044		
놓다	置く	3		1														5	4			1		14	놓다	付与
던지다	投げる										2							12	1					15	던지다	付与・操作
두다	置く	6		2					1			1			1			1			1		1	14	두다	付与・経験
걸다	掛ける	3		4														2				1		10	걸다	付与・提示
주다	与える・くれる	9		4							3						1							17	주다	授与
보내다	送る	4									1	7						2		1	2			17	보내다	授与・指令・経験
내다	出す	20	5	1							1				1		1	5						34	내다	授与・生理・心理
하다	する	15	4	5	209		9	2	4	5	2	2			1	3	1	2	1	8	6	3	2	287	하다	従事・心理・使役・共同
시키다	させる	1		6			1				2										1			11	시키다	使役
벗기다	脱がせる										1							9						10	벗기다	強制
끝내다	終える	2		9			1											1						13	끝내다	処理
부르다	呼ぶ	2					7											1	1	1	3	4		19	부르다	処理・処遇
짓다	作る	2	1	1	1	1					2	1						3	1	2	2	3		20	짓다	処理・表情・生理
쓰다	書く	2							1									10						13	쓰다	生産
타다	乗る	2	2												1		1	26					1	33	타다	操作
들다	挙げる・持つ	5					2											15	3					25	들다	操作・身体
열다	開く	2													1			9	3					15	열다	操作・身体
치다	打つ	5	2	3							1				1		2	2	3	1				20	치다	操作・授与
내리다	下す	8		3														2						13	내리다	操作・処理
풀다	解く	5	1	1														4	1					12	풀다	操作・処理・身体
쓰다	使う	11		1																				12	쓰다	操作・提示
잡다	握る	4		1							1				3			4	11	2	1			27	잡다	対身・操作・身体
만나다	会う	1									1							1		18	1	3		25	만나다	対人
따르다	従う		1												2					4	1	3		11	따르다	対人
부리다	使う	11		2											1			1						15	부리다	対人・提示
꺼내다	取り出す		1	7														6						14	꺼내다	奪取
늘다	聞く	5	8	11		3	1	1										1						30	늘다	知覚
보다	見る	16	2	6		3	1	1	9	2		1			3	5		12	3	14	6	8		92	보다	知覚・処理・経験
마시다	飲む	1									1						16							18	마시다	飲食
믿다	信じる	3		1			2		1	1						3						3		14	믿다	精神
알다	知る・わかる	10		1		4	7	5	10											1		1		39	알다	精神
좋아하다	好む								2									1		5	2			10	좋아하다	精神
바라다	望む	1					13																	14	바라다	精神
기다리다	待つ			1			3					1						3		2	2	2		14	기다리다	精神
찾다	探す・訪ねる	3					2		1						6			3		2	1			18	찾다	精神・対人

用言	抽象	現象	営為	活動	性質	事柄	体言	文	不完	事物	数量	時間	場代	位置	場所	団体	物質	具体	身体	人間	親族	人稱	動物	計		資料中高頻度の動詞結合の型
생각하다	考える	4				1			1			1	1		1			1		2	1	3		16	생각하다	精神・認定
쳐다보다	見つめる	1							1									1		8	3	5		19	쳐다보다	知覚
갖다	持つ	6		1															1	2				10	갖다	所有
가지다	持つ	9				2						1			2			4	2					20	가지다	所有
포기하다	諦める	5		3					1						1					2				12	포기하다	心理
느끼다	感じる	6		2	1		2		4															15	느끼다	心理
떠올리다	思い起こす			3				1										1		1	5			11	떠올리다	心理
잊다	忘れる	1		3		4						1			2							1		12	잊다	心理・喪失
뜨다	開ける	1																12						13	뜨다	身体
벗다	脱ぐ	2									1							9						12	벗다	脱衣
잃다	失う	6			1										2			1			2			12	잃다	喪失・心理
받다	受ける	11	1		19					1								7		1				40	받다	受身・受容・享受
얻다	得る	3				1	1		1						1		1			2				10	얻다	享受・受容
먹다	食う	8	1		6		1										4	1						21	먹다	受容・飲食・心理
사다	買う	2			2						1				4		4	15						28	사다	享受・受容・授与
가다	行く			4	1										6									11	가다	移動・外出
떠나다	発つ			1										3	9									13	떠나다	離脱
나가다	出て行く			1		2									20									23	나가다	離脱・外出
위하다	ためだ				4	2			4	1		1				1			1	8	5	10		37	위하다	後置詞
향하다	向かう	2											1	2	1			2	1	7	2	2		20	향하다	後置詞・転換
	用言なし	1			1		1	3	6	2		1			2					1				19		

それぞれの用言内で占める割合

凡

例



語研資料 15

言語研究 Ⅲ

1993 (平成5) 年 3 月

編 者 渡瀬 嘉明, 在間 進, 敦賀陽一郎

発行所 東京外国語大学 語学研究所
〒114 東京都北区西ヶ原 4-51-21
電 話 03-3917-6111 内 340